

2023年度インターゼミ・アジアダイナミズム班論文

# モンゴル帝国の衰退から見る 宗教と統治

～ロシアと中国の視点から～

学部生

野中柊希、高秀柄、中西昂翼、村上智也、日高健多

大学院生

杉由紀、須貝直行、小柳愛理、高橋繁世、  
二本柳誠一、斎藤千恵子、佐々木真友美

指導教員

金美德、水盛涼一

2024年1月27日

## はじめに

多摩大学のインターゼミ・アジアダイナミズム班は、13世紀にユーラシア大陸を支配したモンゴル帝国の研究を2017年から継続しており、本年は7年目となる。

各年の論文テーマは、2017年度が「モンゴル帝国とユーラシア興隆史」、2018年度が「モンゴル帝国の興隆と衰退」、2019年度が「モンゴル帝国と朝鮮半島」、2020年度が「パンデミックのユーラシア史とポストコロナ～モンゴル帝国史を起点としたペスト（黒死病）の欧州と日本の中近世史～」、2021年度が「倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～」、2022年度が「華人華僑とモンゴル帝国史」である。この活動は、2017年度から2022年度の論文をもとにした書籍「モンゴル帝国とユーラシア史」として、2023年3月に多摩大学出版会より出版された。

アジアダイナミズム班の研究は、モンゴル帝国という共通の切り口から年ごとのテーマを定め、それに基づいて参加する学生それぞれが自らの興味と問題意識をもとに小テーマを選んで研究・執筆する。その過程で、学生同士が協力し合って議論と研究を積み重ねることによって、テーマの理解を深めてきた。単に歴史の一地域を学ぶだけでなく、モンゴル帝国を切り口として、地理的な広がりという横軸と、現代までつながる歴史という縦軸をもってグローバル・ヒストリーという広い視点で議論し、現代社会の課題認識にも繋げてきたことが大きな特徴である。また、ゼミの構成メンバーが学部生と社会人大学院生であるため、それぞれの世代の問題意識と経験をもとに、多様な視点を共有できることも強みとなっている。

2023年度は過去の研究の蓄積をベースとしつつ、モンゴル帝国が衰退していく過程で、帝国の東と西でモンゴルの支配を覆した明とロシアに着目し、それぞれの権力の交代に宗教が大きな影響を与えたことを研究した。

本論文は三部構成となっている。

第Ⅰ部では、モンゴル帝国とその宗教、組織としての特徴についてまとめた。第Ⅱ部では、中国の視点として、元から明への移行に宗教がどのような影響を及ぼしたのか、また民衆蜂起をもたらした秘密結社である白蓮教とはどのような宗教であったのか、明以降、現代に至る中国での宗教の影響と統制、現代の中国系移民を支える秘密結社についても取り上げた。第Ⅲ部では、ロシアに視点を移し、「タタールのくびき」として語り継がれたモンゴルの圧政は、後世になってから作られた物語であり、様々に利用されたこと、ロシア地域がモンゴル支配下に入る過程、また独立する過程にロシア正教が及ぼした影響、その後のロシア帝国でロシア正教の位置付け、そして正教とカトリック、プロテスタントとの関係と、それらがロシアの歴史に及ぼした影響などについても論じた。

グローバルな視点で歴史を見つめ、理解し、歴史が現代にどのような影響を与え、課題につながっているのかを考察する。アジアダイナミズム班における研究によって、ゼミ生それぞれが現代社会の課題解決に貢献することを目指してゆきたい。

# 目次

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| はじめに                          | 6   |
| 目次                            | 7   |
| 背景                            | 9   |
| <b>第Ⅰ部 モンゴル帝国の宗教と組織</b>       | 13  |
| 第1章 モンゴル帝国の宗教                 | 14  |
| 第2章 モンゴル帝国の組織構造               | 16  |
| 第3章 帝国主義から見たモンゴル帝国            | 22  |
| <b>第Ⅱ部 中国の視点：元から明への移行と宗教</b>  | 26  |
| 第4章 モンゴル帝国の存亡に宗教はどう影響したか      | 27  |
| 第5章 モンゴル帝国の経済政策と民衆            | 32  |
| 第6章 明の初代皇帝・洪武帝と白蓮教との関係        | 38  |
| 第7章 元を倒した白蓮教とその変化             | 43  |
| 第8章 白蓮教は民衆にとって救いの革命家だったのか     | 50  |
| 第9章 白蓮教と現代中国の宗教統制             | 54  |
| 第10章 秘密結社はどう政治的影響力を及ぼしたのか     | 57  |
| <b>第Ⅲ部 ロシアの視点：モンゴルとの関係と宗教</b> | 60  |
| 第11章 タタールのくびき論争とその実態          | 61  |
| 第12章 ロシアとモンゴルの関係に影響を与えた宗教の役割  | 71  |
| 第13章 歴史における宗教と政治              | 80  |
| おわりに                          | 91  |
| フィールドワーク記録                    | 93  |
| フィールドワーク(1)：モンゴル帝国とロシアの関係     | 93  |
| フィールドワーク(2)：台湾の宗教と政権の関係       | 103 |
| 参考文献一覧                        | 116 |
| 最終発表スライド                      | 124 |
| 執筆担当                          | 142 |
| 謝辞                            | 143 |

## 図目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 図1：モンゴル帝国のアジア統一（13世紀1）    | 9  |
| 図2：モンゴル帝国衰退・明の時代（14－15世紀） | 9  |
| 図3：イラン・ムガル・オスマン（1560年頃）   | 10 |
| 図4：清の時代（1700年頃）           | 10 |
| 図5：欧米列強の侵略とアジアの抵抗（1915年頃） | 11 |
| 図6：現代（2019年）              | 11 |
| 図7：組織の発達段階モデル             | 20 |
| 図8：洪武～正統年間における反官憲行動の数     | 40 |
| 図9：蓮宗宝鑑における仏国土思想円融四土選土図   | 44 |
| 図10：円融四土総相を整理した表          | 44 |
| 図11：莫道石人一隻眼               | 48 |
| 図12：くびき                   | 61 |

## 表目次

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 表1：年表 モンゴル帝国・中国・ロシア・日本       | 12 |
| 表2：30年戦争からウェストファリア体制への経緯(年表) | 78 |

# 背景

図1：モンゴル帝国のアジア統一（13世紀1）



出所：<https://jugo-blog.com/history-of-asia2>

図2：モンゴル帝国衰退・明の時代（14-15世紀）



出所：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

モンゴル帝国の統治元(東)とジョチ・ウルス(西)： 2023年のテーマは、モンゴル帝国が衰退していく過程で、東西それぞれで最初にモンゴルの支配を靴替えした中国とロシアに着目した。

図3：イラン・ムガル・オスマン（1560年頃）

15-16世紀



出所：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

図4：清の時代（1700年頃）

17-18世紀



出所：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

図5：欧米列強の侵略とアジアの抵抗（1915年頃）



出所：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

図6：現代（2019年）



表 1：年表 モンゴル帝国・中国・ロシア・日本

| 世紀          | モンゴル帝国・中国   | 中国宗教の動き   | ロシア地域とモンゴル支配   | 日本  |
|-------------|---|---|--|---|
| 8-13<br>世紀  | 705年 武則天崩御、唐の復活<br>755年 安史の乱<br><br><b>1206年 モンゴル帝国の誕生</b><br><br><b>1271年 元 建国</b> | 694年 マニ教が中国に伝来<br><br><br>南宋末頃 <b>白蓮教</b> が生まれる(マニ教と弥勒信仰が習合した)<br>元時代 布教の公認を受けるも何度も禁止令  | 1223年 モンゴル帝国武将ジェベ等がルーシ攻撃開始<br>1227年 チンギス・ハン没、ジョチ・ウルスを長子バトゥが引継ぐ<br>1236-42年 バトゥがヨーロッパ侵攻(第一次、第二次)<br>1243年 ボルガ河畔サライをジョチ・ウルスの都と定める<br>1250年- <b>モンゴル帝国によるルーシ地域支配</b> が徐々に確立<br>1266年 ジョチ・ウルスがモンゴルから分離 | 894年 遣唐使廃止<br><br><br><br><br><br>1274年 文永の役<br>1281年 弘安の役                    |
| 14-16<br>世紀 | <b>1368年 明 建国(-1644年)</b><br>1383年 明で海禁政策開始<br><br>1567年 明が海禁を緩和                    | 1338年 白蓮教の反乱、鎮圧<br>1351年 <b>紅巾の乱</b> (北宋の末裔を名乗る教祖韓山童が河南で反乱を起こす(東系紅巾軍)呼応した安徽の紅巾軍配下に朱元璋)<br>1351年 湖北で徐寿輝が皇帝に(西系紅巾軍)<br><br>1368年 朱元璋が元を倒し皇帝 <b>洪武帝</b> に、白蓮教を禁止 | <b>1480年</b> ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了<br><b>モンゴル帝国のルーシ地域支配が終了(240年間)</b>   | 1350年 倭寇が高麗を襲う(倭寇の活動が激化)<br>1419年 応永の外寇<br>1467年 応仁の乱<br>1587年 豊臣秀吉によるパテレン追放令 |
| 17-18<br>世紀 | 1616年 清 建国(-1912年)<br>1644年 明が滅亡、満州族である清の時代へ  | 清政府は「白蓮教」を弾圧<br><br>1796年 嘉慶白蓮教徒の乱  | 1700年 クリミア・ハン国への貢納が終了  | 1612年 キリスト教禁止令<br>1639年 鎖国  |
| 19-20<br>世紀 | 1911年 辛亥革命<br>1912年 清が滅亡、中華民国誕生   |   |  | 1868年 五榜の掲示<br>1858年 米修好通商条約<br>1910年 韓国併合<br>1972年 日中国交正常化                   |



## 第Ⅰ部 モンゴル帝国の宗教と組織

# 第1章 モンゴル帝国の宗教

## 第1節 モンゴル帝国とシャーマニズム

モンゴル帝国におけるシャーマニズムは、北東アジアシベリアの遊牧民族であるツングース人発祥の信仰を源流としていられる(ゲレルト、2003、p.74)。

風間(2011、p.36)によれば、現代におけるツングース諸民族では、世界が三層になっており、空の上に天上界、地面の下に地下界(冥界)があるという世界観がある。ゲレルトは、モンゴル帝国時代のハーンらの世界観も同様に、天上界、地上、地下界の三層があるというものだったという(ゲレルト、2003、p.74)。これに加えて、モンゴル帝国のハーンらは、シャーマンのみが、地上界だけではなく天上界と地下界に接触できると考えていたとする。

シャーマニズムとは、宗教的聖職者であるシャーマンを中心とした呪術の一種であり、原始的な宗教行為である。シャーマニズムではシャーマンが術者となって神や靈魂と直接に接触・交流をし、託宣、予言、病気の治療などを行う。

シャーマンが神や靈魂と接触・交流する形態は、「憑依」と「脱魂」の2種類ある。モンゴル帝国の頃のシャーマニズムではルーシの信じるキリスト教や南のチベット仏教などと違い神世界の理論化がされておらず、神ごとの役割は存在しない。そのため、シャーマンが直接に接触、交流しお告げを聞く形で行われる。

## 第2節 チンギス・ハンとシャーマニズム

チンギス・ハンは、彼に仕えたシャーマンのココチュの影響を受けている。ココチュはコンゴタン族の出身であり、コンゴタン族は代々シャーマンの家系である。ココチュは、モンゴル人からテブ・テンゲリと呼ばれており、このテブ・テンゲリは常に目に見えない世界や未来のことを伝え、「神が私と話をし、私は天に昇ります」と話していた。彼はチンギス・ハンの前に来るたびに、「神は汝が世界の帝王になるだろうとおしゃっている」と言った。

チンギス・ハンの一族はシャーマニズム信仰をしていたが、他の部族や地域の人々を服従させていく段階で、様々な思想を取り込んでいく。この変化は大乗仏教の広がりとともに浸透していった。

## 第3節 モンゴル帝国の拡大策の裏にある論理

ゲレルトによれば、チンギス・ハンをはじめ、モンゴルのハーンらは、自らをテングリ(天上界、天上神)の子・使者・代理人と称して神格化し、「自らの発した命令をテングリの命と権威付けて」いた(ゲレルト、2003、p.71)。これは、他国・他民族の服従を当然のものとして要請する前提だったとする。ゲレルトは、モンゴルのハーンらの論理を次のように整理している。

- ①日の昇るところから日の沈むところまでの全地上やその統治権は、テングリがモンゴルのハーンたちに授けた
- ②モンゴルのハーンたちは、全地上の人びとに喜びと平和をもたらそうとしている
- ③モンゴルのハーンたちが成し遂げようとしているこのことを理解せず、服属を拒否した国々や人びとは、テングリの真意に反したことを意味し、討滅の対象になる
- ④モンゴルのハーンたちが成し遂げようとしていることを理解し、服属した場合、その国家・家族・財産を維持することができる
- ⑤全地上の国々は、未だモンゴルのハーンたちの統治下に治められていなくても、将来的には彼らの統治下に入るべき存在である
- ⑥モンゴル軍には、いかなる敵をも打ち破る強大な力がある(ゲレルト、2003、p.71)

上記③や④は、第Ⅲ部「ロシアの視点」において論じるように、モンゴルが他宗教に寛容であったことや、服属した民族には現地の統治権を認めたことを裏付けているといえる。

## 第2章 モンゴル帝国の組織構造

本章では、モンゴル帝国が広大な空間において、長期間に渡り繁栄した要因の一つとして組織構造に焦点を当て、同時期に繁栄したオスマン帝国と比較し、その特徴を顕在化させ、組織論で考察する。

### 第1節 モンゴル帝国の組織構造：誕生から繁栄へ

モンゴル部族のキヤト・ボルジギン氏に属していたテムジン（チンギス・ハン）は、モンゴル高原の諸勢力を統一して、1206年ヘンティン山脈内の集会（クリルタイ）で即位し、「チンギス・ハン」の称号を捧げられた。この即位をもってモンゴル帝国が建てられたのである。チンギス・ハンはモンゴル高原から西方、中央ユーラシアの草原の遊牧民の空間や、東は中国、朝鮮半島から西はイラン、ロシア・東ヨーロッパ地域までの都市と農村の空間をも領域に併合し、史上空前の大帝国となった（松田、2023、p.77）。

その組織構造は、牧民たちを95個の千戸群に再編成し、千戸の下にも、百戸や十戸という具合に、十進法体系で組織化していた。このやり方は草原国家の伝統であり、高原統合以前のタタル、メルキト、ケイレン、ナイマンなどの諸勢力でも、同じような組織になっていた。チンギスはそれを、すべて自分自身に引きつけた形で再編成し千戸長を任命した。この新国家の構成員たちは、出身・言語・容貌が違っていても、みなモンゴルであり、多民族混合のハイブリッド集団であり、いくつかのウルス（原義は「人々」、また犠牲的一族集団、のち転じて国家を指すようになる）を抱える多重構造の連合体として出発した。チンギスは、この新国家の統率と掌握方法として、周辺国家への対外戦争を繰り返すことによって、牧民たちに戦利品獲得の期待に応えることによって、心をついにまとめていた（杉山、1996、p.42）。

チンギスの他界後、オゴデイが大カーンとなり、モンゴル高原の中央部に、カラ・コルムの都城を建設し首都とした（杉山、1996、p.66）。

カラ・コルムに置かれた中央政府は、華北・中央アジア・イランの三大属領に対して、それぞれ徴税業務を行う『総督府』を設置し、徴税の際の強制執行力と、徴税対象となる所轄地域の反乱防止のため、それぞれの地域の各種軍隊の上に軍政統括本部を置いていた。これがモンゴルの占領地政策である。その統治方法は、モンゴルとしてはあまり立派とは言いかねる程度の出自の人物を中心に、モンゴルに準じるウイグルやキタン族の有力者を幾人か、総督府の長官クラスに据える。それに中央派遣のイラン系ムスリム財務官僚を組み合わせたうえで、在地の有力者をピックアップして下部組織とした。いったん組織化されてしまったあとのモンゴルの軍事力は強力であった。モンゴル帝国は、戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく、一種の自動装置のようになった。人間の輪と領域は、急速に広がっていった（杉山、1996、p.71）。

その原動力として、モンゴル軍少年部隊があげられる。モンゴル高原を出発する時は、10代前半の少年であったが、彼らは長い遠征の過程で、さまざまな体験をし、実地の訓練を通して、次第にすぐれた大人の戦士になっていった。このやり方ならば、モンゴル本土の千戸群は、そのまま維持される。そして、彼らは遠征先で、そのまま落ちてしまう。つまり、帝国の拡大に伴って諸方に散ってはいるが、モンゴル本土の高原にいる兄弟姉妹、一族親類と見えない糸でしっかりと結びついている。これがモンゴル・ウルスである（杉山、1996、p.79）。

## 第2節 モンゴル帝国の組織構造繁栄から衰退へ

チンギスから、オゴデイ、グユク、モンケ、そしてクビライへと大カーン（君主）が変わり、モンゴル帝国は当初のシンプルな軍事大国から大きく経済重視にシフトし、通商国家の姿勢を色濃く織り込んだ超広域の軍事・通商国家へと移り替わった。「オルトク」、トルコ語で「仲間」「組合」を意味する企業組織であり、クビライは大元ウルス政府の許認可行政の中にそれを組み込んだ。そこに国家管理の枠をはめたうえで、モンゴル権力の庇護を与えたのである。認可された「オルトク」は、モンゴルが公費をもって維持・管理する陸路・水路・海路の運輸・交通・宿泊機関を優先して使用できた。この仕組みを使って、モンゴルとタイアップした会社組織の商業・企業体の多面にわたる活動を通じて、内外から物流と通商で結びつき、歴史上かつてない規模と様相の「ユーラシア大交易圏」が13世紀末頃から出現したのである（杉山、1996、p.187）。

モンゴルの大カーンは、一種の機関であったと言える。あくまで成員の輿望と当人の能力本位で選出され、選出されたかぎりにおいて、全体を無条件に統率する。しかし、その権力は、そのカーン一代限りである。別の大カーンが就任すれば、中央政府をはじめ、一切の機構における顔触れは一変する。前代の特許状は無効となり、新規に授与されなければ、従来の権益は保持しがたい。大カーンの交替は、王朝の交替と変わらない。

杉山はカーン（カアン）の交代システムについて、下記のように説明する。

モンゴル帝国の衰退の始まりは、天暦の内乱から始まった。1328年、大カアンのイسن・テムルが上都で他界し、その宰相ダウラト・シャーが上都で皇太子アリギバを大カアンに即位させ、元号を天順と改元する。一方大都では、キプチャク軍団長エル・テルムがカイシャンの次子トク・テルムを擁して蜂起し、天暦と改元する。両京間で二か月のあいだ内戦がおこなわれ上都が陥落する。カイシャンの長子コシラが大カアンに即位するが、弟であるトク・テルムと対面し、その4日後に死去する。上都でトク・テルムがあらためて正式に大カアンに即位する。（杉山、1996、p.262）

この天暦の内乱は、モンゴル帝国の歴史にとって、大きな分岐点となった。これ以後、大元ウルスの中央政局は、キプチャク、アス、カンクリなどの諸族親衛軍団が掌握した。大カアンは、彼らのロボットと化した。そして全モンゴルを支えてきた大カアンを中心とするモンゴル共同体の一体感が急速に失われていく。モンゴル帝

国は、弛緩から解体への道をたどり始めた。天曆の内乱から、1388年のクビライ王朝断絶に至るまでの60年間は、軍閥執政の出現を契機に、モンゴル中央政権が落ち込み、ついには大統合が失われる過程であった。（杉山、1996、p212）

古来、黄河は大氾濫を繰り返していた。モンゴル治下だけでも1286年、1297年、1298年、1344年と大きな決壊がおこっている。しかも後期には政権の混乱もあって復興も進まず、河南・山東・淮北は、まったく荒廃した。黄河の治水工事に疲弊した民衆を徴用するなか、白蓮教という武装宗教集団が人々の心をとらえ、河南・江北一帯は争乱に包まれた。赤い布切れを目印にしたところから「紅巾」ともいわれた反乱諸集団は、互いの連絡を欠き、鎮圧軍に個別撃破された。長江の北で混乱が続いている間に江南では、張士誠・方国珍・陳友諒・朱元璋らの武装組織が、発生・成長した。この結果、江南から海運と大運河を通じて北の大都方面へ輸送される食糧や物資が届かなくなった。大都・上都など「首都圏」は、たちまち困窮した。クビライがつくりだした中央財政の2本柱、塩と商税による収入がほとんど失われ、経済による帝国統治のシステム全体が、機能しなくなった。（杉山、1996、p220）

その後、さまざまな大カアンが選ばれたが、その実態はクビライが建設した大元ウルスとは、ほど遠いものであった。モンゴル系の諸勢力はユーラシアの各地に残り、その後の新しい歴史を刻んでいった。しかし、世界帝国としてのモンゴルは、歴史の表面から消え失せた。14世紀後半のさまざまな変遷の中で、統合力が徐々に薄らぎ、かなりの時の幅をもって次第にフェイドアウトし、解体していった（杉山、1996、p225）。

現代の視点で振り返ると、モンゴルの大カアンのシステムは、奇妙なほどアメリカ大統領と共通する面がある。国家が、とにもかくにも人種主義を超えたところにあり、超広域の軍事・通商国家であることも似かよう。各州の上に立つ連邦政府の意味と性格にも、類似点がある。モンゴル大カアンも、アメリカ大統領も、理想を語る力強さにおいて、構成員の指示を受ける。しかし、共通の国家目標を設定する心意気を欠いたり、成員の過半の指示を失えば、その権力はたちまち瓦解するのである（杉山、1996、p.196）。

### 第3節 オスマン帝国の組織構造

オスマン帝国は1299年頃、イスラム世界の辺境であるアナトリア北西部に誕生し、その後アジア・アフリカ・ヨーロッパの3大陸に跨がる広大な空間を有した帝国となり、その歴史は600年と長期にわたる。その帝国の構造を読み解いていく。

小笠原は、オスマン帝国の王権を支えたシステムについて、「王族をコントロールする仕組みがある。兄弟の排除と奴隷の利用を軸とし、それにさまざまな慣習を付け加えることでまたその歴史の後半で鳥籠制度（皇帝が即位したら兄弟殺しがおこなわれていたが、殺さずに兄弟を宮殿内で隔離して暮らせる）を導入することで、王位継承争いを一定の範囲内に収めた。カリスマ的な指導者を失うと、親族間の争いによって短期間で瓦解するトルコ・モンゴル系王朝の短命さを、オスマン帝国はこのように克服したのだった。

また、王権を支える権力構造も、時代とともに発展し変革を遂げてきた。オスマン王家は、当初は封建諸侯のなかの第一人者に過ぎなかったが、15世紀から16世紀にかけて、スルタンを頂点とした中央集権体制を作り上げた。17世紀から18世紀にかけては分権化が進み、弾力性のある柔構造の権力体制へと変貌を遂げた。この権力体制にあっては、イスタンブルにおける複数のステークホルダーがお互いの利害調整をしつつ、場合によってはスルタン（権力者）の廃位が体制の崩壊を防ぐ安全弁として機能するなど、ある種の「民主的な」制度が確立していたのだった。（小笠原、2018、p288）

彼らは多層的なアイデンティティと世界観を持っていた。オスマン帝国君主は、最初期よりイスラムの信仰戦士を称し、王朝の発展にともなって、世俗のイスラム君主たるスルタンとして、イスラム世界を統べムスリム（イスラム教を信仰する人々）を導くカリフとして自任するようになった。16世紀のスレイマン1世は、世界の王たる天運の主にして救世主であるという自意識をも身にまとった。

さらに、トルコ系遊牧民をその起源とするオスマン王家は、ムラト1世のころからトルコ系の君主号である「ハン」を用い、オグズ族の貴種たるカユ氏族の裔だと自らの系譜を位置付けた。この正統性は、モンゴル、ティムールと続くモンゴル系王朝の脅威に対抗するために、ムラト2世時代に強く主張された。また、アレクサンドロス大王やローマ帝国の後継者としての自意識を持っていたといわれる。こうしたアイデンティティは重層的かつ多様であった帝国の領域内の統治に、正統性と柔軟性を与えていた。（小笠原、2018、p289）

次に、イスラムに関する考え方だが、初期オスマン朝の時代に充溢していた曖昧かつ融通無碍な習合主義的雰囲気は、15世紀中葉より進展した宗派化のなかで失われてゆき、16世紀後半ごろからは、スンナ派ハナフィー学派の学説に依拠したイスラム法が施行される「正しく」イスラム的な社会へと変容してゆく。しかし、オスマン帝国におけるイスラムのあり方は、教条主義的なイスラムとは一線を画するものだった。イスラム法を厳密に適応すれば容認しえない行為を、イスラムの名のもとに実践しカスタマイズしつつ適用されたイスラムは、「オスマンのイスラム」ともいえるものであった。（小笠原、2018、p290）

オスマン帝国は、先述したように、卓越した王位継承のコントロールシステムと、王権を支える柔構造の権力体制、多層的なアイデンティティと世界観、オスマンのイスラムによって長きにわたる存続を可能と考えられる。しかし、近代に入りオスマン帝国の特性であった柔構造が、均一かつ同質な国民国家を形成するという潮流が世界的に加速するなかで機能不全を起こすなどし、オスマン帝国は解体し、崩壊していった。（小笠原、2018、p292）

#### 第4節 結論: 両帝国の組織構造の違いを考察

ここでは、モンゴル帝国とオスマン帝国の組織構造の違いについて考察する。モンゴル帝国は、牧民たちを95個の千戸群に再編成し、千戸の下にも、百戸や十戸という具合に、十進法体系で組織化していた。この新国家の構成員たちは、出身・言語・容貌が違っ

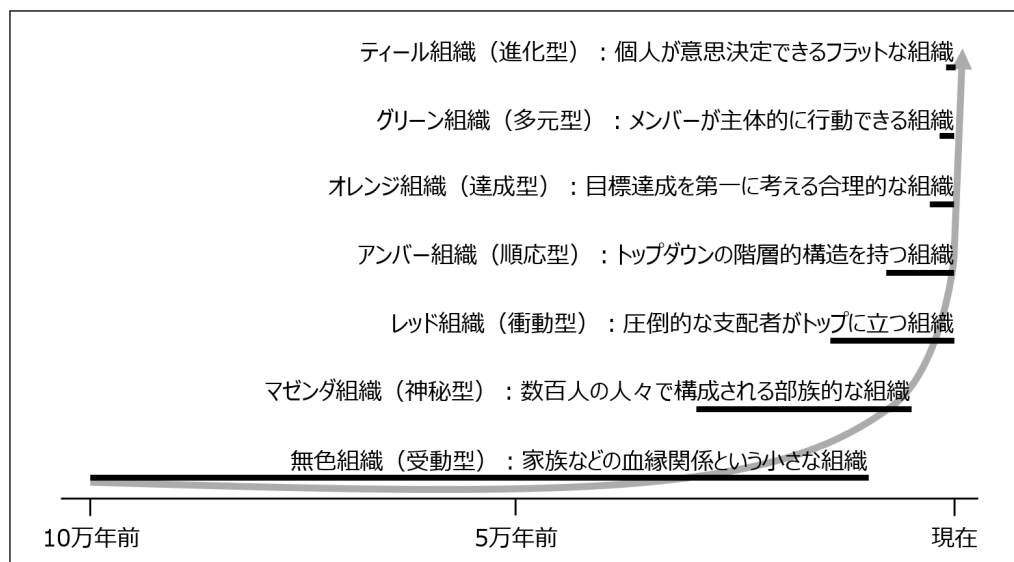
でも、みなモンゴルであり、多民族混合のハイブリット集団であった。大カアンのもとゆるやかな中央集権体制下で、いくつかのウルスを抱える多重構造の連合体であり、戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく、一種の自動装置のようになっていた。

一方でオスマン帝国は、オスマン王家を中心とした中央集権体制を作り上げ、時代とともにその体制を弾力性のある柔構造の権力体制へと変化させ適応してきた。加えて、イスラム法を用いて帝国を統制していた。

この2つの帝国は、一定の中央集権体制下で帝国を治めており、モンゴル帝国の多民族混合のハイブリット集団と、オスマン帝国の弾力性のある柔構造の権力体制は、多部族の統率が必須である大帝国有の適応力の高さが共通点であったと考える。

今回の研究では、両帝国の共通点は見出すことができたが、組織構造の違いを明確にし組織論で考察することは出来なかった。そこで、多摩大学2018年度のアジアダイナミズム班が、モンゴル帝国の組織づくりを、「ティール組織」（フレデリック・ラルー、2018）の組織の発達段階モデルをあてはめて考えているので、その事例を踏まえた上で、一つの仮説を提示する。

図7：組織の発達段階モデル



出所：ラルー「ティール組織」（2018）より筆者作成

先の研究では、個人がいかなる集団へ所属するかがモンゴル帝国の社会的行動を規定し、集団同士の横のつながりや統属関係もそれぞれの集団のもつ父系血縁関係によって規定されていたということ、上述した厳格な組織構造、ヒエラルキー、それに基づき成果を上げた人間が評価され出世する形であることから、オレンジ組織（達成型）としている。同時に、国が広がっていくと同時に、広大な地域とさまざまな部族・宗教を寛容に受け入



れていたことから、グリーン組織（多元型）に進化していた可能性も考えられるとしている。（多摩大学、2019、p.36）

この研究結果を踏まえ、異なった角度から考察してみる。ラルーの「ティール組織」では、最も進化した組織の発達段階がティール組織（進化型）である。しかし、組織の発達段階モデルを逆に考えてみたい。

杉山は、「モンゴル帝国は、戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく、一種の自動装置のようになっていた」と記述している(杉山、1996、p.71)。これは、ラルーが「ティール組織」の事例研究から導き出した3つの突破口、すなわち、①自主経営（支配型の階層構造から集合知・権力分散・流動的システムへ）、②全体性（自分らしさを隠す「仮面」を外し、心の奥底にある全体性を取り戻す）、③進化する目的（未来を予測しコントロールするのではなく、組織に耳を傾ける）に照らすと、何れの項目も満たしている可能性が高いと解釈できる。この事例だけで、モンゴル帝国はティール組織（進化型）であったとは言えないが、少なくともモンゴル帝国が大きく経済重視にシフトする前のシンプルな軍事大国であった時には、その素地があったと言える。つまり、ラルーが提唱した組織の発達段階モデルは、無色組織（受動型）から順に発達するだけでなく、逆の流れもあり得ると考えることもできる。あくまでも仮説の域を出ないが、この仮説を本章の結論とする。

## 第3章 帝国主義から見たモンゴル帝国

モンゴル帝国は、歴史上最大規模の帝国であり、世界的に大きな影響をもたらした。一方、19世紀に世界の列強国家が取り入れていた帝国主義は、国家間の対立をもたらすと同時に、グローバリズムをもたらしたといえる。本章では、モンゴル帝国を近代の帝国主義の視点から分析し、現代のグローバリズムの流れを読み解くための判断材料としたい。

### 第1節 帝国主義とはなにか

帝国主義と聞くと、軍事的な進行をして領土を広げていくような考え方をイメージする人は多いのではないだろうか。木谷は著書で下記のように述べている。

帝国主義 (imperialism) は、十世紀末に人びとが直面した世界分割とそれをめぐる国際対立の激化という新しい政治現象を呼ぶのに用いはじめた言葉であった。もともと imperialism は古代ローマの他民族支配や帝国を意味するラテン語 imperium に由来し、十世紀半ばまではナポレオンなどの専制的な皇帝支配とその対外政策をさしていた。これが一八七八年イギリスの自由党系一新聞によって保守党政府の対露強硬外交および国内世論での『排他的愛国主義』の風潮を非難するのに用いられたのが、この言葉の今日の意味での使用例のはじめといわれる。

以来それが自由党の選挙キャンペーンで保守党非難に多く用いられたことからわかるように、この新造語は敵を非難する政治闘争の用語であった。しかし、一八八〇・九〇年代列強がこぞって対外膨張に乗り出すにつれ、自由党も含めイギリスの世論は帝国主義の味方になり、それが経済を繁栄させ、国家の富と威信を増大させるプラス・シンボルとして歓迎するようになった。(木谷、1997、p6)

帝国主義は多くの学者によって研究されており、代表的な学者としてはホブソンとレーニンが挙げられる。竹内によれば、ホブソンは下記のように帝国主義を考えた。

論争のすべてはホブソンから始まった。JA.ホブソンが『帝国主義』を書いたのは1902年、19世紀末に開始された列強によるアジア・アフリカにおける植民地分割が、南アフリカ戦争の終結において完了した時点のことである。一国によってではなく近代化した産業・商業国家群による20年という短期間におけるアジア・アフリカ地域への競争的な膨張政策の総体を帝国主義と呼ぶことができるが、ホブソンは、その要因に関して列強諸国内の大企業経済の成立と過剰な資本蓄積そして海外資本輸出という帝国主義へのいわゆる経済要因論を提起した。彼の『帝国主義』以降、古典的帝国主義時代の形成の要因に関する、経済か非経済かの論争がほぼ百年間にわたって続けられることになったのである。

ホブソンの書によって開始されたこの論争は、十数年後にV.Iレーニンによってホブソンの資本輸出に関する論理が高く評価され、かの『帝国主義の五つの指標』の重要な一つとして位置付けられたことによって、大いなる対立の道へと入った。資本輸出=植民地分割論はいわゆるホブソン=レーニン・テーゼあるいはホブソンとレーニンによる帝国主義の経済的解釈（資本主義的帝国主義論）などと称されるようになり、論争においては、批判側も弁護側も、このテーゼ・解釈自体は前提として議論してきた。ホブソンとレーニンはともに、資本輸出を主たる要因として植民地分割・帝国主義を論じてきたというのである。（竹内、2015、p.3）

このような考え方から約50年後には、イギリスの歴史家であるギャラハーとロビンソンが「自由貿易帝国主義論」を打ち出した。木谷によれば、その内容は下記のようにまとめられる。

帝国主義に『公式の』帝国主義（formal imperialism）と『非公式の』、あるいは領土獲得より貿易の拡大を求める「自由貿易」帝国主義（informal imperialism、imperialism of freetrade）の二種を認め、1950年代に19世紀のイギリス帝国主義をこの二つのタイプの組み合わせから説明したのが、イギリスの歴史家J・ギャラハーとR・ロビンソンであった。ホブソンやレーニンをはじめそれまでの帝国主義では、世界の分割によって特徴づけられる新しい帝国主義は十九世紀最後の四半世紀に始まり、それ以前（自由貿易の全盛時代、1840～70年代）に及びとはむしろ植民地の拡張に反対であったとして、19世紀は帝国主義と反帝国主義の2つの時代に截然と分けられていた。しかしギャラハーとロビンソンは、大英帝国が海外に広大な版図を築いたのがむしろ自由貿易時代だったことに注目し、この世紀を通じてイギリスの膨張は連続的で、上記のような段階による区別は成り立たない、と主張した。すなわち二人によれば、イギリスの膨張ではこの間『できる限り非公式な支配によって貿易をし、やむをえないときにだけ支配して貿易をする』という『非公式』と『公式』の、たがいに補いあう、転換可能な2つの帝国主義の方式が併用されていたのである。（木谷、1997、p.11）

## 第2節 モンゴル帝国と帝国主義

モンゴル帝国は、この「自由貿易帝国主義論」と近い考え方を持っていたことが伺われる。杉山はチンギス・ハンの軍事戦略について、「外征に先立ち、チンギスとその周辺は、自軍にたいしては、徹底した準備と意志統一、敵方については、これまた徹底した調査と調略工作をおこなった。いずれも、たいいてい二年をそれにかけた。できれば、戦うまえに敵が崩れるか、自然のうちになびいてくれるように仕向けた」と書いている（杉山、2008、p.126）。

モンゴル帝国は外征時に内部崩壊または降服を待った後、相手に対立すると武力行使に出ていた。木谷の表現を借りれば、初めに「公式」に領土拡大を目指し、それがかなわないようであれば、「非公式」に領土を拡大しようとしていたことがわかる。

そして、モンゴル帝国が現中国の領土を支配したことによって、人や物の流れが活発になり、経済的に発展したことも確かである。平野は、アジア政治外交史の視点から次のように述べている。

まさに当時最強の騎馬兵力を駆使して、東は朝鮮半島（そして台風で攻略に失敗した日本）、西はヨーロッパにまで勢力を拡大し、それまで世界各地において比較的完結したかたちで展開していた諸文明・地域世界を一気に結び付けることに成功した。そして、乾燥したユーラシアの草原をまたぐ交易路を確保して路牌（通行手形）を発行し、隊商に安全を保障することによって、陸路による東西交流を飛躍的に発展させた。（平野、2007、p.89）

領土を拡大することによって経済活動が活発になり、世界の一体化が一気に進展するということが大いに考えられる。モンゴル帝国が東アジアを支配したことにより、西洋から商人や使者の移動が活発になり、世界の距離感が近づいた。

一方、木谷は、近代の帝国主義的な影響で進んだ世界の一体化には負の側面もあったとする。

海外での植民地獲得競争は、大航海時代にヨーロッパ諸国が新大陸やアジアに進出して以来のことで、とくに目新しいことではない。しかし、帝国主義最盛期の獲得競争は世界の隅々に広がり、政治的に独立国だった中国・トルコ・イランなどアジアの旧大国をも巻き込んだ点で違った。また注目すべきは、この競争にイギリス・フランス・ロシアなどすでに広大な植民地をもつ旧帝国のほか、ヨーロッパの新興国ドイツ・イタリア・北米のアメリカ合衆国、アジアの日本なども加わって、対立が文字通り世界的な広がりを持つようになったことで、それはついに第一次世界大戦を引き起こした。

一方、この時代につくられた支配奴隷関係や国際対立の広がりには、交通・貿易・通信の目覚ましい発達による人・物・情報のさかんな行き来がともなっていた。すなわち、すべての大陸で進んだ鉄道網の建設や大陸間を結ぶ大型蒸気船の航行、海底電線の敷設は世界の貿易を一八七〇年から一九一三年のあいだに四倍にふやし、またほぼ同時期にヨーロッパから新大陸はじめ海外にわたった移民の数は三〇〇〇万人にのぼった。こうして近代初頭に始まった世界の一体化はこの時代に、人と物の大量移動をつうじて、ついに完成した。しかしわれわれは帝国主義の下で進んだ世界の一体化の陰で、同時に新たな亀裂と分裂が生み出されたことを忘れてはならない。まず、列強間の世界分割をめぐる争いは先進諸国家間、民族間の関係を引き裂いたし、また帝国主義の支配と搾取は先進工業諸国と一次製品の生産に特化され

たモノカルチャー経済地域との構造的格差をいっそう広げ、一方の進歩と豊かさ、他方の停滞と貧困のコントラストをきわだたせた。そしてこの差異はまた両地域に住む人びとの心にも『西洋』の文化と他の世界の野蛮の対比、白人と有色人種のあいだの人種差別とこれにたいする敵意の亀裂をいっそう深めたのであった。（木谷、1997、p.1）

### 第3節 結論：モンゴル帝国は帝国主義だったのか？

近代の帝国主義がもたらした世界の一体化と分断は、モンゴル帝国と比較してみると、その時代の国際状況やテクノロジーの進化レベル、人々がどのような暮らしをしていたかなど、様々な要因が複雑に絡み合った結果であったとも言えないだろうか。

つまり、物流や人流といった視点で見れば、モンゴル帝国が帝国主義時代の帝国と共通点があることが分かったが、モンゴル帝国が帝国主義であったのか、という点は断定できなかつた。帝国主義の解釈は多様であり、数多くの要因から帝国主義というものが構成されているため、帝国主義の観点から国際情勢を分析することは、時代ごとの各国の経済状況や人・物・金の流通状況なども考慮する必要があるだろう。

第Ⅱ部 中国の視点：  
元から明への移行と宗教

## 第4章 モンゴル帝国の存亡に宗教はどう影響したか

チンギス・カンが建国したモンゴル帝国、続く元朝はユーラシア大陸の東の草原に端を発し、13世紀～14世紀に朝鮮半島から東ヨーロッパまで世界の陸地面積の33%を占める面積を所有するまでに至った。本章では、元来は地域に定住しない性質をもつ遊牧民であったモンゴルが、大陸の西側に版図を広げ、“世界最強”といわれる国を作り上げた政権・組織運営の特徴を探るとともに、元朝の滅亡につながった白蓮教が王朝末期に住民に浸透していく過程を明らかにすることで、現代中国、国際社会、日本社会が学び得るものは何かを考察する。

モンゴル帝国の組織体制・制度の特徴については、アジアダイナミズム班の7年にわたる研究の中で、また数々の研究ですでに示されている。こうした先行研究も参考にしながら、論を進めたい。

### 第1節 モンゴル帝国繁栄と滅亡の歴史～モンゴル帝国の組織運営～

#### ①統制

モンゴル帝国の組織の特徴として挙げられるのは「統制」と「寛容」である。まず「統制」について、杉山正明はその著書『モンゴル帝国と長いその後』の中で、次のように記述する。「チンギスとモンゴルを語るとき、とにかくやたらに強かったというイメージがある。……（中略）……モンゴル遊牧民たちはきわめて純朴にして勇敢、命令・規律によく従った。当時、大金国でも南宋・西夏、……（中略）……中央アジア・イスラーム地域でも、……（中略）……ルーシという名のロシアやヨーロッパにおいても、武将間の不和・嫉妬・足引きはごくありふれたことで、手にしたせつかくの勝利がひっくり返ることもしばしばあった」（杉山、2016、p.122-123）、「『敵対するものは全員容赦なく抹殺する』と一般的に評価されている」（多摩大学、2023、p3）など、生活の場を力で得るといふ遊牧民ならではの性質が根底にあることが伺われる。

版図を広げるには、武力の強さが欠かせない。遊牧民であるモンゴル族は、糧すなわち獲物を得るために馬に乗ることが欠かせず、生まれながらの兵士であることが指摘されているが、なかでも精強な軍隊組織を作り上げた理由について、杉山はこう指摘する。

ユーラシアにおいて、チンギスとその一族をいただくモンゴル軍は実によく統制され、組織化された軍隊であった。……（中略）……徹底したピラミッド式のシステム構築は、ここまで見事に仕立て上げた例は他にほとんどみあたらない。……（中略）……チンギスと近親者、チンギス自身の選抜・編制にかかる多人種・多言語・多文化の首脳部にむすびつけられた。「モンゴル」とされたものたちは「チンギス一族とともに富貴を享ける」ことを合言葉に首脳部からの使命に従った。「モ

ンゴル共同体」といっている。モンゴルの第一の強味は、その組織力・結束力にあった。（杉山、2016、p.124-125）

さらに戦闘においては、用意周到な計画性、戦略も指摘されている。杉山は、「戦わない軍隊、何といっても、周到すぎるほど周到な計画性が印象深い。外征に先立ち、チンギスとその周辺は、自軍にたいしては、徹底した準備と意志統一、敵方については、これまた徹底した調査と調略工作をおこなった」（杉山、2016、p.125）とした。「チンギス・カーンは戦わずして勝つ」（多摩大学、2023、p.3）と言われる由縁である。

モンゴル帝国は、朝鮮半島から東ヨーロッパまでの広大なユーラシアの国土を有した。当然ながら、さまざまな歴史・宗教を持つ人民を統治することになる。その際、遊牧民族の生活上の単位を活用し、それぞれの小単位の組織の長に運営を任せ、全体的に統制していた。広大な土地を治めるために地域ごとの分掌が機能しつつ、中枢の強力なリーダーが掌握・統制できていたことが、広大な版図を可能にした要因であると考えられる。

## ②寛容

冷徹な統制・強さの一方、広大な領土、多様な人民を治めたモンゴル帝国の統治の特徴には「寛容」もある。杉山は、「きわめて注目すべきは、モンゴルはモンゴルたる人の命を徹底して大切にしたことである。……（中略）……命を軽視すれば組織は瓦解することを痛切に感じ、国の柱とした」（杉山、2016、p.129-130）とする。

さらにモンゴル帝国は、朝鮮半島から東ヨーロッパまでの広大なユーラシアの国土を有した。当然、さまざまな歴史・宗教を背景に持つ人民を統治することになる。その姿勢について、杉山は「モンゴルは宗教に比較的寛容であった。色目人はその多くがムスリムであり、モンテ・コルヴィノは大都でカトリックを初めて布教した。チベット仏教は元の歴代皇帝の崇敬を受け、またクビライに使えたラマ僧のパスパは、チベット文字をもとにモンゴル語を表すパスパ文字を作った。……（中略）……あからさまな人種差別はほとんどなかった。能力、実力、パワー、知恵、技術、識見、人脈、文才など、人にまさるなにかがあれば、どんどん用いられた」とする。（杉山、2016、p.130）

なお元代の主な宗教は以下である。

- イスラム教（清真教）：多くが信仰
- キリスト教：初期の支配層の一部にネストリウス派の影響
- チベット仏教（ラマ教）：宮廷により保護される
- 白蓮教：元末の反乱に影響

征服した地域の統治はその地域の人材に任せるなど、その「寛容」政策がモンゴルを拡大にした一方で、杉山は、「モンゴルとその国家は、仲間うちに異常に甘い体質をもうひとつの伝統とすることにもなった」（杉山、2016、p.130）とも指摘する。あらゆる民族・文化・宗教を受け入れることは、組織の統制が効いている時には国力を豊かにするた



めに機能するが、国勢が衰え、ガバナンスが効かくなると、遠心力に転じる。元朝末期、天災をきっかけとして白蓮教が人民の間に広まり、元朝の滅亡につながったことはまさにそれを示しており、ダイバーシティとインクルージョンを掲げる現代社会においては、組織の多様性を生かすことに「寛容」でありつつ、いかに求心力を維持するかの「統制」が組織運営のカギになると考える。

## 第2節 モンゴル帝国の滅亡と宗教～宗教・秘密結社はいかに組織に浸透するのか～

### 第1項 秘密結社とは

「寛容」政策によってさまざまな宗教を取り入れることになったモンゴル帝国であるが、元末の反乱に影響した白蓮教はいかに組織に入り込み、王朝を滅亡させたのだろうか。山田の「中国が激動するとき、必ず秘密結社は現れる」（山田、1998、表紙）という言葉に着目し、白蓮教・秘密結社が組織・人民にもたらす影響を見る。

そもそも「秘密結社」とは何か。山田は、秘密結社を「胡散臭い事象」ととらえると、1949年の中華人民共和国成立以前の伝統中国社会を理解する際に、大きな誤りを犯すことになると指摘する。（山田、1998、p.5）かつての中国民衆にとって、秘密結社は決して稀有な存在ではなかった。山田に拠れば、「中国民衆にとって、秘密結社という存在とそのメンバーは、身のまわりのどこかに必ず存在するなじみ深いものであり、けっして珍しいものではなかった。「秘密結社」という社会観も、総体として機能している伝統中国社会という均衡の体系を構成する一部分であった」（山田、1998、p.5）のである。

山田は、秘密結社を「血縁や地縁の原理によらない、任意加入の、位階制に応じた秘儀を伴う集団である」（山田、1998、p.11）と規定している。さらに「秘密結社とは、外部の視線を拒絶する障壁（つまり秘密）に守られた秘儀を核心として備えていなければならない。……（中略）……したがって秘密結社への加入とは、俗なる外界から隔てられた秘儀への参入であり、ある一線を越境していく行為として意識される」（山田、1998、p.13）として、秘密結社の特質を、①秘儀、②試練と制約をともなう加入儀礼、③広域的な相互扶助の実現としている。現代の日本ではなじみの薄いものではあるが、アメリカやヨーロッパなどでは存在しており（フリーメイソンなど）、山田は「秘密結社自体がいかなる自然・社会環境を揺籃として生成されてきたのかを明らかにすることで、秘密結社を歴史的所産として位置付ける」（山田、1998、p.15）視点が必要だと指摘する。

### 第2項 白蓮教と紅巾の乱

では、白蓮教はどのような宗教だったのか。山田は、「白蓮教—白い蓮の花の教えという美しい名前を持った宗教結社は、教義体系に内包される強烈なルサンチマンの情念

と、その暗い海から立ち現れる現存秩序に対する拒絶、ないし呪詛ゆえに歴代王朝国家より「邪教」の刻印を押されて禁圧しつづけられた」（山田、1998、p.18）と表現する。

それでは、白蓮教の世界観とはいかなるものだろうか。白蓮教の教主らは、世界の滅びを意味する「劫」、つまり「終末への予言と確信」（山田、1998、p.19）を、白蓮教における宗教的世界観の基層としている。

滅びの際には天も地も人も、その本来備える「気」の運行を停止し、その結果光は消え、大地は生命をはぐくむ力を失う。海は干上がり、天は崩れ、地は裂ける。しかし目前に迫っていると予感される滅びこそ救済の契機となる。「天割れ地裂け」る時、「真仏」が現れる。「劫」の闇から人々を救済するために、弥勒仏が人間として地上に転生するのである。……（中略）……現存する一切の破滅、弥勒仏の転生、選良として救済される教徒といった世界と時間の解釈こそ白蓮教と総称される宗教結社を、まさしく「邪教」＝白蓮教たらしめた革新的教義の一つであった。このような構造の世界観を備えた宗教結社は十四世紀以降、ほぼ今日に至るまで流転、消長をくりかえしながら中国社会の底部において再生産されつづけていく。

（山田、1998、p.20）

こうした「劫」からの救済という世界観が、末期的症状を呈していた十四世紀の元朝に浸透したことは想像に難くない。

「白蓮教」を歴史の表舞台に登場させたのが、巨大な元朝を滅ぼした大反乱「紅巾の乱」であった。

元朝末期の1343年から1344年にかけて、黄河がしばしば決壊をくりかえし、周辺地域はたびかさなる水害に苦しめられた。1351年、元朝は氾濫によって変わった黄河の河道を元に戻そうとする大規模な治水工事を決断し、軍2万人に加えて民夫15万人の徴発を行った。しかし、山田によれば「水難が続き、疲弊しきっていた黄河流域の農民にとって、大工事の開始はより新たな負担の増大を意味するものにしか過ぎなかった。元朝に対する怨嗟の声は募っていく」（山田、1998、p.20-21）結果となった。

白蓮教首であった韓山童、劉福通らは、この状況に目を付けた。あらかじめ黄河の旧河道に片目の石人像を埋め、「石人一隻眼、挑動黄河天下反」（石人は一つ目、黄河を揺り動かし天下は反するであろう）」という謎めいた言葉を広めた。そして片目の石人が掘り当てられた際の人々の動揺に乗じて韓山童は、自分は宋朝皇帝の子孫であり、元朝を滅ぼし中国の主となるべきであると称し、反乱の準備を進める。反乱の計画は事前に発覚し、捉えられた韓山童は刑死したのだが、難を逃れた韓山童の遺児、韓林兒を旗頭とした蜂起が起こった。この際、紅巾を頭にまとい味方の目印としたため、一連の反乱は「紅巾の乱」と呼ばれる。これに呼応する動きが次々と広がり、わずか数年のうちに中国大陸は紅巾軍の領袖らによる群雄割拠へと一変した。そして、もはや元朝にこの反乱を終息させる力はなかった。

なお、白蓮教首・韓山童、息子の韓林兒は、自らを「明王」「小明王」と名乗っていた。これは、元朝に先立つ唐・宋時代、陸と海のシルクロードを通して人・モノとともに中国に伝来した「マニ教」（明教）に由来する。その教義の象徴は「二宗三際説」で、「二宗」とは光明と暗黒、善と悪、正と負という対立と葛藤、抗争の結果であり、「三際」とは世界の歴史的発展の三段階である。まず、原初においては世界は欠けることなく至福であるが、やがて暗黒の世界の挑戦により至福は終わりを告げ、悪しきことがはびこる。暗黒が晴れるのは最後の段階においてであり、明王が出現し、光明が回復し、最終的な救済は達成されるのである。「現存する世界への呪詛（目前に存在する世界は限りなく悪いと認識される）ゆえに破局を予感、ないし希求するとともに、破局の闇から完全に満たされた光り輝く理想世界への救済を確信する原白蓮教の世界観を鑄込まれていた。マニ教こそ、「白蓮教」というパンドラの箱を開くもっとも重要な鍵の一つにほかならなかった」と山田は記している(山田、1998、p24)。このようにして、中国は「秘密結社」が内在する社会となったのである。

### 第3節 結論

13世紀から14世紀にかけて武力による征服で領域の拡大を続けたモンゴル帝国は、広大なユーラシア大陸の多様な人・モノを受け入れ、文化を花開かせてきた。一方で、元朝末期、天災と失政により貧しさにあえいでいた住民が至福を希求するにあたり、西側への領土拡大と交流の中で受け入れることとなった宗教（白蓮教）＝秘密結社が光明・救済を求める大きなうねりとなって、皮肉にも王朝を滅ぼす原動力となったことがわかった。

白蓮教をはじめとした秘密結社は、明、清以降に続くその後の中国社会にも存在し、反乱を起こすなどして時の政権や社会に影響を与えている。それらの成り立ちや社会的機能が、元時代の白蓮教とどのような共通点、または違いがあったのか、当時の社会への影響がどのようなものだったか、また現代中国社会へのつながりの有無や組織運営の特徴などについて、引き続き考えていきたい。

## 第5章 モンゴル帝国の経済政策と民衆

元朝を弱体化させた紅巾の乱の勃発が、白蓮教を支持した農民を含む民衆の生活苦難が起因となったことは、前章で示した通りであるが、自然災害の影響に加えて、民衆の生活を困窮させた大きな要因として、元朝の財政難、紙幣である交鈔の乱発、専売制度、チベット仏教の保護といった政策面の失敗が挙げられる。

元朝の経済政策の基本は、遊牧民の生活に欠かせない交易活動に必要な銀を獲得するために共通通貨を各国に広めていったことがあり、「グローバル化の先駆け」（吉澤、2017、p32）と称される。2018年度、2021年度のアジアダイナミズム班の論文でも、「交鈔などの通貨紙幣について銀を基軸に塩引・紙幣等を用いて大がかりに展開したモンゴル帝国時代の経済・通貨システムは、近代西欧型社会でのシステムの先駆けとして、きわめて注目し得るものであった」（多摩大学、2019、p52）と論じている。しかし、モンゴルの経済・通貨システムが広範囲に発達していたとはいえ、政策の変更が民衆の生活を直接脅かすほど一般庶民に浸透していたのだろうか。本章では、交鈔の乱発、専売制度、チベット仏教の保護が、どのように民衆へ影響したのかをあらためて確認する。

### 第1節 交鈔の庶民への普及

まず、交鈔と庶民の関係性についてである。

矢田は、「元の中央政府は大量に銀を調達し、チベットに対する統治を強化しただけではなく、チベットの通貨制度を変えて、チベットの upper 層部から庶民まで全て中央政府の公布施行する通貨制度を守るようにさせた。それ以来、チベットでは金は次第に貨幣の主流から退き、銀が主要な流通貨幣になった」（矢田、中外日報2023年6月9日）と述べ、通貨政策が庶民まで浸透していたとする。高橋も、「紙幣は両税や折帛銭等の納入に使用されていたことが明らかのように、農民層にも流通範囲を拡大されていた」（高橋、1994、p254）とし、農民層へも紙幣が浸透していたことに言及している。

興味深いのは、紙幣が民間で独自の発展を遂げていったということだ。このことについて、宮澤は下記のように考察している。

歴代旧銭・廟宇銭が元朝の正式の通貨でないだけでなく、元朝の通貨政策として銭貨の行使を認めていない状況下で、支鈔半分銭は、歴代旧銭や廟宇銭と中統鈔を繋ぐ役割を果たしたのである。このこと自体支鈔半分銭が官鑄でないこと、政府の禁令に反して歴代旧銭等が民間で通用していたことを示している。支鈔半分銭の通用は、民間が独自に銭鈔併用のルールを決め、鈔の価値を安定させるためのものであったと認められる。（宮澤、2005、p6）

これらの研究から、交鈔が一般庶民へも幅広く普及していたことが確認できた。交鈔に関わる経済政策が、庶民へ強く影響したことも想定できる。財政難を打開するための増税や課税、交鈔の発行増加による貨幣価値の下落によって引き起こされたインフレーション

ンは、庶民生活へ相当な打撃となったであろう。庶民の経済活動の変化について、檀上は「民衆は交鈔を紙くず同様にみなし、民間では物々交換が盛んに行われるようになる。貨幣経済は完全に破綻し、自然経済に戻ってしまったわけである。」（檀上 2020,p.31-32）と述べている。

長い年月をかけて庶民に浸透していった貨幣経済の基盤が崩れたことが、モンゴル帝国崩壊の序章となったわけである。

## 第2節 専売制度の庶民への影響

専売制度も、庶民の経済活動を圧迫する大きな要因となった。元の国家収入を支えた専売品は、塩と茶であった。高橋は、茶の専売について下記のように説明している。

収入面では、前引『元文類』卷四〇「経世大典序録・茶法」に続けて

次年（至元十四年）、定長引、短引、是歳征一千二百余錠。

とあり、錠という銀の重量単位が用いられていることが明らかな如く、至元十四年には茶税の徴収額が中統鈔に換算されている。これは茶税が主に中統鈔で納入されていたことを意味するに他ならない。（高橋、1994、p.277）

塩の専売税についても、『元史』第九四食貨志二「塩法」項を取り上げ、「塩の専売収入でも最も大きな役割を占めていた兩淮・兩浙塩において、塩引の価格が中統鈔で表示されたり、塩引が中統鈔で購入されたりしていたことが明らかになる。（高橋、1994、p.277）」とする。いずれも中統鈔、つまり庶民が使用する貨幣で取引されていたということである。

では「塩引」とはどのような役割を果たしていたのか。矢沢は、次のように説明している。

クビライ・カアンは、中国の伝統的な塩の専売制を受け継ぎ、中央財政を支える柱と決めました。クビライ政権は、地方財政を農民からの徴税によって成り立たせる一方で、中央財政は塩の専売による収入と、その他の商税（売上税）でまかなうこととしたのです。……（中略）……クビライ政権の財政運営において興味深いのは「塩引」の発行です。「塩引」とは、紙に印刷された塩の引換・販売許可証です。これを役所で購入する際には銀（のち銀兌換紙幣）を用いるよう定められました。銀と引き換えに入手した「塩引」を持参して塩倉に赴けば、塩の現物を受け取り、それを内陸各地に輸送・販売して利益を上げることができたわけです。

（矢沢、2023、塩と暮らしを結ぶ運動公式サイト『モンゴル時代中国の塩と経済(中国)』）

塩引は民間商人に委託されていた。貨幣や銀で塩引を購入させ、塩引と塩を交換するというシステムは、クビライ政権の時代から根付いていたといえる。生活必需品である塩は、専売制によって政府によって独占販売されるが、政府は紙幣を正貨としているため、紙幣でなければ塩を購入することはできない。紙幣が庶民に使用されていることは第1節で確認したが、インフレが起きれば塩を手に入れることすら困難になる。

専売制の影響を見る上で、もう1点確認しておきたいのが税金である。塩税について佐伯は次のように述べている。

元朝の中央政府が継承争いでもめている間に、紅巾の乱に先立ち、南部で塩商人が反乱を起こしました。王朝末期、政治が乱れてくると、塩の密売商人が暗躍するようになります。それは政府が塩に高い税金をかけているからです。税率は時代によって異なるので、一概に言えませんが、数十倍から、時には百倍にも吊り上げて販売していました。塩の専売制は元朝に限りませんが、元朝は特に国家財政が塩税に依存する程度が大きい王朝で、世祖フビライの時代、すでに国家財政の8割を塩税が賄っていて、塩価もまた歴朝中最も高価でした。(佐伯、1987、p.179)

上記からも分かるように、専売制による増税は、確実に庶民の生活に打撃を与えていたといえる。

### 第3節 チベット仏教保護の庶民への影響

次に、チベット仏教の保護とはどのようなものだったのか、また、どのように庶民の生活の危難に影響したのかを確認していく。まず、チベット仏教保護に至った経緯としては、チベット域内の権力争いの中で、元朝がサキヤ派の後ろ盾になる代わりに政治的・社会的権益を持つというものであった。安全保障に加えて、第1節でも論じたように元には通貨制度の浸透という目的があったと考えられる。

元朝とチベットの関係について矢崎は、次のように述べる。

教団側についていえば、1042年入蔵したアティシヤ(Aṭiṣa)の思想的響を受けたゲルク派(Dge-lugs-pa)・カーギュ派(Bkaḥ-brgyud-pa)・サキヤ派等の各派が生まれ、一方、一般社会では、9世紀中葉のランダルマ(Glan-dar-ma)の破仏後、統一王朝を失い、戦国時代的な様相を呈するに至ったチベット国内で、地方豪族や諸領主はその確執の中に各宗派や大寺院の持つ宗教的権威を利用しようとし、また、諸宗派もその教勢拡張の一手段として、地方豪族の武力を裏楯とすることが一般的風潮であったことの現われであり、チベットが元朝と交渉を持つに至ったのは、正にチベット史におけるこのような時代であったのである。……(中略)……チベットと元朝との交渉の内容は元朝とサキヤ派との宗教的交流とそれに伴う政治的・社会的権益の授受に集約することが出来るのである。元朝がチベットに出兵した事実については、わずか

に、チンギスのカム出兵があるが、これも註記の如く、チベットに対する直接的な出兵とは考えられず、又、上述のパサムの記述の如く、サキヤ派とディゴンとの交戦における支援のための出兵はあったにしろ、チベットに対して直接これを攻略するための、少なくとも大規模な出撃が行なわれたことは元史を初めとする中国側資料にも記録されて居らない。とすれば、元朝のチベットに対する交わりの形態は、武力を伴うものでなく、専ら、一教団——サキヤ派——に対する懐柔という宗教政策によったものであった事は自明の事柄となるのである。（矢崎、1970、p.61）

また中村は、「勅建寺院にはのちに御容が納められることになる皇后を中心に広大な土地が寄進され、そこから上がる収益は寺院の経営や祭祀の費用に充てられた。こうした寺産は永業とか恒産と呼ばれて朝廷からの保護を受けた」（中村、2023、p.254）という。こうした大規模な寺院や祭祀への支出が財政を圧迫する要因となっていたのである。

元朝は、紅巾の乱が起こった後であってもチベット仏教の保護に固執した。中村によれば、「『元史』によると、紅巾の乱に加え飢餓が起こるなか、順帝トゴン・テムルが1360年にそれでも神御殿の祭祀は太廟のそれと並んで先祖の恩に報いる大事であるとし、減っていた祭祀の回数を元に戻すよう詔を下し」（中村、2023、p.254）と記述しており、祭祀を優先し出費が続けられたことがわかる。

また檀上は、北方のモンゴル諸王への賜与も合わせると、歳入額を上回るほどの凄まじい国家支出があったと指摘する。

モンゴル第一主義を掲げ、自民族の伝統・習慣を維持し続けた元朝は、モンゴルの故地に留まる北方諸王への莫大な金銀等の賜与や、モンゴル人の信仰するチベット仏教の寺院建立・仏事供養の出費で、にっちもさっちもいかなくなってしまう。とりわけ北方諸王への賜与は、中国王朝となった元朝への彼らの反発を和らげる意図もあり、懐柔策としても必要不可欠なものであった。銀についていえば、定例の賜与の他、種々の名目で臨時に与えることも多く、その額は元朝の歳入銀を上回ることもまれではなかった。（檀上、2020、p.30）

さらには、チベット仏教の帝師が地位を乱用し不正に蓄財を行っても皇帝・貴族は抑制する力もなく、その費用は年々増加し、国家財政に大きな負担を与えたという。その結果、財政難を乗り切るための増税や新種目の課税などの経済政策に至ったわけである。第1節、第2節で確認した通り、交鈔の通貨や通貨制度は庶民に普及しているため、これらの経済政策の変更が生活に直接影響を与えたといえる。

元朝が農民層にまで徹底して浸透させた通貨制度は、財政難の要因、交鈔の乱発、専売制度、チベット仏教の保護の影響を直接庶民へ与え、結果として王朝を揺るがす反乱にまで発展した。庶民の生活の綻びが国家の綻びに転じた一例といえる。

また、庶民の反乱について、民衆暴動の歴史研究の中に興味深い見解がある。清水は、庶民を暴動に駆り立てるものは、単なる食料不足の不満ではなく、経済行為を犯されたことへの申し立てだとして次のように述べている。

エドワード・トムスン(Thompson, E.P., 1924-1993)は近代化を先駆けたイギリス 18 世紀の民衆暴動の史的研究を通じて次のようなことを示した。つまり、当時の民衆暴動は単なる食物不足への不満として起こったわけではなく、民衆共同体は彼らの認識するところの古来の正統な法、正当な規範、伝統的な権利に従って行動していたのだ、ということである。彼らは取引や流通における慣行的・伝統的な経済行為規範が(広域食糧流通業者や地方官によって)犯されたために義によって立ち、正しい法を代執行していると自認し、そのように訴えて練り歩き、また王に宛てて請願を送った(我が国の一揆・打ち壊しにも同様の性質が見られる)。(清水、2014、p.230)

つまり、庶民への通貨価値の浸透によって、経済システムへ庶民が組み込まれた結果、庶民は経済への自我を持ってしまったといえる。そして財政難による経済政策は、国を揺るがす暴動へ発展してしまった。もとい、モンゴル帝国の通貨価値統一の背景には、銀による交易があると考えられるが、このことについて上田は、

基本的には自国でしか使用できない各国の通貨とは異なり、銀であれば誰もがその価値を理解できます。仮に大きさや形がバラバラだとしても、純度と重ささえ分かれば、国をまたいだ取引が可能となるのです。……(中略)……モンゴル帝国の銀に似た通貨を現代に探すならば、国家の枠を越えてインターネット上でやりとりされる「ビットコイン」といったところでしょうか。……(中略)……一方、元朝は「交鈔(こうしょう)」といわれる紙幣を発行していましたが、銀の不足が深刻化したことで、それを乱発するようになります。……(中略)……もしも石見銀山がモンゴル帝国の時代に見つかっていれば、もしも紙幣の総量をもっと厳密に管理していれば、もしも黄河の改修工事をもっとうまく進めていけば、モンゴル帝国が瓦解することはなかったのでしょうか。……(中略)……今の世界は、モンゴル帝国が瓦解していった状況と重なっているように見えます。グローバル化によってもたらされた「富」は想像を絶する格差を生み出し、「パクス・アメリカナ」と呼ばれる秩序は足元から崩れようとしています。ドルが世界の基軸通貨の位置から滑り落ちる可能性もあります。このような状況で私たちに必要なのは、傍観者の立場から勇気をもって一步を踏み出すことではないでしょうか。(上田、2019、Webメディア「トイ人『通貨から見たモンゴル帝国以後の世界システム』」)

#### 第4節 結論:通貨の共通価値がもたらすもの

上田が暗号通貨を例に挙げて指摘したように、現代においてビットコインなどの仮想通貨が実現できるのは、紙幣が紙くずではないという世界共通の価値観が浸透しているか



らである。通貨の共通価値があるがゆえに起こった元朝の銀不足と類似する経済混乱が起こった場合、国を跨いだ世界経済の崩壊もあり得るのだとあらためて感じた。

## 第6章 明の初代皇帝・洪武帝と白蓮教との関係

洪武帝（朱元璋）は、白蓮教を利用して勢力を拡大したにもかかわらず、帝位についた後、白蓮教の弾圧に踏み切った。白蓮教を危険因子と見たという見解もある。しかし、本当に白蓮教との関係は完全に断ち切れていたのだろうか。内情を知っているからこそ、利用するといったことはなかったのだろうか。例えば、徳川家康のキリスト教弾圧の裏には、他の大名の力を削ぎ、他国の情報を断つことや、布教せずとも貿易ができるオランダから武器を購入したといった理由もあったとされるが、同じ様な魂胆はなかったのだろうか。本章では、洪武帝の白蓮教弾圧の背景に、白蓮教と他の権力者とのつながりの牽制や、白蓮教を通じた武器や情報、財の吸い上げといった裏取引の目的は無かったのかを確認していく。

### 第1節 朱元璋(洪武帝)と白蓮教の関係

宮脇は、洪武帝が紅巾軍の仲間であった者であっても信用せず、多くを殺したとする。

洪武帝朱元璋は、紅巾軍の仲間は信用できないが、息子たちなら信用できると思っ  
て各地の王にしたのに、結局、血縁同士で権力争いが起こってしまい、最も実力  
のあった息子、燕王が次の皇帝になりました。このときも、15000人ぐらい死んでい  
ます。

洪武帝・朱元璋から永楽帝の時代にかけて紅巾軍出身の家来、大官小吏兵士に至  
るまでほとんど殺されてしまいました。また、永楽帝のクーデタ以後、白蓮教は違  
法とされます。明の初代皇帝朱元璋自らが白蓮教徒だったのに、信徒たちは国を建  
てた功績がすべてなくなるどころか、今や犯罪者扱いです。（宮脇、2019、Webメ  
ディア「歴史チャンネル『皇帝たちの中国史7「秘密結社」のシナ史～朱元璋と  
明の建国』」）

檀上は、朱元璋が紅巾軍出身であることを恥じたために、過剰なまでにその痕跡を消  
そうとしたと指摘する。

元璋は自身がかつて紅巾軍に参加していたことを恥じ、できるだけその事実を隠そ  
うとしたが、「則」という文字は紅巾軍を意味する「賊」に似ているというだけで  
禁じられた。浙江府学教授の林元亮は、海門衛兵士のために増俸を感謝する表（天  
使に奉る文書）を作ったが、そこに「則を作りて憲を垂れる」とあったことから、  
元璋を「紅巾の賊」と誹ったものとして処刑された。（檀上、2020、p271）

次に、白蓮教の弾圧の規模を確認していく。野口は官憲による摘発、もしくはその動員となり得る反乱などの反官憲行動の数を分析している。(野口、1986、p.142-192)官憲の摘発資料に白蓮教の摘発数が乏しければ、何かしらの理由または方法で官憲の目を潜り抜けた可能性も考えられる。

洪武年間の反官憲行動として、野口は山根を引用して「洪武年間における民乱件数」とされる民乱95件のうち「白蓮教徒の乱」は9件だとしている。また、相田を引用して「明代白蓮教関係事件表」から10件だとしている。(野口、1989、p.143)

同様の手法で、野口も『明太祖実録』『明史』などから関連記事を抽出し、さらに洪武年間、永楽年間、宣徳年間、正統年間の反官憲行動を数えだし、中心人物、内容から白蓮教に関係するか否かを分類し、時代によって変質がないかを比較検証している。(図4)

その結果、洪武年間以後の秘密結社の行動を観察して得た合計43件のうち、官憲の摘発によって結社の存在が顕在化したものが圧倒的に多かったことは、「洪武帝による「妖」・「邪」根絶の理念が遵守されていたことを示す」(野口、1986、p.190)として次のように述べている。

事実、さきに述べたように、洪武年間の諸事件は、いずれも元末のいわゆる西系紅巾の流れに繋がっている。……(中略)……さらに、洪武年間のそれらがB項(※筆者注図4のB行)に含まれることは、いずれも事前にそれが官憲の摘発をうけたことを示すのであって、それだけ、太祖洪武帝の支配理念の徹底と、とくにそれが旧西系紅巾の地盤に対して強力に行われたことをうかがわせるに足る。(野口、1986、p.190)

図8：洪武～正統年間における反官憲行動の数

| D          | C           | B  | A   |                  |                  |
|------------|-------------|--|---|------------------|------------------|
|            | (3)<br>(13) | (1)<br>(2)<br>(4)<br>(5)<br>(6)<br>(7)<br>(8)<br>(9)<br>(10)<br>(11)<br>(12) | (2)<br>(4)<br>(7)<br>(8)<br>(13)          | 洪<br>武<br>年<br>間 |                  |
| (7)        | (2)<br>(12) | (1)<br>(5)<br>(6)<br>(9)<br>(10)<br>(13)<br>(15)                             | (3)<br>(4)<br>(8)<br>(11)<br>(12)<br>(14) |                  |                  |
| (1)<br>(2) |             | (4)<br>(5)   | (3)<br>(6)                                |                  | 宣<br>徳<br>年<br>間 |
|            |             | (1)<br>(2)<br>(3)<br>(4)<br>(5)<br>(7)<br>(8)<br>(9)                         | (4)<br>(6)<br>(7)<br>(8)                  |                  | 正<br>統<br>年<br>間 |
|            |             |  |   |                  |                  |
|            |             |  |   |                  |                  |
|            |             |  |   |                  |                  |
|            |             |  |   |                  |                  |

表  
IX

出所：野口(1986、p188)より引用

これらの研究から、白蓮教と洪武帝の間に直接的な経済取引の記録はなく、弾圧の背景からも、明朝初期では朝廷と密接な商業取引引きをしていたとは言い難いことが確認できた。また、政権を支えたのが長江下流にあたる浙江省出身の儒学者たちであり、洪武帝は儒教に基づく伝統的な中国王朝の復活を目指していたことから、他の宗教との関係を持つことも考え難い。さらに、洪武帝は錦衣衛という諜報組織を創設し、家臣たちを監視していたといわれている。諜報活動の際に自組織を使用するならば、わざわざ白蓮教という秘密結社を飼い馴らしておく必要性もなかったであろう。

## 第2節 東系紅巾軍と西系紅巾軍の違い

しかしながら、野口は洪武帝の在位期間の宗教結社の摘発は、西系紅巾軍の系列が多く、洪武帝が諸属していた東系紅巾軍の摘発が極めて少なかったことも指摘している。

洪武年間に官憲に摘発された白蓮教などの宗教結社は、浙江寧波の一例(12)と、源流を辿ることに決め手を欠く広西北流の一例(6)とを除いて、ほとんどが西系紅巾の系列に連なるものである、ということであって、ここに、朱元璋の支配形成の基盤の一つとなった、いわゆる東系紅巾摘発を追及することは、未確認の最後の一例(13)を除いてできていない。(野口、1986、p.153)

洪武帝とつながりがあった東系紅巾の摘発がほとんど確認できないとすれば、過去の出身母体を利用した可能性も捨てきれない。東西の紅巾軍は何が違ったのだろうか。

野口は、「東系紅巾軍という呼称は、谷口規矩雄氏によって使用されはじめるようになった語である」が、「諸集団のうち、韓林兒・劉福通集団(竜鳳集団)・芝麻李集団(徐州集団)・郭子興集団(濠州集団)・朱元璋集団がその主たるもの」(野口、1974、p.22)と複数のグループがあることを述べている。野口によれば、蜂起時において武闘的な面と流寇的な面があったものの、徐州集団も濠州集団も、明確な政治理念も宗教的な理念は所有していなかったという。

紅巾を掲げたということで韓林兒・劉福通集団に従っていた、と理解されがちであるが、この集団の興起の当時には韓集団は形成されていなかったこと、紅巾の旗幟は必ずしも白蓮教結社を示す旗幟ではなかったことからこの集団が韓・劉集団に直隸していたということは、少なくとも当初においては、はっきりと認めることができないようである。(野口、1974、p.38)

また、紅巾軍の宗教性について、東郷は次のように指摘する。

従来、紅巾の乱の宗教性については、重松氏が韓林兒集団(東系)を白蓮教系統として徐寿輝集団(西系)を弥勒教系統と分類していたが、鈴木氏は「西系の方こそ芽子元の法流に属する白蓮教系統である。」という説を主張した。しかし、東系をどういう系統に規定するかは、はっきり明示していない。(東郷 1995、p.38-39)

## 第3節 結論: 宗教色の強弱による違い

これらの研究を踏まえると、洪武帝が表で白蓮教を弾圧し、裏で取り引きを考えると考えるのは難しく、可能性も低いといえる。

洪武帝が所属していた東系紅巾軍の官憲に摘発が少ないことについては、仲間意識、または裏取引があったというよりは、もともと東系紅巾軍の宗教的思想が低く、生き残りのための反官行動が起きていたとしても白蓮教の活動として見做されなかった可能性もある。その背景には、洪武帝が紅巾軍、いわゆる白蓮教の内情、特性を熟知していたこともあるだろう。

だとすれば、東系、西系紅巾軍の反官行動の差異を見ることにより、より洪武帝が帰属した紅巾軍と白蓮教の関係性を深く考察することができるかもしれない。今後の研究課題としたい。

## 第7章 元を倒した白蓮教とその変化

### 第1節 白蓮教の発足と宗教思想

#### 第1項 白蓮教の歴史

本章では、宗教秘密結社が情報伝達とコミュニケーションをどのように成功させてきたのかに焦点を当て、現代の組織において情報伝達とコミュニケーションを改善して関与を高める施策の参考としたい。先が見えない現代において、『歴史から学び、先を読む』ことによって、新しい視点が得られると考える。

白蓮教は12世紀から14世紀にかけて中国で発展した宗教運動である。この宗教運動は主に中国南部で興したもので、宗教的な要素の第一歩である白蓮教は、中国の歴史的な不安定な時期における社会的、経済的な問題に反応して発展した。モンゴル帝国が滅びた原因でもある紅巾の乱をおこした白蓮教がどのようにして誕生したのかを考察する。

マニ教は694年に中国に伝来したとされる。南宋末頃に、マニ教と弥勒信仰が習合した白蓮教が生まれた。マニ教や弥勒信仰と白蓮教の関係性について、小林は下記のように述べている。

1131～62 初めに、呉郡(ごぐん) (蘇州(そしゅう)) の延祥院(えんしょういん)の僧侶(そうりょ)茅子元(ぼうしげん)が創立した白蓮菜(びやくれんさい)という教団に始まり、現代まで続いた。茅子元は天台宗の教法をまねて、円融四土(えんにゅうしど)の図、晨朝(しんちょう)の礼懺(らいさん)文、偈歌(げか)四句、仏念五声をつくり、信徒には戒律、とくに不殺生戒(ふせっしょうかゝい)を守るように勧めた。自らを白蓮導師と称し、信徒を白蓮菜とよんだ。白蓮菜というのは、信徒が不殺生戒を守って食肉せず、菜のみを食べたからである。

この教団は民衆の信徒が増え、教勢が盛んになったため弾圧され、茅子元は流罪となった。この弾圧以後、南宋時代には白蓮菜はマニ教や白雲菜(はくうんさい) (白雲宗) とともに邪教異端の代表とされた。白蓮教は初めは阿弥陀(あみだ)信仰であったが、元(げん)末ころから弥勒仏(みろくぶつ)の下生(げしょう)によってこの世に繁栄がもたらされるといふ弥勒教と融合し、弥勒信仰を中核とする教団へと変化した。(小林、1994、日本大百科全書、白蓮教)

続いて1338年、白蓮教の反乱が起こるも鎮圧される。1351年には、北宋の末裔を名乗る教祖韓山童が河南で反乱を起こす(紅巾の乱)。1368年、朱元璋が元を倒し皇帝になるとともに白蓮教を禁止した。1600-1700年代になると、清政府は取り締まるべき宗教を内容にかかわらず白蓮教とまとめて呼称し、弾圧した。創立時から長い歴史を経て、白蓮教は存続していった。

## 第2項 円融四土図の宗教思想

白蓮教の初期に、創立者の茅子元が天台宗の教法をまねて作成したという4つの著作物がある。現代のコミュニティ組織論ともつながる実に興味深い内容であり、詳述する。特に、4つの書物のうち円融四土(えんにゅうしど)図に注目する。円融四土図とは選仏図のことであり、張によれば、「選仏図とは、成仏図や昇仏図ともいい、仏教の教義や宇宙観と修行の段階などを一枚の紙で図あるいは文字によって表現するもの」であるという。(張、2008、p.81)

図9：蓮宗宝鑑における仏国土思想円融四土選土図



出所：蓮宗宝鑑における仏国土思想円融四土選土図(張、2008、p.82)

図10：円融四土総相を整理した表

表

|     |          |     |      |        |     |     |     |
|-----|----------|-----|------|--------|-----|-----|-----|
| 同居土 | 具煩惱      | 凡聖居 | 情見   | 勝劣応(身) | 宗用体 | 三徳迷 | 願不退 |
| 方便土 | 破見思惑     | 羅漢居 | 一切智  | 勝応身    | 体用宗 | 解脱徳 | 行不退 |
| 實報土 | 破塵沙惑分破無明 | 菩薩居 | 道種智  | 円満報身   | 用宗体 | 般若徳 | 智不退 |
| 寂光土 | 破三惑盡     | 果人居 | 一切種智 | 清浄法身   | 宗体用 | 法身徳 | 位不退 |

出所：蓮宗宝鑑における仏国土思想円融四土選土図(張、2008、p.83)

上図は、創立者である茅子元が、居を同じくする民のことを同居土(どうごど)として認識した諸世界を解説したものである。茅子元は、貧困層や低位の民に対して共感を得られる教えを説き、生まれ持った地位に対する定めを受け入れと他責にできるよう、また今世の行いで来世の身分が変化する希望などを与えた。張は、「子元は同居土が修行しやすく住みやすい国土であり、ここに住する凡人が臨終の際に正念をはっきりと保って阿弥陀仏を念ずれば、阿弥陀仏の浄土に往生できること、また同居土は日月星の三光を具足し、塵



序の出身に喩えられることを説いた。蔭序は、蔭叙とも言われ、祖先の功績によってその子孫が官職を授かること、つまり自力ではなく先祖の功德による出世である」(張、2008、p84)と説明している。茅子元は、苦しい生活を送る民衆に、教えを守れば死後には救われるとして心の安定を与え、支持を得たのである。

## 第2節 白蓮教の宗教思想の布教

### 第1項 宗教思想の表現方法

白蓮教の子元の蓮宗宝鑑において、張は円融四土に加えて下記に注目する。

子元は、観心四土、恒沙四土、一心四土、円融四土、目前四土、三諦四土、相即四土、迷悟四土、人人四土、絶待四土の十種という別様の分別もしている。

以上の中で一番注目すべきことは、その四つの比喻である、蔭序・辺功・科挙・灌頂王子という言葉は、宋代の人にとって、日常生活の中で親しみ深いものである。子元はそのような日常用語を使った四つの比喻を通じて、仏教の理解しにくい複雑な教義を、世俗的な表現を用いて、知識人だけではなく、誰にでもわかるように解説した。さらに子元はその四つの図と比喻によって、浄土の他力修行によっても伝統的な自力修行と同じように悟りに到り着きうることや、仏になりうることを宣揚した。中国において、仏教が庶民に浸透してゆく過程において子元の果たした貢献は大きい。これは子元の最も大きな特徴となるところであると考えられる。(張、2008、p90)

そして、「子元は智顛(ちぎ)の影響を受けて、人々の根機が違っているため習うべき教理も異なり、往生できる浄土も異なると考えて四種の浄土に分けた。しかし子元は蔭序・辺功・科挙・灌頂王子という四つの比喻を通じて、浄土の他力修行も伝統的な自力修行と同じように悟りに到り着きうることや、仏になりうることを宣揚して、仏教の難解な教義を世俗的な表現を通じて、誰にでもわかるように解説した。中国において仏教が庶民に浸透してゆく過程で子元は大いに貢献した」(張、2008、p98)というのである。茅子元がいかに貧困層や民衆に対して広めることに注力し、創意工夫をしていたかがうかがえる。

### 第2項 宗教思想の浸透方法

晨朝(しんちょう)とは、1日を6等分した6時のひとつで、卯の刻(午前6時前後)に行う勤行(ごんぎょう)を指し、仏教用語で精進すること、仏道修行に勤め励むこと、寺院や自宅の仏壇の前で時を定めて行う読誦・礼拝などの儀式を意味する。礼懺文とは礼懺文とも表現されており「懺悔滅罪のために読む文である。すなわち、円融四土図にある思想を、早朝に朗読できるように文章にしたものが晨朝の礼懺文であろう。

偈歌四句(げかしく)は、偈四句とも書く。高橋によれば、「仏典における詩のこと。サンスクリット語ガーターgāthāの音写の省略形。仏典においても、詩句でもって思想・感情を表現したものが多く。これが漢語では、三言四言あるいは五言などの4句よりなる詩句で訳出される」(高橋、1984、日本国語大辞典)である。

また、仏念五声とは、「念仏の称え方の一つ。称える速度を五段階に変化させ、それに伴って音階も変化させていく称え方」(曾和、2018、浄土真宗辞典)である。おそらくは、宗教思想を礼懺文と偈歌四句といった簡単に訴えかけやすい形とし、朗読の声の出し方も統一しながら多数の民衆に浸透させていったことが分かる。

### 第3節 白蓮教が結束を強固にした理由

#### 第1項 経済的な不平等や社会的な不安

元代では、「元が倒れた1368年前後の50年間、明末の1600年前後の50年間で寒冷化の時期に対応していたことが確認されている」(明石、2021、p.34)。そして「気候変動は農産物の産出水準に影響を与え、不作、飢饉をもたらして人口減少につながっていく。王朝交替期では戦乱が生じ、さらに人口減少と移動をもたらして人口の大きな変動をもたらす」(明石、2021、p.35)ことになったという。

民衆の生活に対する不安と不満が止まない環境下で、宗教秘密結社が民衆の心のよりどころとなったであろうことが推測できる。

#### 第2項 対外的な圧力と信仰の変化

白蓮教は、元朝でも13世紀には布教の公認を受けるも、その後は何度も元朝から禁止令を出されている。1338年の反乱は鎮圧されたが、1351年、北宋の末裔を名乗る教祖韓山童が河南で紅巾の乱を起こし、それが元の滅亡につながった。しかし、朱元璋は1368年に元を北走させ明の皇帝になるとともに、白蓮教を禁止したのである。

度重なる弾圧を受けながらも、白蓮教は宋、元、明、清と長期にわたって持続したことを指摘している。林は清時代の弾圧について、「北方の山東・河北・河南・安徽沿いの広大な地域では、白蓮教などの教徒が率いる蜂起が頻発し、秘密結社であった白蓮教・天地会・大刀会・順刀会・神拳会などが相次いで武力反抗を試みた。清王朝はこれら民間宗教団体と秘密結社に対して厳格な制裁措置を取り、様々な手段を用いて弾圧を繰り返した」と説明する。(林、2013、p.2)

佐藤は、白蓮教は信仰を変化させたことで持続したとし、「元・明・清時代には白蓮教と称したが、阿弥陀仏信仰から弥勒信仰中心に変容し、民衆反乱に関わる結社が活動した」(佐藤、2018、浄土真宗辞典、白蓮社)と説明する。社会の変化に対応して信仰を変化させながら、それでも弾圧を受け反乱を繰り返したことは、信者の間の結束が強固であったことをうかがわせる。

一方、白蓮教が徐々に反体制的な考えに変化していったことも指摘されている。砂山は、「茅子元の白蓮宗は五戒を奉持し、阿弥陀仏を念じて浄土に生まれることを願う念仏結社であったが、茅子元の死後はしだいに反体制的な傾向を帯びていった」とする(砂山、世界大百科事典)。弾圧されても繰り返し反乱を起こそうとする中で、反骨精神による強い結束は、次第に過激なものに変化していったのである。

### 第3項 カルト的な呪術

白蓮教は、経済的な不平等や社会的な不安への救済を与える教義に加えて、多くの者を信じ込ませるために呪術的な手法を用いていた。韓山童の手法が巧みであったことについて、東郷は下記のように説明している。

蜂起前年から石人工作をし、童謡や弥勒佛下生信仰を流布させ、更に北宋滅亡時の徽宗や劉光世の子孫(矯)と詐称し、南町滅亡時の廣王や陳宜中などの故事に託して民衆叛乱を騒擾しようとするなど下層民衆だけではなく知識人階層をも対象とした意図的に非常に巧みに計算された蜂起準備が為されていることが看取される(東郷、1997、p.23)

また、中国語 Web メディア毎日頭條では、一葉古今がこのように説明している。

元至正一年四月(公元1351年)、朝廷強征民夫修治黄河決口。民工挖河時、發現有一獨眼石人(韓山童、劉福通事先埋於河灘)。是時、流傳於民間的謠諺:「莫道石人一隻眼、挑動黄河天下反」、得以應驗。五月韓山童、劉福通在永年白鹿(路)莊聚眾三千人、殺白馬、黑牛立盟起義、以紅巾為號、「稱紅巾軍」、擁韓山童為明王。(一葉古今、2018)

(筆者による翻訳) 元朝の至正元年(西暦1351年)4月、朝廷は人々を人夫として黄河の決壊を修復するよう無理やり徴発した。労働者が黄河を掘ると、隻眼の石人を発見した(韓山童と劉福通は事前に黄河の砂浜に埋めていた)。民間に流れていた「一つ目の石人は、黄河と天下を揺り動かす」という噂が実現したのであった。5月、韓山童と劉福通は3,000人の群衆を集め、白馬と黒牛を殺して盟約し蜂起した。彼らは赤いスカーフを自分たちのシンボルとして「紅軍」と称し、韓山童を擁立して明王に立てたのである。

図11：莫道石人一隻眼



出所：中國靈驗的讖語3：莫道石人一隻眼，挑動黃河天下反(<https://kknews.cc/history/pxga2r.html>  
(<https://kknews.cc/history/pxga2r.html>)

## 第4節 白蓮教と現代コミュニティ

### 第1項 白蓮教の組織力を支えた4要素

第3節までの研究から、白蓮教が6世紀から14世紀の長期に渡って持続し、繁栄した理由として、現代の組織の結束力を高めるためにも役立つであろう4つの要素を導き出した。

1つ目は『宗教的信仰』である。白蓮教は宗教的な要素を持つ秘密結社であり、当初は、神聖な目的を共有していた。また、宗教思想を浸透させるために、図と文章、短文の歌、同時刻に唱和するなど、民衆に行き渡りやすくしたことも結束を高める要素であった。

2つ目は『社会的貢献』である。白蓮教は、貧困層や社会的に不利な層から支持を得て、経済的な不平等や社会的な不満を癒やすものとして発展し、気候変動による農産物の影響、飢饉、天変地異(黄河の氾濫)などに乗じて結束したためである。

3つ目は『対外的な圧力』である。白蓮教は数百年に渡って政府の規制や弾圧にさらされた。このような圧力は、むしろ信者たちの結束を強化し、共通の敵に対する団結を生じたといえる。

4つ目は『信仰と主の変化』である。教祖の死後も主が入れ替わるにつれて、阿弥陀信仰から弥勒宗教へと変化しながら存続した。世相に合わせて思想を変化させたことも持続の要因といえる。

### 第2項 結論:現代コミュニティ(企業づくり)に通じること

前項で挙げた白蓮教の4つの要素は、現代のコミュニティにおいて結束力を高めるためのヒントとして活用できるのではないだろうか。現代でも、企業や学校において、理念

や教育方針の共有は重要である。理念を従業員や生徒に分かりやすく伝える方法として、短いフレーズや図、社歌などが活用されており、共通性があるといえる。

現代においても、志があるトップは事業によって社会課題を解決しようとする。また、志高く社会に貢献しようとする社会起業家の周りに人が集まり、組織が生まれることも増えている。そして、組織を作れば必ず直面する様々な困難を、共に乗り越えた経験によって団結が強まるともいえる。

また、創立時には清らかな信仰であった白蓮教が、主が変わり、様々な社会的変化に適応していく中で、カルト的な手法を使う者が現れ、その結果、過激な宗教に変化していった点も興味深い。現代においても、創業当初は高い志によって支えられた組織であっても、人が変わり時代が変わり、社会的な環境が変化するにつれて、当初の理念が薄まり、全く異なる思想、企業文化に変わってしまうことも少なくない。組織の持続そのものが自己目的化してしまうケースといえる。昨今の企業の不祥事を招いた組織的な要因の1つとして、示唆に富むといえよう。

## 第8章 白蓮教は民衆にとって救いの革命家だったのか

白蓮教の行動がきっかけとなった反乱である「白蓮教徒の乱」と秘密結社白蓮教の思想を調べることで、当時の民衆にとって白蓮教がどのような存在だったのか、また、後の中国の民衆や体制にどのような影響を与えたかについて考察する。

### 第1節 元代の白蓮教の思想と普及

#### 第1項 白蓮教の思想

白蓮教は、406年に慧遠によって中国南部にある廬山の東林寺で生まれた仏教の一派である白蓮社を起源としている。元の時代に弥勒仏信仰を取り入れ、民衆の間に広まっていた。

白蓮教は、仏教、道教、儒教などの宗教思想、さらに民間や地方の信仰などを取り入れることで変化しながら広まっていたことが特徴といえる。何度も変質をとげながらも、白蓮教内部では目立った争いもなかったとされる。しかし、元代に何度も禁止令を受けるなど、主流派からは異端視され続け、一部の地域で反対運動を起し弾圧を受けることもあった。元末になると、社会的な不安定さを反映してか弥勒仏信仰を取り入れ、弥勒仏が現世に現れ信者を平等に救うといった教えを訴えた。社会的に弱い立場にいるものに対して希望を与えることで、信者を増やしていったといえよう。

#### 第2項 白蓮教の普及

白蓮教は、農民層や貧困層を中心として幅広く庶民層に広まった。仏教や道教、各地方の民間の信仰を取り込んだことで影響力を広げていった。地方の信仰を取り入れたことで、元の首都である大都（現北京）から離れた農村や地方で広く普及していたことが特徴の1つといえる。また、秘密結社であり、入信の儀式を行い特別感・一体感を与えたことに加えて、婚儀や葬祭の補助、取引での優先など、互助的なメリットもあった。

当時の農民層、貧困層は、災害、増税によって疲弊していく中で、救済と繋がりを求めて入信した。日本においても、天保の飢饉の際に、普段は行かない寺や神社にてお祈りする人が増加したとされる。同じような境遇の人々との秘密のコミュニティに参加し一体感を得ることで、苦しい現実を忘れさせ希望を与える存在でもあったといえる。

また、経済が不安定化していく中で、一部の反体制派も取り込まれていった。元朝による弾圧があっても、白蓮教徒が大きく減ることはなかった。元による圧政、宗教としての禁止や弾圧、反対運動の制圧などは、むしろ白蓮教の普及を促した側面がある。

### 第2節 白蓮教の乱、太平天国の乱に通じるもの

農民層や貧困層が白蓮教に流れる一方で、官僚は腐敗しており、災害が続く中で持たざる者への厳しい取り立ては緩むことはなかった。不満が徐々に蓄積していく中で起きた

反乱こそが、白蓮教徒の乱であった。白蓮教に指導された農民らが起こした最大規模の反乱であり、元を滅ぼし、明に続いた清王朝でも白蓮教の反乱が起こった。白蓮教の反乱が起こるたびに、その王朝は衰退していった。逆の視点から見れば、王朝が衰退しはじめて社会が不安定化する際に、白蓮教徒の反乱が起きたのだともいえる。

本節では、元末における白蓮教徒の乱（紅巾の乱）と、清時代に起きた太平天国の乱と比較することで、中国における宗教結社の反乱についての理解を深める。

### 第1項 白蓮教徒の反乱

元末に起きた白蓮教の反乱は、紅巾の乱とも呼ばれた。反乱軍が紅色の頭巾をつけて目印にしたためである。

反乱の始まりは、元朝政府が黄河で大氾濫が起こった際に農民に有償で修復を命じたことにある。それとともに、当時のインフレ経済や官僚への不満・天災・飢饉が相次いだ事で不満が爆発した。それにより、韓山童をリーダーとして、1351年に反乱が始まった。

結果としては、元が大きく衰退し、明へと王朝が変わる要因となった。反乱軍の構成としては紅巾の賊は東系紅巾軍と西系紅巾軍に分かれており、反乱当初は元軍を圧倒していたが、軍内部の対立が起き、次第に停滞していった。東系紅巾軍に加わっていた朱元璋は、いち早く宗教の持つ力に対して危機感を感じ、徐々に地主層と信頼関係を築き上げ、知識人を囲い込み、停滞のタイミングで白蓮教への攻撃をするようになったが、反乱軍の勢いは落ちることはなかった。その後は、1366年までに白蓮教徒の反乱を抑え、民衆からの支持も多くあったことから、1368年に自らが皇帝となって明王朝を建国した。

また、朱元璋は明を建国してからは、徹底して白蓮教を弾圧した。

### 第2項 太平天国の乱との共通点

白蓮教の反乱より規模は小さかったものの、似たような境遇で起きた大規模な反乱として太平天国の乱がある。

太平天国の乱（長髯賊の乱）は、1851年～1864年の14年間に渡って華南で繰り広げられた。この反乱の死亡者数は推定で5000万人で、中国全人口の5分の1が犠牲者となった。太平天国軍は、白蓮教のような仏教系秘密結社ではなく、また従来の農民反乱とも違い、キリスト教プロテスタント系と道教的な土俗信仰が結合した新興宗教団体であった。

太平天国は、洪秀全が科挙試験に落ちた後、熱病で倒れ両親に親不孝を詫びた後に意識を失い、「志尊の老人」からこの世を救えと命じられた夢を見たことから始まった。その後、梁発の書いたプロテスタントの伝道パンフレットを読み、自分の考えを確認したことが太平天国の創設の原動力となり、洪秀全は自らを「天父の子」と宣言し、太平天国を建国するに至った。（菊池6p7p）

洪秀全は自らを太平天皇として、中国社会における新しい宗教的秩序を確立させるために、社会的な理念を強調した。土地の平等分配、男女平等、共有経済などを提唱し、清

朝時代の不平等や腐敗に反発することで、不満を抱える多くの民衆の支持を集めたわけである。

清朝政府軍との内戦の中で、南部から中部にかけての地域を支配し、反乱は成功したかに見えた。しかし、天津条約に基づき外国の軍人が政府軍に参加したこともあり、劣勢に陥った。物資不足に加えて武器の技術的な遅れが浮き彫りとなったためである。その中で、指導者である洪秀全が死亡し、太平天国の乱は終息することとなる。

「国内」の体制に不満がたまり反乱を起こしたという点では、太平天国と白蓮教の乱は共通している。ただ、太平天国は、外部の助けを得ながら、新たな国を作ろうとしたと考えられる。また、元はモンゴルが母体であり、漢民族を主とする民衆の多くが不満をためていた。それらの不満を上手く利用したのが白蓮教である。

元はヨーロッパの一部地域まで有する世界最大の帝国であり、強い脅威となる外敵がいなかったため、内に向けた可能性が高い。また、反乱が始まった地域が当時の都である北京から少し離れた四川・湖北・陝西省という隣接する3つの地域であったために、元朝側の事前の対策が間に合わず、反乱の流れが急速に発展していったとされている。

2つの反乱を比べると、最初から頼る味方（外交）がない中で国を変えるために反乱を起こした白蓮教と、周りに頼る味方（外交）がいたが頼ることが出来なかった太平天国という外部環境の違い、また、双方の変革に対する熱量の差や宗教としてのまとまりも異なっていた。特に、元の支配下で起こった白蓮教徒の乱は、内に向く力が太平天国に比べて強かったと考えられる。

### 第3節 民衆にとって、宗教の反乱は救済の革命家であった

白蓮教の起こした活動は、その後の中国の権威と宗教の関係に影響を与えた。明代には、当初は白蓮教徒を利用していた皇帝の朱元璋が、即位後から白蓮教を禁止し、弾圧した。元の時代に、農民や貧困層といった人口の多い層が募って反乱を起こしたことは、統治する朱元璋にとっては、当初の仲間から政権を揺るがすおそれがあるリスクに転じたのだといえるが、一方で民衆にとっては成功体験であった。つまり、権威に屈する以外の道を切り開いた白蓮教は、当時の困窮する民衆にとっては、単なる宗教結社にとどまらず、“革命家”でもあったとも言えるのではないか。民衆がまとまった力を持つことで王朝を滅ぼした体験、それは続く明、新の時代にも度々起こった白蓮教の反乱や、その他の宗教の反乱において、原動力にもなったと考えられる。

また、白蓮教から派生した秘密結社や宗教としては、清水教、天理教、混元教、聞香教、西天大乘教、八卦教などがある。これらは、白蓮教の力が衰退した後も広まり、影響力を残した。



#### 第4節 結論：現代の中国と宗教の関係が示唆するもの

元末の白蓮教、清代の大平天国が、その次代の民衆にとって、政権を転覆し生活に救済をもたらす革命家であったのだとすれば、現代の中国政府が宗教の統制に腐心していることの理解が深まる。

現在の中国では、信仰の多い順に道教、仏教、プロテスタント、カトリック、イスラムの5つのみを公認しており、宗教に関しては憲法、および法で規制されている。近年、ウイグル地域でのイスラム教の統制を強めていること、宗教施設を「中国にふさわしい形」にするといった形で宗教にたいする統制が強まっているが、これは、選挙を行わない社会主義国家であるため、権力を強く保持するために一定の宗教統制が必要だという制度面の要因だけではないと推察される。宗教による反乱で国が大きく傾く出来事が何度もあったという歴史が、現代の中国政府による宗教統制の強化に何らかの影響を与えているのではないか。例えば、中国はインターネットの利用を厳しく制限しているが、新しい文化に触れたことが宗教を先鋭化させ、間接的に反乱につながったことから、新たな反乱の火種としての情報接触を制限しているともいえないか。

これらは文献記録に基づいてはいるが、間接的な推定である。元の時代についての文献の多くはモンゴル視点のものが多く、情報の整合性を取るのが難しかったこと、より多くの文献の中で比較することができなかったことが課題であった。

## 第9章 白蓮教と現代中国の宗教統制

本章では、白蓮教が起こした紅巾の乱とそれ以降の混乱についてまとめ、現代の中国での宗教統制にどう影響を与えたのかを探っていく。

### 第1節 白蓮教と現代中国の宗教統制

前章でも触れているが、本章での議論のために、あらためて白蓮教の誕生の歴史について簡単に振り返る。

白蓮教の起源は、東晋の高僧である慧遠が402年に廬山の東林寺で門弟たちと結成した白蓮社という仏教の分派である。唐の時代においては、善導によって浄土宗となり、禪宗と共に盛んになっていった。南宋時代には民衆に広まってゆき、モンゴル支配下でさらに勢力を伸ばしたのである。

元末の1351年、紅巾の乱が起きた。元朝の末期、黄河と呼ばれる中国第二の川で、この川がたびたび決壊しており、周辺地域に甚大な被害がでた。決壊発生から8年後に元朝が重い腰を上げて黄河の治水工事を決断した。山田によると、この工事に軍人が2万人と民夫15万人の徴発が行われた。しかし、黄河周辺に住む農民は度々発生する水害の被害で疲弊しきっており、この工事はより農民の負担になるだけで元朝により不満が募るだけであった。(山田、1998、p.20～21)

そこに、白蓮教首である韓山童と劉福通が目をつけた。彼らは、黄河旧河道に石人を埋めて、その後に「石人一隻眼、挑動黄河天下反」という言葉を広めたのである。また、元朝に不満が募っている状況を利用し、韓山童が宋朝徽宗皇帝八代目の子孫であり、元朝の次の中国の主であると主張することによって、反乱への準備を進めていたが、この動きは事前に発覚してしまい、韓山童は捕らわれ処刑される。これを知った劉福通は、1355年、韓山童の遺児である韓林児を擁立して安徽省で蜂起した。韓林児は小明王に改名し、大宋国の建国を宣言した。蜂起の際に紅巾を頭に巻くことによって味方の印としたため、紅巾の乱と呼ばれるようになったのである。この反乱は急拵えであったにも関わらず、この動きにつられて短期間のうちに反乱の規模が広がり、結果として反乱が全国的に伸びていった。結果として、反乱から数年で中国では紅巾軍の勢力が大きくなり、いくつものに別れて群雄割拠の状態へと変わっていった。元朝には、もはやこの反乱を止めるほどの力はずでになかったのである。

水害とモンゴルの圧政によって不満が農民に募っていたとはいえ、たった2人から始まり、反乱の首謀者の1人が処刑されても子が受け継ぎ、全国的に反乱が広がり、元朝を倒すまでに至った。秘密結社が国を変えるほどの力があることを民衆に知らしめたという影響は無視できない。

### 第2節 明以降の白蓮教

次に、明以降の白蓮教について論じる。

清朝政権でも白蓮教は取り締まりの対象になったため、清朝の全盛期には、白蓮教は表立った活動はなかった。しかし、様々な社会問題が発生するに従って、一部の地域で白蓮教徒による反乱が起きるようになる。この反乱の動きは政権側によって鎮圧されたが、この白蓮教による反乱は政権に混乱を起し、清朝の力が弱まったことを示すことにつながった。白蓮教の宗教結社としての側面から表立った動きがなくとも水面下では民衆の支持を得て活動は持続し、中華民国時代の近代まで民間信仰として続いたのである。

続いて、現代の中国政府における宗教の統制はどのようなものだろうか。

現在、中国国内で認められている宗教は、仏教、道教、イスラム教、カトリック、プロテスタントの5つである。完全に宗教を規制しているというわけではない。また、国家安全法第27条によれば、「国は国民の信仰の自由と正常な宗教活動を法により保護し、宗教の独立自主の原則を堅持し、宗教の名を利用して国家の安全に危害を与える違法な犯罪活動を法により取り締まり、国外勢力による国内の宗教に対する干渉に反対する。」とし、中国国内での正常な宗教活動は認めている。

しかし近年では、ウイグル自治区において宗教弾圧が行われているとされる。まず、新疆ウイグル自治区には約2,500万人が住んでおり、その半数近くがイスラム教を信仰している。前述した通り、イスラム教は宗教として中国では認められているにも関わらず、政府によって統制されている背景には、2009年頃にウイグル族と漢族が起こした「ウルムチ騒乱」で、死傷者が多数出たことがある。

ウルムチ騒乱をきっかけとして、中国政府はテロ対策を理由として、ウイグル族に対しての監視を強化した。2023年7月15日のTBSのニュース番組によれば、市場に置かれている刃物には鎖や紐で固定されていたり、民家には1軒ごとにQRコードがつけられ、イスラム教徒であるウイグル族にとって重要な礼拝を行うモスク(寺院)の取り壊し、閉鎖が行われているという。同番組によれば、2015年頃まではイスラムの慣習としてヒジャブをつける女性の姿が確認されたが、同年に中国政府が宗教の中国化を打ち出し、習近平氏が「わが国の宗教の中国化の方向を堅持し、宗教が社会主義社会に適応するように積極的に導く」と発言して以降、ヒジャブが過激派のように見えるという理由で、女性がヒジャブを着けている女性の姿が見られなくなるとされる。(TBS、2023、<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/605602?display=1>)

中国政府の見解としては、宗教の統制は国家安全法27条で法的に明記されている正常な活動という位置づけである。2023年、中国の李克強首相が3月5日に行った政府活動報告の中の宗教活動に関する記述には、「宗教の中国化の方向を堅持し、宗教が社会主義社会に適応するように導く」と明記された(読売新聞オンライン、2023年3月6日付、<https://www.yomiuri.co.jp/world/20230305-OYT1T50237/>)。「宗教の中国化」は2015年に習国家主席が提起したとされる(同記事)。習政権が3期目に入ったことで、チベット仏教を信仰するチベット族やイスラム教徒が多いウイグル族への取り締まりは、引き続き続いていくと想定される。

### 第3節 結論

宗教が秘密結社として力を拡大し、政権を変えた白蓮教の例は、中国政府が宗教活動に神経質に対応する理由の1つと考えられる。ウイグル自治区の人数は中国全土で比べると少数であるが、中国政府にとっては、次の騒乱を起こさないために力を注がざるを得ない事態だといえる。

## 第10章 秘密結社はどう政治的影響力を及ぼしたのか

### 第1節 はじめに

秘密結社とは、組織の目的や活動内容といった様々な情報を外部に秘密にしている組織である。安田によれば、秘密結社は3つに分類される(安田、2021、p.17)。フリーメイソンやイルミナティ等は秘密結社の代名詞として広く名前が知られている。しかし、加入儀礼は非公開かつ神秘的であるため、儀礼的秘密結社とも呼ばれている。一方、アメリカで生まれたクー・クラックス・クランや民族独立を目指した朝鮮の卍党、非合法下の日本共産党等は、政治的秘密結社に分類される。マフィアをはじめとした秘密結社は犯罪的秘密結社である。さらに、アメリカの人民寺院や、日本のオウム真理教のような閉鎖性が強い破壊的カルトや、その時代に社会や政治的に弾圧されていた隠れキリシタンのような宗教組織は宗教的秘密結社に分類される。(安田、2021、p.15)

本章では、中国の近代史に大きな役割を果たした秘密結社である洪門(ホンメン)についてまとめる。

### 第2節 洪門の起源

洪門は、中国の明朝末期から清朝初期にかけて興った秘密結社である。清朝の支配に抵抗するために武装し、各地で反清闘争を展開した。洪門の起源は諸説あるが、清朝が成立した後、明朝の遺臣や民衆が結成した互助組織が起源とされている。これらの組織は、清朝の支配に抵抗するために武装し、各地で反清闘争を展開した。

洪門は18世紀後半以降、華僑の間で急速に拡大した。当時、清朝は華僑に対して厳しい統制を敷いていたため、洪門は華僑の権利を守るための組織としても機能していた。また、華僑の間で社会保障や教育などのサービスを提供することで、華僑社会の結束を強める役割も果たした。

### 第3節 辛亥革命

1911年に起きた辛亥革命で、洪門は孫文率いる中国同盟会と協力し、清朝の打倒に貢献した。孫文が、洪門の反体制的な思想に目を付け利用を図ったとされている。

辛亥革命によって、清朝が倒れ中華民国が建国された。中国近代史の転換点となり、中国の近代化の道を切り開いた。

辛亥革命の背景には、清朝の腐敗、列強による中国の侵略があったとされている。日清戦争で清朝が敗北し、下関条約を締結すると清朝は朝鮮半島から撤退し、台湾を割譲した。この結果、清朝の国際的地位は大きく低下し、列強からの侵略がさらに激しくなった。

このような状況の中、中国国内では清朝を倒し、近代化を進める革命運動が活発化した。1894年に孫文が興中会を結成したのを皮切りに、同盟会、光復会、岳王会等、さまざまな革命団体が設立された。1911年10月10日湖北省の武昌で新軍の兵士たちが蜂起

し、武昌起義が勃発した。武昌起義は全国各地に広がり、清朝は崩壊した。1912年2月12日清朝の宣統帝は退位し、中華民国が成立した。辛亥革命は中国の近代化の道を切り開いた画期的な出来事である。この革命により清朝の専制政治は倒され、共和制が樹立された。中国は列強からの侵略から独立し、近代国家への歩みを進めることができた。辛亥革命の成功には、孫文のリーダーシップはもちろんのこと、洪門をはじめとした革命団体の結束や貢献が大きい。また、列強による中国の侵略が革命を加速させる要因となつたとされている。

1911年2月、孫文はヴァンクーヴァーの致公堂を訪問して熱烈に歓迎され、中国革命支援の集金組織「洪門籌餉局」を成立させている。同年2〜3月、孫文はカナダ各地の洪門組織を行脚しており、結果、同年内にカナダ全土の致公堂から11万2000カナダドルの資金が、辛亥革命やそれに先立つ黄花崗蜂起の軍費として革命勢力に流れ込むことになった。その後、1913年に黄興が袁世凱に反発する第二革命を起こした際も、カナダの洪門組織は6万3000香港ドルの寄付をおこなっている。

また、1912年1月1日、南京に中国南部の17省が加わって共和政国家として中華民国の成立が宣言され、孫文は17省の代表によって選出され、臨時大総統に就任した。中国の王朝専制政治が終わり、当時まだほとんどなかった共和国を、アジアで最初に実現するという榮譽となった。

しかし、中華民国建国と共に洪門は切り捨てられることとなる。辛亥革命後、中国同盟会は国民党と名を変え、これまで海外の洪門組織が独自の政党を結成して母国の政治に参加することを認めなかった。これを機に孫文や国民党と洪門との関係は急速に悪化の一途をたどった。

革命時に多額の寄付を出した北米各地の洪門では孫文に対する反発が広がり、1915年にはカナダ西海岸のヴィクトリアで国民党関係者と洪門構成員との暴力衝突まで発生した。後に、陳炯明と接触を図り中国致公堂を結成する。

## 第4節 洪門の現代の役割

現代の洪門は、その政治的な役割は大きく減少している。しかし、依然として世界各地に多くの会員を持ち、社会福祉や文化交流などの活動を通じて、中華系社会の結束を図っている。役割としては、交流と団結、社会福祉、教育、ビジネスネットワークなどがある。

洪門は、世界各地の華僑の間で交流や団結を促進する活動を行っている。彼らは、チャイナタウンで様々な行事やイベントを開催し、華僑が互いに交流し、団結する機会を提供している。また、洪門の組織を通じて、華僑の間で情報や支援を共有し、互いに助け合うネットワークを構築している。また、世界各地で社会福祉活動にも取り組んでいる。彼らは、チャイナタウンで学校や病院を建設し、華僑の生活を支援している。また、貧困や困窮した華僑を支援するための慈善活動も行っており、教育活動にも取り組んでいる。彼らは、チャイナタウンで学校を運営し、華僑の子供たちの教育を支援している。また、華僑の間で日本語や英語などの語学教育を行うためのプログラムも提供している。洪門は漢

民族の伝統文化や歴史を学ぶための学校を設立し、華僑の子孫に漢語や漢字を教える活動も行っている。

最後に、洪門は会員同士のネットワークを活かしたビジネス活動も行っている。そのため、多くの地域で中華系企業の支援や交流を促進している。また、国際貿易や投資などの経済活動にも積極的に取り組んでいる。

## 第5節 結論：現代の華僑社会に影響を与える洪門

洪門は、現在も世界各地の華僑に影響を与え続けている。洪門の活動は、(1)中華系社会の結束、(2)社会福祉や教育、(3)ビジネスネットワークによる経済活動、の3つの役割に分類することができる。洪門は、華僑の生活や社会に多大な貢献をし、華僑のアイデンティティの形成にも大きく影響しているといえる。

### 第Ⅲ部 ロシアの視点： モンゴルとの関係と宗教



## 第11章 タタールのくびき論争とその実態

本章では、次のような問題意識に基づいて、タタールのくびき論争とその実態について論じる。

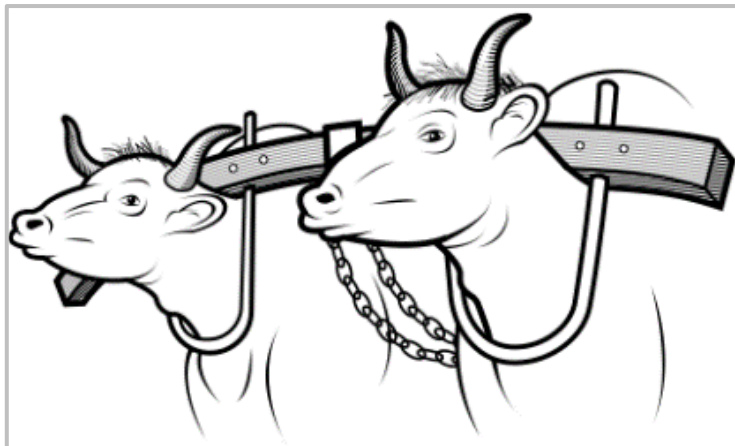
モンゴル帝国の圧政を示す表現である“タタールのくびき”に関しては、モンゴルが与えたロシアへの影響に対する様々な見解が語られている。果たしてその実態はどのようなものだったのか。また、現代のロシアに与えた影響はあったのだろうか。

### 第1節 タタールのくびきとは

タタールのくびきについて論じる前に、それぞれの言葉の定義を確認する。タタール（韃靼）とは、東モンゴル高原に遊牧したモンゴル系の一部族を指す言葉で、くびき（頸木／軛／羈絆）とは、牛、馬などの大型家畜（輓獣）を犁や馬車、牛車、かじ棒に繋ぐ際に用いる木製の棒状器具のことである（図5参照）。

このことからイメージされるように、タタールのくびきは、1240年からおよそ2世紀半（240年間）におよぶモンゴル帝国とキプチャク・ハン国による政治的、経済的支配による圧政で、ルーシ地域の民に対して「くびき」をはめたかのように、苛酷な支配をしていた状況を比喩的な表現として、当時のルーシ地域が負わされた歴史的苦難をさす言葉である。

図12：くびき



出所：<https://bible-cafe.com/story/415>

### 第2節 モンゴル帝国とルーシを巡る論争

タタールのくびきで表されるタタール支配の実態について、また、それが現代のロシアにどのような影響与えたのかについては、歴史家の間にかなり大きな見解の違いがある。ロシア中世史の専門家である松木は、「その懸隔はイデオロギーのないし方法論的差

異を含んでいてタタールの影響を重視するか軽視するか差だけに帰することはできないが、差異を生む少なくとも重要な論点の一つは、モンゴル支配時代がその後のロシアの歴史や社会に否定的ではない何らかの影響を与えたか否か、与えたとすればどのような点にその表れを見るべきかの問題にあると思われる。（松木、2018、p.79）」と述べている。

一方、このモンゴル帝国とルーシの関係性を示す文献については、歴史的に見てルーシ側の視点から記された文献は残されているものの、モンゴル帝国側の視点で記されたものがほぼ存在しない状況の為、見解が偏る傾向にあるのも事実である。それぞれの論争については次の通りである。

### 第1項 18世紀以後のヨーロッパ人の主張

18世紀以後のヨーロッパ人は、モンゴル帝国に支配されていた歴史をもつロシアはその影響を大きく受けた、と考えていた。例えば、次のような主張である。

ロシア人が西欧の文明や思想でいかに身を固めようとも、西欧人はロシアを遅れた「半アジア」と見なし、モンゴル支配がロシアの歴史と民族に与えた決定的影響を強調して、近代ロシアやソヴェトの社会の欠陥をしばしばそこに帰そうとした。曰く、モンゴルはロシアをヨーロッパから隔離してルネサンスと宗教改革という西欧の歴史的恩恵から遠ざけ、その経済収奪はロシアの停滞を固定化し、さらに悪いことにアジア的政治文化と絶対権力への奴隸的心性をロシア人の間に残して西欧的な民主主義化と資本主義化への道を塞いだ、等々。19世紀のヨーロッパ人は「ロシア人を一度むくとタタール人があらわれる」という人種的中傷を含んだ品の悪い諺を繰り返していたし、20世紀にも、ウィットフォーゲルなどは帝政ロシアとソヴェト時代の「専制政治」は元朝中国の東洋的デスポティズムをモンゴル人がキプチャク・ハン国経由でロシアに伝播させたものと解説していた。（松木、2018、p.80）

つまり、18世紀以後のヨーロッパ人にとって、タタールのくびきは、ロシアに対するモンゴル帝国の人々の野蛮で残酷な支配と収奪の歴史であり、それは近代のロシア人にも引き継がれるほどの影響を及ぼした、という考えである。そのため、ロシア人がいくらヨーロッパに近づこうとしても、ヨーロッパ人の仲間としては認められなかったのである。

### 第2項 20世紀のソビエト連邦における歴史家らの主張

一方、20世紀のソビエト連邦における歴史家（帝政期を代表する2人の歴史家ソロヴィヨフ、クリュチェフスキー）は、先のヨーロッパ人の主張とは対照的に、ロシア史におけるモンゴル支配の影響は無かったと主張していた。

（ソヴェト時代の歴史家は）二世紀半のモンゴル時代はそもそも存在しなかったか、存在するにしても否定的作用はともかくロシアの文化や社会に何の作用も及ばさなかったとの態度を貫いている。これは、モンゴルには「ヨーロッパ」社会に影

響を与えうるような文化が無かったという西欧的観念の共有の結果だったようにも見えるし、あるいは不幸な時代がロシアを「タタール化」したという西欧人の認識に対するロシア人の拒否反応の表れだったとも解釈できる。ソヴェト時代の歴史家はキプチャク・ハン国の研究でも、モンゴル時代のロシア史でも多くの新しい視点や事実を明らかにしたが、しかしモンゴル支配がロシアの社会と歴史に「遅れ」以外の肯定的なものをもたらさなかったという大枠では前代の認識と余り隔たりはない。(松木、2018、p.80)

つまり、20世紀のソビエト連邦における歴史家にとっては、タタールのくびきは、モンゴル帝国に支配されてはいたものの、あまり深いところには入らず、近代ロシアを構築するうえで文化的、社会的な影響は一切与えてはいなかったと言うのである。

### 第3項 20世紀のアメリカにおける歴史家らの主張

また、20世紀のロシア生まれのアメリカの歴史家ヴェルナツキー（1887-1973年）は、ユーラシア主義の流れをくみ、モンゴル帝国の支配の下で広大なユーラシア平原を統一したモンゴル時代（1238-1471年）の重要性を強調し、タタールを含む遊牧民との関係にロシア史の理解を深めようとしていた。

ユーラシア主義はロシアの民族、文化、歴史をヨーロッパでもアジアでもない「ユーラシア」という地理的枠組みで把握すべしという考えを基本にするが、モンゴル帝国の後継者であり「ユーラシア人」であるロシア人が中央アジア、シベリア、カフカースを含む全「ロシア帝国」領を統治することを是認するという政治的主張を含んでおり、この点で「帝国主義」「植民地主義」の一思湖と目される。ヴェルナツキーはユーラシア主義のそうした政治的臭気を払拭しつつ、モンゴル支配時代の影響を重視するだけでなく、一般にステップや内陸アジア世界がロシア史に占めていた比重に大きな意味を与えた。ヴェルナツキー以後、アメリカのロシア中世史学には多少とも彼の問題提起を視野に入れた研究、ヨーロッパやロシアでモンゴル時代に否定的作用だけを見ようとする見解を批判し、それがロシア社会とその後の歴史に及ぼした影響を出来るだけ客観的に検討しようとする研究も生まれている。(松木、2018、p.81)

結果として、ヴェルナツキーは、先のヨーロッパ人の主張以上にロシアをアジア的に描くアメリカの第一人者となったのだ。しかしそれは決して悪い意味ではなく、モンゴル時代がロシアの発展に良い影響を与えたという主張となっているのである。

また、アメリカの歴史家ハルパリン（1946）は、ルーシとタタールの関係の再評価の必要性があると主張している。ルーシとタタールの関係は複雑であり、文筆家たちはそれを秩序立てて隠そうと試みたという。また、ルーシとタタールの関係の像は断片的であり、推測に基づいて再構築されている。実際に、ルーシの文献から、タタール人の妻を持

フルーシの公や幕営との交易の記録が見つまっている状況で、中世ロシア人の生活へのタタール人の影響は戦時だけでなく平時や政府、商業、社会、経済にも広がっていたといえる。中世ロシアの原文の再評価と新たな証拠の発見が必要で、ルーシの公たちの前で服従する時代を再評価する必要があると主張している。

#### 第4項 21世紀の日本の歴史家らの主張

ヨーロッパ、ソビエト連邦、アメリカとそれぞれの主張を示したが、ソビエト連邦の歴史が主張する、モンゴル支配とその後、長期にわたって続くモンゴル後継国家との関係が、ロシア社会に影響を残さなかった、とは実際には考えづらい、というのが日本の歴史家の主張である。ロシア中世・近世史の歴史家である栗生沢（1944）や宮野（1972）は、本来のモンゴル支配時代（1238-1471年）について多くを論じており、松木は、モンゴルの影響を思わせる制度や事象はむしろモンゴル支配から脱却した後のロシア社会に具体化しているという現象があり、モンゴルとの関連なしには論ぜられない点があると主張している。

次の節より、これらの主張の実態についてさらに研究を進める。

### 第3節 タタール税制度から見る経済的支配の実態

モンゴル帝国による“くびき”と表現された圧政の実態を調べるにあたり、支配していたモンゴル帝国の税制度を見ることで、経済面での実態が見えてくると考えた。モンゴル帝国が課したタタール税については14世紀の文書に記録が残っている。この時期から府主教座所領に課され始めたと考えられることは、宮野によると次のようにプリグーゾフとA・J・ホロシケーヴィチにより説得的に論じられていたようだ。

モスクワは1392年にニジニ・ノヴゴロド公国をモスクワに併合したことにより、同公国に割り当てられた分のタタール税をハンノのトクタミシュに支払う必要に迫られた。このことはまずノヴゴロドにおけるタタール税の割り当ての増加に結びついたが、次にターゲットになったのが府主教座所領だった。そこで大公ヴァシーリーはキプリアンと結んだ協約文書で初めて府主教座の所領にタタール税を課したという。このように、確かに大公に払う形でタタール税の供出が設定されたのである。（宮野、2016、p.8-9）

タタール税の実態については、1392年の大公ヴァシーリー1世と府主教キプリアンとの協約文書の中に記されていた。尚、協約文書は、中世ロシアにおける大公権力と教会権力との関係、特に管轄権について記されたものである。

タタール税はジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）への支払いであったが、中世ロシア内ではどのような取り扱いであったのだろうか。

(タタール) 税は大公を通じてハン国に流れるものとして設定されており、形式的には大公は徴税請負人の立場に過ぎなかった。…… (中略) ……この時期からは次第にモスクワの収入となる場合も生じてきた (タタール税の拒絶の可能性、そしてタタール税が諸公の収入に変わることが初めて直接的に言及されたのは一三八九年の大公ドミトリーとセルプホフ公ウラジーミルとの条約においてであり、同年のドミトリー大公の遺言状では「神がハン国を交代させれば、余の息子たちはハン国にタタール税を支払わずに済み、余の息子たちがその分領で得た貢税は彼らの物になる」とタタール税がモスクワの収入になることを現実のあり得る状況として想定している。ДП.С.31,36)、ハン国に力がある場合には依然として税はハン国に渡っていた。このように、府主教座に対する税の設定は大公により行われたものの、税そのものは必ずしも大公に流れていないのである。尚、これに関連して、この段階でタタール税の供出は臨時税的な側面を有していた(「大公が払う場合には…」)ことも考慮したい。…… (中略) ……大公も、府主教座から上がる分とは別に自らの分をハン国に払っていた。つまりタタール税はハン国という、いわば上位の権力から両者に降ってかかっているものであり、国家と教会という二項対立的な管轄の変化を見る指標としては参考にしにくいのである。(宮野、2016、p.9)

つまり、タタール税については、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)に対して支払う制度はあり、実行されてはいたものの、モスクワの収入となる場合も出てくるなど、特にモンゴル帝国の経済的支配による厳しい徴収があったわけではなく、一般的な税制度だったと想定できる。

## 第4節 中世ロシア人のタタール認識

次に中世ロシア人がモンゴル帝国に対してどのように認識していたのか、理解を深める。ハルパリンは、ロシア史上におけるタタールのくびきは、モンゴル人によるルーシ征服の歴史であり、ロシア人にとっては負の記憶であったが、年代記を読み込むことで、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国、ロシア語ではゾロタヤ・オルダ)の真実に迫り、従来の偏見やゆがんだ歴史叙述を超えて、モンゴル人がもたらしたロシア史への影響を明らかにし、ロシア人とモンゴル人との関係に新たな解釈をもたらす研究を進めていた。書籍「ロシアとモンゴル 中世ロシアへのモンゴルの衝撃」(ハルパリン、2008)を基に筆者がまとめたものを以下に示す。

### 第1項 中世ロシアの地理と正教会の影響

中世ロシアは、ヨーロッパのキリスト教世界との遠い縁に位置していた。また、ロシアはモンゴル領土の最西端であり、広大なモンゴル領土と接していた。この中世ロシアの特殊性として、ビザンチウムや西ヨーロッパと文化的に結びついており、ルーシはジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)支配下で、偶像信者やムスリムの東方世界とも関係が

あった。また、中世ロシアは征服された土地であったが、征服者の正体がしばしばはっきりしなかったと言われている。

モンゴルの影響については、モンゴル人は直接の占領を必要とせず、黒海とカスピ海の大草原で遊牧する民を利用するなど、間接支配であった。しかし、長期にわたったモンゴル人の征服はルーシに深く浸透し、制度や文化に影響を与えた。ただし、征服者側がルーシの文化的特徴を取り入れる傾向はなく、文化的には一方向の影響のみであったと考えられる。

ジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）の影響力はルーシの発展に大きな影響を与えた。モンゴル人の騎兵隊による破壊は大きかったが、商業の発展も重要な影響を持ったのである。松木は、モスクワ国家の君主らはモンゴルの支配者的な装いをしており、モンゴル側の統治者（ハン）を、皇帝を意味する“ツァーリ”と呼ぶようになったこと、またルーシの正教会がモンゴル人の庇護の下で富と影響力を増したことなどを次のように指摘している。

16-17世紀のモスクワ国家の君主である「ツァーリ」もまた、少なくとも東方ステップ諸国家との関係においては「正統なタタール支配者」的装いをこらしていたように見える。ロシア人は、キエフ時代以来正教キリスト教を守る世俗世界の最高権力者の称号としてビザンツ皇帝にのみ認めてきた「ツァーリ」をモンゴル支配時代以降は一貫してチンギス・ハーンの末裔たる正統なタタール支配者＝ハンと呼称としても使い、モンゴルの手厚い保護を受けたロシア正教会はミサの法要帳にビザンツ皇帝とタタールのハンの名を同じツァーリ称号で列記してその健康と魂の救済を祈った。15世紀にビザンツ帝国とキプチャク・ハン国が解体し、政治的・宗教的に自立したモスクワ国家の君主が16世紀にツァーリ称号を自分のものとしたとき、この称号のイデオロギー的内容がビザンツ帝国の後継者意識の色彩を著しく強めたことは否定できないが、東方諸国との国際関係に限定して言えば、モンゴル支配時代以来定着したハン位継承者としての「ツァーリ」の要素が皆無だったともいえない。16-17世紀のモスクワ国家はキプチャク・ハン国の後継国家のハンも、モスクワ国家に取り込んだハン末裔も一貫してツァーリ称号で呼んでいたからである。モスクワの君主に仕えたチンギスの末裔（カシモフ・ハン）は貴族会議には参加しないものの、身分的には貴族より上だと17世紀の外交官コトシーヒンが述べている。（松木、2018、p.86-87）

このように、ロシア正教会との関係性も大きく影響しており、政治的、宗教的な複雑さが増してくるのである。

## 第2項 沈黙のイデオロギーと中世ロシアの歴史記録

ルーシはジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）内で特異な地位を持っており、征服され重い貢税の下で生活していたものの、自主性を保持し、ある程度までは思い通りに行

動できたことが解っている。この自主性が、いわゆる「沈黙のイデオロギー」の存在を可能にした。

ルーシは中世の境界地帯に位置していたが、異教徒との協力を正教の宗教的教義に反しないようにしており、キエフの遺産のひとつとして、大草原の諸部族との関係を記述する語彙を持っていた。モンゴル軍がルーシをモンゴル帝国に加えた後に、その大部分がルーシの土地から引き上げた後、ルーシの文筆家は「敗戦」による従属があったことを「恐るべき政治思想上の問題」として直面することを避け、ルーシ人の従属状態の歴史を否定する表現を使って、ルーシは独立を保持したという作り話を記録として残したのである。

「沈黙のイデオロギー」は、ルーシ知識人の知的態度を強調するものとして使われる表現である。中世ロシアの年代記作者らが、ロシアがジョチ・ウルスの支配下にあったという事実を意図的にあいまいにしようとしている態度を指す(加藤、1998、p.6)。つまり、「中世のキリスト教とイスラームの混在社会は—民衆の同意によって、集団としての申し合わせによって、あるいは社会的集まりによって—彼らの周りにおける証拠からは結論を引き出さないと事実上決心した(ハルパリン、2008、p.27)。」というように、彼らの価値観に矛盾することや不都合なことは無視してきたことを示している。

この歴史的重要性は興味深い。つまり、中世ロシアの歴史記録は、一定の方針に基づいて計画的に作られた物であるということだ。中世ロシアの多くの歴史家は、ルーシの社会が、キリスト教の砦にしてビザンツ文明の相続人であるという誇りに固執するあまり、家無き遊牧民であるモンゴル人の影響を受ける可能性を認めるのを嫌ってきた。歴史家らはモンゴル支配下の時代について、ただただルーシ社会が活気を失い、あるいは文化的経済的に衰えた状態にあった時代として解釈したのである。

つまり、彼らの歴史記録は偏見や誤った判断によって歪められている可能性があるため、注意深く解釈する必要がある。しかし、以降の時代の歴史家たちは、偏見もしくは無関心から、それらの資料を書かれたままに受け入れ、しばしば誤った理解が導かれた。

「沈黙のイデオロギー」を理解して行間を読むことが、中世ロシアの文章の意味することを正確に読み取るために絶対的に必要な条件となる。

### 第3項 ルーシ人の生活と流動的な政治関係

ルーシ人の生活に関して、中世ロシアの知識人らはキリスト教の基本理念に従って行動し、獸的な抑圧と苦しい抵抗という単純化された表現で示されることがあったが、ルーシの文書を額面通りに受け取ってそれに過度に依存し、モンゴル時代の出来事をルーシ側の動機と力量で解釈する誤りを侵していた。

公国間の流動的な政治関係としては、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)の発達、外交政策、内部の政争がルーシに重大な影響を与えたことが解っている。ルーシの公たちは過剰な行動を避け、ルーシの諸公国がタタール人に対抗して連合することさえしなかったのだ。公国間の関係は流動的で、ルーシの公たちはタタール人に対して、情勢が有利に見えるると反逆し、情勢が不利に見えれば味方を裏切って敵に協力するという「流動す

るはめ込み細工」のような行動をとっていた。また、各公国は蜘蛛の巣のような同盟関係の中心にあり、ジョチ・ウルスや派閥と結びついていたのである。

#### 第4項 ルーシにおけるタタール認識

一方、ルーシにおける中世ロシア人のモンゴルに対する認識は、拒絶や排除といったものではなかったことがわかっている。松木は、当時のロシアの貴族層について、具体的な数字を用いてモンゴル系が一定の存在感を示していたことを指摘している。

中世ロシア人、つまり17世紀末までのロシア人のタタール観やタタール・イメージは近代ロシア人のそれとは相当に違っていた。とりわけ支配層はタタール人とタタールの価値を頭から拒絶したり排除したりはしていなかった。例えば16世紀のスラヴ人貴族社会は、ビザンツやドイツやリトアニア出身のエリート家系とならんでタタールの出自をもつ有力者を貴族の仲間として受け入れていた。ロシア人とタタール人の支配者間の通婚はモンゴル支配時代にも存在したが、モスクワ君主に「仕官」する形でタタール人エリートがモスクワ社会に流入し、改宗や通婚を通して社会的に同化する過程は、当然だがロシア・タタール間の政治的力関係が逆転したあとで急速に進展した。ある研究によれば17世紀のロシア士族・貴族層のうちのおよそ17パーセント156家族がモンゴルないし東方系人種の血を引き、非ロシア起源の家系としてはドイツ系やポーランド・リトアニア系とならぶ重要な源泉をなしていたし、またある計算では一七世紀初頭までにモスクワの君主に仕えたチンギス家系の出自をもつ一門だけで60家族、その一党や従者を加えて数千人のタタール人がロシア国家で働いた。だがこういう計算の根拠になる家名や紋章や家系書資料などには不確実なものが多く、算出された数字に信頼はおけないという指摘も無視できない。しかし16世紀につくられた家系書についてここでもっとも注目すべき点は、エリート家系の起源や歴史にどれだけの真実が記録されているかではなく、当時の国家と社会がタタール人の血筋を名誉ある家系、つまりロシアのエリート社会を構成するに相応しい出自の一つとみなしていた事実そのものにある。これらの家系書が作られたのがタタール支配が終わってすでに相当長い時間が経過した時点であり、さらに教会人による反イスラム・反タタール思想が増幅されていた時期でもあったことに注目する必要がある。（松木、2018、p.85-86）

タタール支配下のルーシとの関係を見てみると、ルーシとモンゴルの戦士たちは共に戦い、交流していた記録があり、ルーシの公がタタール人の妻を迎え入れている者もあり、また、交易のための大遠征隊がサライとルーシの森との間を旅したという事もある。

16世紀のモスクワ国家はキプチャク・ハン国の後継諸国家と政治的・イデオロギー的に対立してはいても、その内部では依然として、家柄の高さを示す目的で作られた家系書がタタール・エリートの出自を堂々と貴族的起源の一つとして誇示してい



たのである。いずれにせよタタール出自の家系を名誉あるエリートとして遇するよ  
うな社会のあり方が、「野蛮なアジア人」式のモンエリートとしてモンゴル・タタ  
ール観が支配的になる近代の社会状況と相当な懸隔があったことは確かである。

(松木、2018、p.86)

つまり、実際のところルーシとタタールは社会的に融合した部分を持ち、強い対立が  
あったわけではなく、共に歩んできたと解釈できる。やはり、社会的にも“くびき”で表さ  
れるような圧政は無かったと考えられるのではないだろうか。

## 第5節 タタールのくびきの語り部

2023年7月に行ったフィールドワークにて、ロシア中近世史を専門とする宮野裕教授  
(岐阜聖徳学園大学教育学部教授、著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』な  
ど)に話を伺った。以下、タタールのくびきに関する部分の要約である。

モンゴルがルーシ支配を行い、モンゴルはロシアを超大国にしたよき存在、ロシア  
はモンゴルの相続国家であるという指摘は大雑把で、詳細を研究する必要がある。  
しかし、モンゴル側の主張(文書)は中国・イラク方面については残っていたが、  
ロシア方面についての文書はほとんど残っていないため、ロシア側の一方的な言い  
分のみが残っており対等な確認が困難な状況である。

実際のところ、13世紀当時の知識人であるロシア正教会聖職者により自己中心的に  
残された被害者側史料から19世紀の人々が受容し、モンゴル=悪しきもの、という  
被害者意識の中で、タタールのくびきという黒歴史として語り継がれてしまった結  
果である。緩やかだったと結論づけるつもりはないが、一定のルールに基づいた関  
係があり、それに配慮する限り、穏やかな関係が結べていたようだ。

16世紀初頭、ジョチ・ウルス崩壊後、ロシアのイヴァン雷帝はカザン・カン国など  
を征服。その後のシベリア統制において、タタールの慣行を一部利用したため、ロ  
シアがモンゴルを相続したとする見方もあったが一つの側面に過ぎない。残酷な部  
分、専制制度などをロシアがモンゴルから引き継いだとする議論は、ここからは成  
り立たない。(宮野、2023、フィールドワーク議事録)

ここでもタタールのくびきは、言われているほど厳しいものではなく、現代までロシ  
ア人の思想習慣を縛るものでもないようであるが、一方で全く影響がなかったとも言えな  
い状況であることがわかる。

## 第6節 結論：タタールのくびきは後から作られたイメージ

松木は、モンゴル支配時代のロシア人は、タタールのくびきという概念を持たず、後  
世に作られたものだと指摘する。

現在使われている意味での「タタールの軛」なる語の起源が一六世紀に始まるか一七世紀後半からかは議論のあるところだが、モンゴル支配時代のロシア人にこのような概念がなかったことは確かである。最近のオストロウスキの研究によれば、一六～一七世紀モスクワ国家の教会人たちがモンゴル・タタールの影響で親タタール化した俗人支配者たちを引き戻すために生み出した反タタール・イデオロギーの一つの表れが「タタールの軛」の語の誕生だったという。モスクワ時代の世俗的行政はモンゴル・タタールから、教会行政は専らビザンツの影響を受けたとの理解に立脚しているこの見解の成否は議論の余地を残しているが、モスクワ時代の全体を通して、少なくとも国家行政の俗人エリートたちが「タタールの軛」のような反タタール・イデオロギーとは疎遠だったという意見は注目に値する。要するに「タタールの軛」なる概念はモンゴル支配時代のロシアにはまったく存在せず、「くびき」解放以後のモスクワ時代にも俗人エリートたちの実際行動を規制するには至らず、本質的には近代以降に支配的となる概念と考えてよかろう。

しかし、一五世紀に「くびき」を脱却したことで「厄災」としてのタタール問題がすべて解消したわけではないという面にも注意が必要である。キプチャク・ハン国解体のあとに成立した後継国家のうち、ヴォルガ流域の諸ハン国はイワン四世時代にロシアに併合される。しかしクリミアと黒海北岸ステップに成立したギレイ朝のクリミア・ハン国だけは、オスマン帝国の強大な力を背景に一六世紀から一八世紀末までロシアに厄介な災いをもたらし続けた。クリミア・タタールはロシアとポーランドの南部をほとんど毎年のように襲撃し、多数の男女スラヴ人を捕虜にして連行し、奴隷として外国商人に売却したからである。（松木、2018、p.88-89）

以上より、タタールのくびき(モンゴル帝国による圧政)はロシア正教会聖職者の被害者意識により後から作られた誇張されたイメージであったことがわかった。

モンゴル帝国による支配では、経済的にはタタール税を貢納する制度があり、政治的にも社会的にもモンゴルが統治していたものの、“くびき”と呼ばれるほどの残酷で野蛮な圧政は無く、緩い統治が行われていたものと考えられる。モンゴル帝国の時代はロシアの歴史の一部であり、現代のロシアに対する直接的な影響は薄い。しかし、共存していたこともあり、歴史的な経験や文化的な相互作用が、ロシアのアイデンティティや文化に影響を与えている可能性は充分にあると考えられる。

## 第12章 ロシアとモンゴルの関係に影響を与えた宗教の役割

本章では、次のような問題意識に基づいて、モンゴルとロシアの関係に宗教が与えた影響について論じる。(1)ロシア地域がモンゴルの支配下に入る過程、また独立する過程で、宗教はどのような役割を果たしたのか、(2)近代以前には、宗教と統治の相互依存関係は幅広い地域でユニバーサルに見られたが、近代へとつながる歴史の中で宗教と統治の関係はどのように変化していったのか。モンゴルとロシアにおける宗教と統治の関係の入口として、現代に生きる我々の参考になりたい。

### 第1節 モンゴル帝国における宗教

この節では、モンゴルの宗教について振り返る。

チンギス・ハンはテングリ信仰(自然崇拝)を維持したが、他の宗教に関して弾圧することはなかった。朝貢する民族がモンゴル式の宗教儀礼を尊重し従う限りにおいては寛容だったとされ、他宗教は対立する存在ではなかった。

元となってからはチベット仏教が公認宗教となったが、モンゴル地域の民衆は引き続き自然崇拝によるシャーマニズムを信仰し、それは現代のモンゴルでも一部に残っている。また、広大な地域をそれぞれ統括する形であった王族らが信仰する宗教についても、厳しい制約はなかった。例えば、ジョチ・ウルス2代目ハンのベルケ(チンギス・ハーンの子孫、ジョチの三男、バトゥの弟、治世1242-1255、1266没)は、ジョチがムスリムの乳母、教育係を選び、本人もムスリムだったという。また、1330年までには3つのハン国のすべて、すなわちジョチ・ウルス、フレグ・ウルス、チャガタイ・ウルスがムスリム国家になった。

元朝は、民族や宗教によらず優秀な者を重用したことで知られる。例えば、天文学、数学に優れたペルシア人等も多用していた。チャガタイ・ウルス(1225-1340)では、モンゴルの伝統的な法「ヤサ」を遵守する一方で、チャガタイ(治世1225-1242、チンギス・ハーンの子)はイスラム教徒ハバシュ・アーミドを宰相として重用した。その後、次第にイスラム教の中でもスーフィー(神秘主義)が優勢となるとともに、モンゴル王族のイスラム化、定住化が進行していく。1340年代には、西は定住、東は遊牧という住み分けが進んだ。東チャガタイ・ウルスでは、新疆で仏教勢力が駆逐され、イスラム教が定着した。

## 第2節 ロシアがモンゴル支配下に入った経緯における正教の影響

「はじめに」の年表および第11章で示した通り、モンゴル地域は1240年から1480年まで2世紀超にわたってモンゴル帝国の宗主下にあった。モンゴル帝国の西方地域を治めていたジョチ・ウルスがロシア地域を侵攻したことにより始まったのであるが、ロシア側もモンゴルの支配下に入ることを選んだのである。

### 第1項 ロシアがモンゴルの支配を選んだ

ジョチ・ウルスがロシア地域に侵攻した当時、ロシア地域は3方向からの圧力を受けていた。モンゴルに加え、スウェーデン人、チュートン・リヴォニア騎士団からも攻撃を受けていたのである。その際、ノブゴロド大公アレクサンドルは、ジョチ・ウルスと和議を結んだ上で、1240年にネヴァ河の戦いでスウェーデンを下し、1242年には北西ヨーロッパからの侵攻を退けた。

アレクサンドルがモンゴルと和議を結んだ大きな理由の一つに、モンゴルは宗教に寛容で貢納を免除していたことがある。一方、カトリック勢は正教に対して改宗を要求しており、彼らと手を結ぶ選択肢はなかった。宮野はその証左として、アレクサンドルが1248年から1249年にカラコルムに赴いた際、タタールの支配が税や徴兵など貢納を柱とする間接支配であり、宗教的な寛容が保証されていることを知ったことを示し、ルーシ諸侯も彼の考えに同調的であったと考えられることを指摘している(宮野、2023、p.30~31)。さらに、正教会がアレクサンドルの考えを積極的に後押しした。宮野は「まさに正教会がこれを歓迎していたと考えてよい」(宮野、同、p.30)と表現している。ロシア正教の支持があったからこそ、ロシアがタタールの支配を選んだともいえるのである。

モンゴルの支配下に入ることを選んだアレクサンドルは、11章で述べた「タタールのくびき」論が主流だった時代には蛮族に下った者として批判されることがあったが、広くは「アレクサンドル・ネフスキー(ネヴァ河で勝利したアレクサンドルの意)」と呼ばれ、正教キリスト教を守護した英雄として尊敬を集め、後年、聖人にも列聖されている。廣岡は、これが「ロシア愛国主義の源流」であると指摘する(廣岡、2020、p.64、p.69)。

### 第2項 モンゴルからの決別

ロシアがモンゴルの支配から離れていった過程と、宗教の関係についてまとめる。

第1節で述べたように、14世紀初頭からジョチ・ウルスのモンゴル王族はイスラム教に改宗していった。この結果、ロシア地域では、従来は寛容であったロシア正教会への態度が激変的に変化していった。

また、この頃にはキエフに代わって北方の都市に勢力が移り、モンゴルの認可を受けて地域を治め徴税・徴兵に責任を負っていた大公の中でも、モスクワが力をつけるといったロシア地域内の勢力バランスの変化も起こっていた。

そのような情勢下、モンゴルから離反する動きが徐々に表面化していく。廣岡は、この過程においても正教が重要な役割を果たしたとして、1380年のクリコヴァの戦いは、モスクワ大公が修道院長の意見を入れてモンゴルと戦う決断をしたとする。

1380年8月、モスクワ大公ディミートリーは、他のロシア諸公と同盟を結んだうえで、ロシア正教のラドネジ修道院長の聖セルギーを訪問し意見を問うた。セルギーは、タタールと戦うべきだと進言、南の平原で敵の攻撃を迎え撃つように勧めた。『前進せよ。恐れるなかれ。主は汝らを助け賜わん！』(廣岡、同、p.74)。

これを受けて同年9月、ディミートリーはクリコヴォの戦いに臨み、ママイに勝利することとなる。教会は、「ロシア愛国主義の鼓吹者として」(廣岡、同、p.70)の役割を果たしたのである。

ただし、この時点ではモンゴルの支配は終わらなかった。クリコヴォの戦いの裏をかいて、トフタミシュ・ハンがディミートリー不在のモスクワを攻撃したからである。モンゴルの支配はさらに100年続くこととなる。

だが、クリコヴォの戦いの勝利は、その後のロシアの独立に向けてロシア人らの心理的な側面で大きな転換点となった。廣岡は、「ロシア人とタタール人の関係を決定的に変えるものであった。それまで無敵と思われていたタタール人をロシア人は恐れなくなった」(廣岡、同、p.76)としている。

時は現代に下って1980年、クリコヴォ平原の戦い600年祭がロシア各地で正教会を中心に盛大に挙行され、ディミートリーは聖人として列聖された。ロシアに独立をもたらした者として、現代のロシア正教会がお墨付きを与えた形である。

### 第3項 タタールのくびき以降のモンゴルとロシアの関係

モンゴルから独立した後も、モンゴルとロシアの関係は敵対的というほどにはならず、交流は続いていた。

15～16世紀には、モンゴル族内の勢力争いから逃れ、ロシアへ移住したモンゴル人が多くいた。ロシア、リトアニアなどは、むしろ積極的にモンゴルの王族たちを誘致していた。濱木はケネディを引用しつつ、「1440年代から1600年まで、60人以上のタタール人の王族と、何千もの軍人やその家族がロシアに移住してきた」(濱本、2009、p.35-36、Kennedy、1994)とする。

大量の移住者が草原からモスクワに至った理由としては、「モスクワ側がほとんどつねに好条件を示して草原における諸政権の貴顕、とくにハン一族をモスクワに勧誘していたこと」(濱木、同、p.37)ことによる。なぜならば、「ハン一族は、モスクワの対草原外交において大いに利用価値があったからである。ハン一族を勧誘したのはモスクワだけではなかった。リトアニア大公国もハン一族の誘致に熱心であり、15世紀末には

モスクワ国家とリトアニア大公国との間で同一のハンの一族をめぐって招致合戦が繰り返された」(濱本、同、p.37、Kennedy、1994、p.46-77)からであった。

松木は、実際にロシアに移住したモンゴル王族およびモンゴル人の実態について、現在残っている記録は信頼できる数字ではないとしつつも、「家系書がタタール・エリートの出自を堂々と貴族的起源の1つとして誇示」(松木、2018、p.86)していたことを挙げ、「当時の国家と社会がタタール人の血筋を名誉ある家系、つまりロシアのエリート社会を構成するに相応しい出自の一つとみなしていた事実」に注目すべきとしている。(松木、2018、p.86)

この時代のモンゴル王族はイスラム教徒であり、ロシアにとっては異教徒であったが、ロシア側には、血筋や武力としての利用価値があるとの判断が上回ったようで、移住したモンゴル族との間で宗教による強い対立や差別はなかったようである。移住したモンゴル族の側も、異教徒の地だという忌避はなく、互いに利害が一致した状況が続いたといえる。

### 第3節 ロシアとロシア正教

#### 第1項 キリスト教以前

この節では、ロシアの宗教の変遷についてまとめる。

廣岡によれば、キリスト教以前は、ロシア地域においても自然崇拝が主であった。「キリスト教以前のその信仰は一種の自然宗教であり、太陽、風、大地、そしてとくに雷といった自然現象の中に表れる神聖な力を崇拝した。なかでも雷神(ペルーン)は、最も強力で、恐ろしい神と信じられていた」(廣岡、同、p.52-53)という。

988年、キエフを中心にロシアの国家的統一をなし遂げたウラジーミル1世は、東ローマ(ビザンチン)帝国に範を求め、東方キリスト教(ギリシア正教)を国教に採用した。この過程で、ウラジーミル1世は各地に人を派遣し、何がロシアに適しているかを調査させ、「さまざまな宗教を比較検討した上で選んだ」(廣岡、同、p.51)という。

正教を選択した理由として、廣岡は地域の教会の独立性があったと指摘している。「超民族的な普遍的教会を志向したローマ・カトリック教会とは違って、元来ギリシア正教は「土着主義」を原則としている。このキリスト教はそれぞれの民族教会の自治独立権を尊重し、またそれぞれの民族語による礼拝を認めた」(廣岡、同、p.53)というのである。

廣岡は一方で、この独立性がロシアとロシア正教会の精神的、文化的孤立につながったとしている。ロシア正教会は、ギリシア正教が使用していたラテン語を使用する必要がなく、教会儀式において教会スラヴ語を使用することができた。例えば十字架の様式もロシア正教会独自のものである。ラテン語文化圏で醸成されていった共通の宗教的規律や学問の発展についても、「ロシア人はこうしたラテン文化の影響をほとんど受けることがなかった」と廣岡は述べている(廣岡、同、p.54)。

ロシアはキリスト教という同じ宗教を共有しながら、ローマ法、ルネッサンス、そして宗教改革を知らなかった。しかも 1453 年、オスマン・トルコによってコンスタンチノーブルが占領され、東ローマ帝国が滅亡したとき、ロシアは正教キリスト教圏内の唯一の指導的な独立国家となった。その結果、ロシアはビザンチン文明の正当な承継者としての地位を獲得したとはいえ、他方で深刻な精神的孤立を経験しながら、独自の発展コースを辿っていくことになる。(廣岡、同、p37)

さらに廣岡は、ラテン語文化圏から遮断されたロシア正教会は、「『モンゴル＝タタールの軛』という苦難の時代にロシアの精神的な支えとして人々の支持を受け、むしろその勢力と影響力を増大させた」(廣岡、2020、p.67)とも指摘している。ロシア正教会の勢力拡大と民衆による支持、そしてラテン語正教会への対立感、孤立感は、後に東ローマ帝国の終了とともにギリシア正教会が本拠地を失った後、「ロシア正教こそが正しい正教である」という考えを支えることにもなった。現代において、ロシア正教とそれが支持するロシア政府の距離の近さ、またロシアの対欧州感を理解するうえで、示唆に富んだ事象といえないだろうか。

## 第2項 モンゴルからの独立後のロシアとロシア正教

ロシア正教における他の正教やカトリックのとらえ方をもう少し深める意味で、モンゴルの支配から離れた後のロシアとロシア正教についてもまとめる。

1438 年、フィレンツェ公会議(東西両教会の代表者会議)が開かれ、1439 年、東方正教会使節団は東西教会の再統一に関する協定に調印した。しかしこの時、ロシア正教会の承認はなかった。廣岡によれば、これは「ロシア人にとって、完全な自治独立権を持つロシア人の教会を確立する絶好のチャンス以外の何ものでもなかった」という(廣岡、同、p.80)。

1448 年、モスクワ大公ヴァシリー2世はロシア人主教会議を開き、自治独立権をもつロシア正教会の初代府主教としてロシア人を選んだ。そして 1453 年、トルコのメフメット2世の軍門に下ったコンスタンチノーブルの陥落をもって、ビザンチン帝国は終了すると、ロシア人は、1439 年の合意が神に祝福されなかった証拠と考えた。廣岡はこれを「真のキリスト教信仰はロシアでこそ花開き、実を結ぶと信じて疑わなかった」(廣岡、同、p.82)と表現している。

そして 1593 年、4つの総主教がコンスタンチノーブルに集まり、モスクワに5番目の総主教の座を与えることを承認し、モスクワ府主教は総主教へと格上げされた。廣岡は「『モンゴル＝タタールの軛』から解放されたロシアが、ツァーリと総主教という”俗”と”聖”の最高権威を確立するのに1世紀を要した」(廣岡、同、p.91)とする。ロシアにとって、このことはロシア独自の「ツァーリズムの完成」を意味した。

ロシア総主教は、4総主教とただちに同等という扱いではなかったが、ロシア正教の地位と勢力が確立していく大きな弾みとなった。廣岡によれば、「ほんの100年前にはロシア人は異民族に支配される奴隷的な境遇に甘んじていた。16世紀にいたって彼らは、過剰なまでに宗教的使命をも自覚する大帝国の建設者となった」(廣岡、同、p.91)のである。

その後のロシアにおいても、歴代の皇帝との関係により強弱はあったものの、総主教の権力は増大を続ける。そして、イスラム支配下にあるコンスタンチノーブルに代わり、モスクワこそが正しいキリスト教の中心地であり「第3のローマ」であるという考えが強まっていく。

ロシア正教と皇帝との関係は強化されて行くが、15世紀に入り、皇帝ヴァシリー3世(在位1505-1533年)の離婚と再婚を認めたことをきっかけに、皇帝へ従属する関係へ移行していった。ヴァシリー3世の息子イヴァン雷帝は、1551年に自身が主教会議を主宰し、厳格な教会規律を定め、教会の土地所有に一定の制限を加えることを決定した。

こうしたロシア独自の動きを快く思わなかったのが、ギリシアの正教会である。1666年に開かれたモスクワ公会では、東方正教会の総主教らが、ロシア正教会を批判した。「『第三のローマ=ロシア』の理念を公式に否認し、その旗を降ろさざるを得なかった」(廣岡、同、p.120)。モスクワ正教会が東方教会の模範であるという宣言も撤回を強いられることになる。

17世紀にピョートル大帝(在位1682-1725年)が西欧的な近代国家を目指すと、さらに教会の権力が削がれる。西欧的な慣習を取り入れ、様々な分野の専門家を西欧から招聘した。一方、教会はロシアの伝統を守るべきとして、西欧化に反対する立場をとったため、ピョートルは総主教の代替わりを認めず代理を指名することで総主教制度を事実上廃止し、新しい教会の規定を定め、教会組織を管理・統制する監督機関を任命し、それを皇帝直属の大臣の支配下に置くシノド制(聖宗務院制)に移行させた。監督機関のメンバーは、就任時に「私は、全ロシアの皇帝、わが恵み深い君主がシノド会議の至高の裁定者であることを承認いたします」と宣誓しなければならなかった(廣岡、同、p.128)。

### 第3項 ロシア革命以降のロシア正教

1917年のロシア革命後、革命政府は原則として宗教を禁止したため、ロシア正教会は弾圧を受け、教会の財産を没収した。多くの聖職者、信徒が殺害された。

スターリン政権下では弾圧が強化され、1933年には教会数は革命前の15~25%に減少した(廣岡、同、p.171-172)。

しかし、信徒が聖職者を守り隠したという逸話や、教会が秘密裏に活動を続けたことで、ロシア正教が完全に力を失うことはなかったとされる。廣岡は「一九四〇年当時、スターリン政府が試みた概算によっても、ソ連邦の宗教人口は、総人口の四〇~四五%に当たる八〇〇〇万人から九〇〇〇万人を数えたといわれている」(廣岡、同、p.185)とする。



ソ連崩壊前後になると、ロシア正教会を認めることで、ロシア民族のアイデンティティの象徴として活用しようという動きが出てくる。1988年4月、ゴルバチョフは高位聖職者をクレムリンに招き「政教和解」した。続いて1990年10月1日、「良心の自由と宗教団体に関する法律」で法的に正教会の存在を保障した。

廣岡は、ソ連邦崩壊後のロシアのアイデンティティを支えるものとして、宗教性の存在が大きいとす。

レーニン主義の権威が失われ、経済の破綻と民族紛争の激化という二重苦に喘いでいたロシアにあって精神的・道徳的な支柱としてのロシア正教会への期待がますます大きくなっている事実は想像に難くない。……（中略）……教会首脳が精神的指導者の立場から、民族対立や犯罪の増加といった問題に対して発言する機会が増えていった。（廣岡、同、p.44）

#### 第4節 宗教と統治の分離: ウェストファリア体制へ

モンゴル、ロシアに限らず、近代以前の世界では、宗教は統治に正統性を与えるものとして強い影響力を持ち、また、民族の求心力の基ともなった。現代でも宗教は様々な形で社会に影響を及ぼしているが、現代の民主主義国家の制度においては、法的に政教分離が確立しない場合でも、宗教団体が選挙による支持を経ずに明示的な形で政治権力を発揮する仕組みにはなっていない。

政治と宗教の関係については、ジャック・ロベールによる3つの類型がある（大石、1982、p.83-85）。大石の解説によれば、宗教と国家が区別されず、宗教的権威と政治的権威が融合・一致した「融合型」、教会と国家が独立した社会であることを前提として両者の間に何らかの法的関係がある「同盟型」、政教分離が法的に定められており、信教の自由を保障しつつ、政治が宗教の運営に関与することを拒否する「分離型」である。

日本に住む我々にとって最も身近なのが「分離型」であろう。日本国憲法では、第20条1項、3項、第89条で政教分離が規定されている。米国では憲法修正第1条で政教分離を既定しているが、米国連邦議会では開会の際に祈りが捧げられるなどの宗教的慣習がある。フランスも政教分離を定めている。

「融合型」の典型例の1つはバチカン市国だが、英国も融合型であり、政治と宗教は法的に分離されていない。国教会制定法によって議会在イングランド教会をコントロールする。国王は国教会の主教任命権を有し、公教育で礼拝を行う場合はキリスト教であることが教育法で制定されている。信教の自由については、ヨーロッパ人権規約(1953年)への調印によって担保されている。イタリア、イスラム諸国なども「融合型」である。

「同盟型」であるドイツでは、教会は憲法上認められた地位を持つが、政治からは独立しており、政治と競合する分野では協約を結ぶとされている。

それでは、このような宗教と統治の分離は制度としてどのように現れたのだろうか。1648年のウェストファリア条約以降に確立した主権国家体制についてまとめる。

1648年、宗教戦争ともいえる30年戦争の講和条約であるウェストファリア条約によって、主権国家体制が成立した。主権国家の特徴は、常備軍と官僚制、つまり、暴力機構と徴税機構の独占である。神聖ローマ帝国が終了し、諸侯が国として独立、国による国内統治権、国同士の対等の権利が確立し、一方で、神聖ローマ帝国皇帝、ローマ法王の普遍的権威が否定された。制度の面において、宗教から国家(国家権力)が切り離された出来事といえる。

表2：30年戦争からウェストファリア体制への経緯(年表)

| 年         | 出来事             |
|-----------|-----------------|
| 1517      | ルターの宗教改革        |
| 1524～25   | ドイツ農民戦争         |
| 1555      | アウグスブルクの和議      |
| 1618～1648 | 30年戦争           |
| 1648      | 講和会議、ウェストファリア条約 |

出所：倉山、2019、巻末年表を元に筆者作成

30年戦争に至る背景としては、まず1524年～1525年に起こったドイツ農民戦争がある。牧師の任免権、1/10税を村が徴収して牧師の生計費に充てること、農奴の廃止など、封建制の基盤を揺るがす要求であった。つまり、統治者側から聖職者が任命される制度を否定する要求であった。

そして1547年、ルターの宗教改革が始まる。1555年のアウグスブルクの和議によって、領邦教会制「ある者に領土の属する場合には、その者に宗教もまた属する (cuius regio, eius religio)」が成立する。ただし、都市は引き続き宗派に併存しており、周辺諸侯の介入を招き、30年戦争につながってゆくことになる。

30年戦争は1618年から1648年の長きにわたったことからそう呼ばれるが、実際にはヨーロッパ全体を巻き込む4つの大きな戦争が30年続いた時代の総称である。きっかけは、神聖ローマ帝国フェルディナンド2世がカトリックで統一しようとしたことであった。カトリックとプロテスタントの宗教戦争から、スペイン＝オーストリアのハプスブルク家とフランスのブルボン家による政治的争いに発展した。

1648年に開かれた講和会議での合意内容がウェストファリア条約である。講和会議は、旧教、新教それぞれの都市であるミュンスター、オスナブリュック2か所で開かれ、参加国数は69カ国だった。合意された内容の骨子は、神聖ローマ帝国の解体、諸侯が独立した領邦となり主権国家となること、新教徒を認めることである。

ウェストファリア体制が持つ意味は、近代主権国家体制の成立である。すなわち、(1) 国家権力が最高権力になること、(2) 国家間は大小によらず対等で同等の権利、(3) 国は固有の領土を持つこと、(4) 国家が国内統治の権利を持つこと、である。

ウェストファリア体制によってヨーロッパ地域に出来上がった主権国家の特徴は、前述したように、国家間の平等、そして国家が常備軍と官僚制を備え、すなわち暴力機構と徴税機構を独占することである。つまり、国家単位の主権の確立にとどまり、国民の権利の平等には至っていない。国民一人ひとりが平等な権利を持つ「国民国家」は、17世紀のイギリスの市民革命や18世紀のフランス革命等を経て成立した。

## 第5節 結論：宗教に影響を受けたロシアの決断

ロシアがモンゴルの支配下に入る際にも、独立する際にも、ロシア正教が影響力を発揮したことが確認できた。カトリック側がロシアに改宗を要求し侵攻したことが、それがロシアがモンゴルの朝貢国となったきっかけであったことは、現代ロシアを理解する上で一つの示唆となった。ロシア正教、そしてロシアの対外意識の底流に通奏低音としてある、西ヨーロッパへの不信感や反発意識といったものの原点となった可能性が考えられるからである。

また、ロシア正教は禁止や弾圧を受けても信徒数が大きく減らず、民衆の生活に深く根付いていた。それゆえに統治者と教会の関係は緊張をはらんだものであり、教会が権力を持った時代、統治者が教会を抑圧した時代と浮沈を繰り返してきた。統治者側が教会組織や財産を利用した時代もあり、ロシアが愛国主義をうたう時の求心力の基ともなっていることもわかった。

ロシア正教の歴史を切り口として多くの学びが得られた。近代以前は、宗教は統治に正統性を与えるものとして密接に関わり合っていた。血統や武力でしか権力の交代ができない構造から、市民革命を経て、民主主義国では選挙によって平和的な権力の移行が可能になった。我々が生きる現代社会が、長い歴史の上に出来上がっていることを改めて強く認識させられた。

## 第13章 歴史における宗教と政治

本章では、ロシアの「タタールのくびき」と言われるモンゴルによる統治の時代に、「キリスト教はどのように振る舞い、どのような役割を果たしたのか？」という問題意識に基づいて、ヨーロッパの宗教的背景をもとにロシアにおけるキリスト教と政治との関係性について論じる。

### 第1節 ヨーロッパの歴史とキリスト教の関わり

#### 第1項 ユダヤ教から派生した背景をもつキリスト教（一神教）

ユダヤ教からキリスト教とイスラム教が派生し、この3つの宗教は同じ唯一神を信仰する3大一神教と呼ばれている。

そもそもユダヤ教はヘブライ人（イスラエル人）の指導者モーセが唯一神のヤハウェと契約を結び、パレスチナにヘブライ王国を作ったことが始まりであり、神との約束である《戒律》を守ることこそ信仰であると信じていた。その後ヘブライ王国は新バビロニアにより征服され、住民はバビロンに捕囚された。バビロンから解放された後に彼らは「ユダヤ人」と呼ばれるようになり、《ユダヤ人こそ神に選ばれた民族であるという選民思想》と、《ユダヤ人の救世主（メシア）が現れる》という思想を根幹とするユダヤ教を展開、パレスチナにユダヤ教の神殿を建設したのである。

パレスチナは豊かな土地ではなく困窮する民衆が多かった。そこへローマの支配が及ぶようになるとローマ帝国はユダヤ教徒に強圧的な政治を行い、民衆は飢えや重税に苦しんだ。このような中「神は罰ではなく愛を与える《神の愛》」「神が愛を与えるように、隣人を愛せよ《隣人愛》」、そして「神への信仰を持てば誰でも救われる」と説いたイエスの教えは多くの民衆の心をとらえた。民衆がイエスを救世主（ギリシア語で《キリスト》）と呼ぶようになると、ユダヤ教の司祭たちはイエスを危険視し、ローマへの反逆者として十字架にかけて処刑した。

イエスの死後、弟子たちが「イエスは神の子」「人類の罪（原罪）をかぶって天に召された」「イエスは復活する」とし、イエスの言葉や行動を人々に伝え「キリスト教」が誕生した。そして、ローマ帝国内に徐々に広まっていった。

#### 第2項 ローマ帝国初期におけるキリスト教迫害

当時のローマ帝国は多神教の国家であった。ローマの建国時、皇帝の功績を称えるためギリシア神話の神々の歴史につながるものとして、ギリシア神話と古代ローマ神話の融合が進んだ。また、皇帝は死後に神格化され、神に列せられていた。

キリスト教が広がっていったこの時期はローマ国内が不安定化しており、皇帝の権威回復を目的に、皇帝自ら「ユピテル（ゼウス）の子」と称し自身を神格化した。唯一神を信じるキリスト教は神である皇帝を侮り、同時に多神教の伝統を脅かすものとされ、弾圧された。

### 第3項一転、キリスト教がローマ帝国の国教となる

異民族との戦いや疫病の流行、皇位継承問題など内外で様々な問題を抱えていたローマ帝国は、民衆の間で広がっていたキリスト教をひとつの勢力として徐々に無視できなくなっていく。統治を安定させるため、313年にコンスタンティヌス帝はキリスト教を含むすべての宗教の信仰を認める「ナント勅令」を出した。迫害していたキリスト教を公認し、保護したことで、更にキリスト教は広まっていった。

キリスト教の信仰が拡大していくと、教義や考え方の違いによりキリスト教の中での派閥が生じていった。そこでコンスタンティヌス帝は325年、ニケーア公会議を開き、「イエスは神の性質を持つ」というアタナシウス派（カトリック）が正統と認められ、「イエスはあくまで人間だ」とするアリウス派は異端とされてローマから追放されることになった。

最終的に、392年にテオドシウス帝によりキリスト教が国教化され、ローマ帝国の人々はキリスト教以外の信仰は許されなくなった。この結果、キリスト教はヨーロッパのほぼ全域で信仰され、中世ヨーロッパ地域に宗教的統一をもたらす礎となった。このような背景から、現在のヨーロッパ社会の礎を作ったのはキリスト教であり、現代につながる思想や文化に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

## 第2節 教会の東西分裂と2つの宗派の誕生

### 第1項キリスト教の5本山と教会の東西分裂

キリスト教が広まると共に、信者を束ねる教会制度が発達していく。教会は管区で編成され、その管区で拠点となる都市には「総主教」が置かれた。最も権威がある都市はローマ、次にコンスタンティノープル、次いでアレクサンドリア、アンティオキア、イエルサレムで、これらの都市にある教会はキリスト教の5本山と言われた。

395年のローマ帝国の東西分裂に伴い、このキリスト教の5本山も地理的に東西に分断された。ローマ教会は西ローマ帝国、コンスタンティノープル教会は東ローマ帝国（ビザンツ帝国）の庇護を受け、道を分けた。それぞれがローマ帝国の新旧の都の教会にあたり、キリスト教の主導権を競い合う関係にもなっていった。

この後、教会は庇護者を求め、あるいは勢力を拡大するため、政治との関わりを強めていく。教会は「精神世界の権威者」でありつつも、実際に教会を建てたり布教活動をして生き残っていくため「現実世界の権威者」の後ろ盾、いわばスポンサーを必要とした。

### 第2項西ヨーロッパにおけるゲルマン民族の大移動とローマ教会の動き

ローマ帝国末期、アルプス山脈の北側で狩猟や牧畜を行っていたゲルマン民族は時にローマに侵入し、あるいは傭兵や小作となりローマ社会に徐々に入り込みつつあった。しかし、4世紀後半に東方からアジア系のフン族がこの地域に攻めこむと、ゲルマン民族は新たな居住先を探して大移動した。そして、移動した先の土地に住んでいた民族（ローマ

帝国内のラテン人（ローマ人）等を圧迫し、ゲルマン民族のオドアケルが476年西ローマ皇帝を廃位して西ローマ帝国を滅亡させるに至った。この時、ローマ教会は西ローマ帝国という庇護者を失ったのである。

「フランス」の語源となったフランク族、「イングランド」の語源となったアングロ＝サクソンの諸民族（「アングロランド」が「イングランド」となった）などが移動して、次々と国を建てた。中でもフランク人が建国したフランク王国は大きく勢力を伸ばし、西ヨーロッパ世界の基盤を固めていく。

フランク王国が勢力を伸ばした背景にもキリスト教が大いに関わっていた。かつてニケーア公会議で異端とされローマを追放されたアリウス派がゲルマン民族に布教を行っていたため、ゲルマン民族の国家はキリスト教アリウス派であった。逆に、元々居住していたローマ人はアタナシウス派（カトリック）であったため両者の間で軋轢を生んでいた。そこでフランク国王クローヴィスが自らアタナシウス派（カトリック）に改宗することでローマ人との融和を図った。この政策が功を奏し、乱立しているゲルマン民族国家の中でフランク王国はローマ教会の支持を得て、安定した政治体制を築くことに成功した。

### 第3項 東ヨーロッパのビザンツ帝国（東ローマ帝国）

ローマ帝国が東西に分裂した後、東側の東ローマ帝国は現在のギリシアのルーツとなるビザンツ帝国として、1000年以上続いた。ビザンツとはビザンティウム（コンスタンティノープル）を都にしたため付けられた、いわばニックネームである。

同時期の西ヨーロッパと比べると、東ヨーロッパは民族移動の影響が少なく、安定した統治を行うことができたため、都のコンスタンティノープルを中心に商業と貨幣経済が大いに繁栄した。

### 第4項 東西の教会の主導権争いから2つの宗派が生まれた

西ローマ帝国が滅亡したことでローマ教会はスポンサーを失った上に、異民族のゲルマン民族国家に周囲を囲まれ、すぐにゲルマン民族を信者として獲得しなければならない状況に陥った。そこでローマ教会は、当時のキリスト教では禁じられていた「聖像」を使った布教を行うようになる。言語も習慣も異なる異民族であったゲルマン民族の人々にとっては視覚的に分かりやすく、話が早かったのである。

一方、ライバルであるローマ教会が禁じ手と言える聖像を使った布教をしていることを知ったコンスタンティノープル教会は、ローマ教会を非難した。コンスタンティノープル教会の庇護者であったビザンツ帝国の皇帝レオン3世が「聖像禁止令」を出すと、ローマ教会は大いに反発した。この頃ローマ教会とコンスタンティノープル教会の対立は頂点に達し、両者の分裂が決定的となった。

布教を続け、影響力を保ちたいローマ教会はビザンツ帝国に対抗できるだけの後ろ盾が必要となり、フランク王国と手を組んだ。いわばクーデターの形で王位を奪ったピピン3世を王として認め、代わりにビザンツ帝国の力を削ぐためビザンツ帝国と結びついていたランゴバルド王国の撃退を要請した。ローマ教皇の支持を得てキリスト世界公認の王と

してフランク王国の継承を認められたカロリング朝のピピン3世は、約束通りランゴバルド王国を追い払い、ラヴェンナ地方をローマ教皇領として寄進した。

続いてピピン3世の子カール1世によってフランク王国は強大化し、その最盛期を迎える。カール1世がカール大帝と呼ばれる所以である。そこで、ローマ教皇レオ3世はカール1世に300年以上前に滅んだ西ローマ帝国の冠を授けた（カールの戴冠）。フランク王国を新しい西ローマ帝国に見立てその復活を宣言し、キリスト教勢力の拡大を図った。カール1世を西ローマ皇帝とすることでビザンツ帝国からの影響を離れ、宗教的な独立を目指したのである。こうして、フランク王国の下で中世西ヨーロッパ世界が成立した。

その後、フランク王国は3つに分かれるのだが、ローマ教会はそのうちのひとつである東フランク王国（のちのドイツ）に接近した。962年、東フランク王国のオットー1世に西ローマ皇帝の位と冠を与え、東フランク王国は神聖ローマ帝国といわれるようになる。

布教に聖像を使用するローマ教会と、それに反対するコンスタンティノーブル教会の対立により、ローマ帝国の地理的分裂に、更に思想的分裂が加わった。この結果、西ローマ帝国にあったローマ教会はフランク王国と手を組み、ローマ教皇を頂点とするローマ・カトリック（普遍、つまり「みんなのキリスト教」の意）教会となった。一方、かつて東ローマ帝国にあったコンスタンティノーブル教会はビザンツ帝国のビザンツ皇帝を頂点とするギリシア正教（正しいキリスト教の意）となった。ギリシア正教は後のロシア正教会、ウクライナ正教会の源流となる。こうして、ローマ・カトリック教会とギリシア正教会は、別々の宗派として存在することとなった。

### 第3節 ロシアにおけるキリスト教が果たした役割（モンゴル襲来以前のロシア）

#### 第1項 東方正教会の起源

現在ロシアで広く信仰されている東方正教会の起源は、4世紀ローマ帝国時代のコンスタンティノーブル教会まで遡る。前節で述べたように、コンスタンティノーブル教会はビザンツ帝国の下でギリシア正教として発展する。そのギリシア正教を10世紀末にキエフ公国のウラジーミル1世が受容したことが、東方正教会の起源となった。

#### 第2項 キエフのキリスト教の始まり（オルガの果たした役割）

9世紀後半になるとロシア地域にスカンディナヴィアのヴァリャーグ人が達するとゆるやかな諸族連合が生じ、やがて統治王朝を形成した。リューリクがノヴゴロドに到達するとその地域で安定した地位を確立した。これがロシアのはじまりと言われる。だが、この地に大きな組織化された国家がすぐに形成されることはなく、それなりに安定する時期もあったが、諸侯の権力争いや相続による混乱が続く。

10世紀末に権力の座にあった公が洗礼を受け、ロシアはキリスト教国家になったのだが、実際にはこの988年の「ロシアの洗礼」（国教化）以前からキリスト教徒は存在したと言われている。キリスト教がはっきりと初期ロシア国家に堅固な根を張ったと言われるのは9世紀後半以降、リユーリクの息子のイーゴリの治世末である。更に、イーゴリの配偶者のオリガはキリスト教を受け入れることでビザンツ帝国との関係を強化しようと考え、コンスタンティノープルに出向き洗礼を受けた。そののち、このオリガはコンスタンティノープル教会との関係をより好ましい状況に置こうと自分の教会を築くなどし、ロシア正教会の基礎を下支えした存在と捉えられる。

時期的には1054年のいわゆる東西教会の分裂のおよそ100年前のことであったが、ロシアの人々が当時存在したローマ教会とコンスタンティノープル教会との神学的な差異について多くの知識があったわけではなかった。むしろ、その地に根付いている異教徒の強い反対や、言語の問題でローマ教会の受け入れがキエフでは困難だったと考えられる。初期のキエフのキリスト教徒に受け入れられた礼拝用語はブルガリア、そしてルーシ・ヴァリャーグのキリスト教にとって理解可能であった教会スラヴ語であった。ローマ教会の典礼はラテン語であったが、言語の異なるキエフの人々にとってラテン語の典礼の受け入れは困難であった。ラテン・キリスト教（西方教会）、すなわちローマ＝カトリック教会はロシアの土壌で多くの挫折を味わうことになる。

### 第3項 ウラジーミル1世による国家のキリスト教化とその政治的目的

洗礼を受けたオルガの孫であるウラジーミル1世は長い安定した治世を行うが、最も大きな功績は本人のキリスト教受容とルーシ人の大規模な受洗であった。ウラジーミル1世は初期、特に最初の10年はキリスト教に傾倒することはなく、むしろ敵対していたが、キエフで権力を掌握してから約10年後に彼はキリスト教の洗礼を受け、続いて国のキリスト教化に着手する。突然の心変わりのようなのであるが、皇帝に軍事援助を行った見返りに皇帝の妹を出迎え、結婚式をするための洗礼だったと考えられている（皇帝の娘や妹が異教に嫁ぐことはないため）。「緋色の生まれ」と呼ばれる皇帝の血縁を花嫁とすることで誉れ高い国際的名声を獲得し、キリスト教国家の君主として他のキリスト教世界の君主と外交上肩を並べることが可能になったのである。このように、キリスト教の受け入れはウラジーミル自身が決定したことであり、ビザンツ式のキリスト教以外の選択肢はほぼなかった。

また、実際には多くの人々の抵抗はありつつキリスト教の国教化が進められたが、ウラジーミル1世によるルーシ人のキリスト教化により、未来のキエフ諸侯が支配のための断固とした足場を持つことができた、というのも大きな意義となった。

### 第4項 ロシア正教とラテン（ローマ＝カトリック教会）の関係

4世紀初めにローマ帝国がローマとコンスタンティノープルを中心とする東西2つに分裂したが、この分離がキリスト教のローマ＝カトリック教会とギリシア正教会への2つの信仰への段階的な分離を招いた。



ヨーロッパへの蛮族の侵攻、イスラムの勃興、ビザンツの聖像破壊運動、800年のシャルルマーニュ（カール1世）への神聖ローマ皇帝への戴冠（カールの戴冠、ローマ皇帝への戴冠）、そして1095～1204年の十字軍遠征といった外部状況により影響を被りつつ、満ち引きを繰り返しながら分裂は進行していった。

分裂が表面化したのが1054年であり、両者の間で敵意が生じた。しかし実際にはローマとコンスタンティノープルとの関係にあまり大きな変化はなかったと言われている。最終的に修復不可能な東西間のシスマは1095年の第1次十字軍、悲劇的かつ残忍なコンスタンティノープルの占領で終わった1204年の第4次十字軍だった。キリスト教世界の両教会間の不和の原因のひとつは、誤訳や誤解釈という単純な言語的な問題による相互の無理解があったとも指摘されている。ほとんどのギリシア人はラテン語を知らず、それ以上にラテン人はギリシア語を知らなかった。その上、十字軍時代にはそこまでの意見の差が生じていたことにすら気がついていなかった。ましてロシア人は言語的遠さからほとんど自覚はなかったのではないだろうか。

ロシア人とラテン人（ローマ教会）の関係においては、1054年以前については草創期のロシア教会とローマ教会の間では敵対や不一致はなかった。1054年～1240年（少なくとも1204年まで）の時期におけるロシア人とラテン人の関係は、寛容にして穏健、どちらに対しても敵対的態度はなかった。もし、モンゴル襲来以前の時代にローマに対するロシア人の態度における岐路があったとすれば、それはおそらく1204年のラテン人によるコンスタンティノープルの占領と略奪だった。

しかし、ロシアにおいて教会（国家も）のラテン西方（ラテン人、ローマ教会）に対する敵対的な反応が表明されるのはまだ先。モンゴル、タタールの侵攻に続く数世紀の間である。ロシアが西部国境においてカトリックのリトアニア、ポーランドと対峙、北西のバルト国境地域においてチュートン（ドイツ）騎士団と対面したときである。それまでは、表立った対立はさほどなかったのである。

## 第4節 宗教の果たした役割（ポスト・モンゴルの世界）

第1項 宗教改革がカトリックを世界へと向かわせた（布教活動がグローバル化を推進）

モンゴルの支配力の弱まりと共に、各地が自立し徐々に世界が再編される。この頃各地で興った国はこの先近代国家へと変貌していくことになるが、その背景にはカトリックの世界への布教活動が影響を及ぼしていた。ヨーロッパでおこった宗教改革という新たな潮流の中でカトリック修道会は宗教改革運動が盛んなヨーロッパだけでなく、アジアや南北アメリカへも布教活動を熱心に行い、カトリック修道会は世界のグローバル化への大きな役割を果たしたと言える。

尚、この頃は地域社会における宗教的な多様性は担保されており、異教徒を含む多宗教が共存・並存していた。人々は緩やかな支配体制のもと、伝統的な価値観にもとづいて

暮らしており、ローマ＝カトリックの宣教師らの活動は当初は歓迎されていた。以下、守川による記述である。

ポスト・モンゴルの一四世紀から一五世紀にかけては、モンゴル人が席卷したユーラシア全域において彼らの支配力が弱まり、その間隙をついて各地が自立し、それぞれの地域が再編へと向かう変動期にあたる。ジョチ・ウルスに対するモスクワ大公の初の実質的な勝利（1380年のクリコヴォの戦い）、1386年のポーランド・リトアニア王国の成立、1368年の明朝と1370年のティムール王朝の成立、上座部仏教を採用したアユタヤ朝（1351～1767年）、そして1453年のビザンツ帝国の滅亡と新たな大国として躍り出たオスマン朝（1300年頃～1922年）など、ポスト・モンゴル期の世界は大きく変わろうとしていた。これらの新生国家の多くは、16世紀以降、それぞれの地域においてより恒久的な国家として安定的な支配を築き、「近世国家」への変貌を遂げる。一方、このポスト・モンゴル期の宗教事情に目を向けると地域社会における宗教的な多様性は担保されており、ときに宗教コミュニティごとの住み分けはあったものの、各地で異教徒を含む多宗教が共存・並存する社会がみられた。それとともに、人類は緩やかな支配体制のもと、伝統的な価値観にもとづいて暮らしていた。（守川、2022、P97）

贖宥状をめぐるルターの95か条の論壇は広くヨーロッパ社会に広まり宗教改革の大きなうねりとなった。これによりローマ＝カトリック教会とハプスブルク家の支配の正当性を危ぶむことになった。さらに、ヨーロッパでおこった宗教改革はキリスト教以外の宗教世界にも影響力を及ぼし、西アジアのイスラム教内でも宗教対立を生むことになっていった。

以下、守川による記述である。

1517年、マルティン・ルターの発した「95か条の論壇」はヨーロッパ社会に大きな影響を与えた。ローマのサン・ピエトロ大聖堂修築の資金集めのために販売された贖宥状をめぐる問題は、活版印刷とも相まって瞬く間にドイツ中に知られるところとなった。ローマ・カトリック教会への痛烈な批判は、教会のパトロンであり、当時のヨーロッパ世界の大部分を握っていたハプスブルク家への対抗とともに、同家の支配領域にくさびを打ち込んだ。ローマ・カトリック教会とハプスブルク家にとって、カルヴァンやルターに触発された領主や領民の動きは、自分達の既得権益を脅かすだけでなく、支配の正統性にも疑問符をつきつけたのである（守川、2022、p.98）。

西アジアでも国をあげてイスラーム教内での宗派、すなわちスンナ派とシーア派を国是に掲げた激闘が繰り返された。そもそもそれまでの西アジア社会では、「スンナ派」や「シーア派」という区別はさほど明確ではなく、イデオロギーで区分し得るような社会ではなかった。とりわけ一般民衆のあいだでは、ときに宗派による諍いも起こったが、宗派や宗教や信仰が社会問題化することはほとんど見られなかつ

った。……（中略）……西アジアでは、宗派の相違による対立関係が16世紀から17世紀を通じて大きく横たわっていた。そして、このような宗派対立を助長したのが、カルヴァンやルターらの起こした宗教改革への対応に迫られた、カトリックの宣教師たちである（守川、2022、p.P99-102）。

## 第2項 カトリックの布教は反発を招き禁教へ、国家主導の宗教化へ進む

各カトリック修道会はアジアやアフリカでさかんに布教活動を行い、初期に於いては歓迎されていた。しかし、当初好意的に受け止められていた宣教師らだったが、古来から続くその地の宗教や国王等の国家権力をないがしろにする等の行為が目立つようになり、徐々に反発が強まった。そこで、為政者はキリスト教を禁じるようになり、更に国家が宗教を定めて宗教により民衆を管理統制する方向へと進んだ。このようにして国家主導の宗教化が世界的に加速していったと言える。以下、守川による記述である。

当初為政者らに好意的に受け止められたカトリックの宣教師らであったが、徐々にアジア各地ではキリスト教への反発が強まるようになる（守川、2022、p.103）。

日本でも同様なことがおこり、また同時に仏教へのシフトが進むことで国家主導の宗教化が進んだのである。すなわち、日本に於いてはキリスト教に対する禁教令とともに、既存の「伝統宗教」である仏教へのシフトが図られた。まさに日本型の思想統制で、宗教を通じて信徒・門徒である民衆をすべからず管理する、国家主導の「宗教化」が推し進められたとすることができる。そして、それはアジアでも同様で、キリスト教を擁護していたシヤム（現在のタイ）も最終的にキリスト教やフランスなどの外国勢力と袂を分かつことになった。以下、守川による記述である。

このシヤムの事件もまた、外国勢力との結託にしぶれを切らした仏僧らが中心となった排斥運動であった。……（中略）……日本と同じく、既存宗教への「攻撃」や、仏教の保護者であり神の化身と崇められた国王の転向がシヤムの人々に受け入れられず、フランス勢力全体の排除と、さらには外国人との関係を断つ鎖国政策へとシヤムを導いてしまうのである。……（中略）……康熙帝が一七六〇年に、中国の習俗を容認する宣教師には滞在を許すが、教皇の指示に従う者にはマカオへの退去を命じることにより、宣教師排除の方向へ舵を切った。その後清朝側の態度はより硬化し、雍正帝は一七二四年にイエズス会士らのキリスト教布教を全面的に禁止し、最終的には、チベット仏教に深く帰依する乾隆帝が登場するに及んで、宣教師との「蜜月」が終わりを告げた。（守川、2022、P 107~108）

### 第3項 国や地域社会での宗教・信仰の同一化が民族国家を生んだ

世界各地で同様の動きが起こり、国家による思想や宗教の統制が加速して宗教の同一化が進んでいった。地域社会における宗教的寛容や多様性の喪失を促進したが、国や地域社会での宗教・信仰の一般民衆への浸透、および人々の信仰の同一化は深化した。

政権が「国教」もしくはそれに準じるものとして採用した国家宗教化が「民」の信仰を画一化し、国家や地域の中でも圧倒的な宗教マジョリティを生み出したのである。このように国家による統制や局地化により、宗教は大衆化されていった。

加えて、国家が決めた宗教とそれぞれの言語や民族と結びつくことで、その宗教が国家国民のアイデンティティを象徴するものとなっていったと考えられる。各地の「一国一宗派主義」は、宗教（宗派）とアイデンティティが言語や民族とも深く結びつき、「民族国家」を生み出す契機になった。更にこのような動きは世界各地でおこり、一般民衆の信仰の同一化へと進むこととなった。以下、守川による記述である。

宗教の固定化や宗教的不寛容さが加速度的に進展している様子がうかがえよう。宗教と地域社会が一体化し、地域社会に国の推進する「宗教」が根差していくにつれて、異教徒であれ異宗派であれ、信仰を異にする者を許容しない地域社会の姿が浮かび上がる（守川、2022、P114）。

17世紀後半には世界各地で思想調査や宗教統制が加速した。このような近世期の宗教政策は、地域社会における宗教的寛容や多様性の喪失を促進した一方で、国や地域社会での宗教・信仰の一般民衆への浸透、および人々の信仰の同一化に寄与することになった。すなわち、政権が一つの宗教を「国教」もしくはそれに準じるものとして採用する国家宗教化が「民」の信仰の画一化をもたらし、国家や地域の中でも圧倒的な宗教マジョリティを生み出したのである（守川、2022、P114）。

19世紀には、各地の宗教に新たな展開が到来する。それは、宗教の大衆化ともいうべき現象である。国家による宗教の統制や、地域化・局地化する宗教の浸透の結果、それまでは聖職者や宗教学者・法学者らに多くを拠っていた宗教が一般民衆レベルにまで浸透する。こうした国家宗教化および地域社会ごとの収容マジョリティ創出の結果が、近世以降、各地で大規模に見られた聖地巡礼である。宗教は言語や民族と結びつくことで、国家国民のアイデンティティを象徴するものとなっていった。このように国家による統制や局地化することで、宗教は大衆化されていった。以下、守川による記述である。

ポスト・モンゴル期を経て、地域社会の中での自立化への道を歩んだ近世諸国家は、「大航海時代」とヨーロッパの宗教改革によるグローバルな人的交流の中で「他者」との接触が増え、その過程で「宗教」や「宗派」にかかるアイデンティティを自問する必要に迫られた。そして、本稿で検討したように、民衆管理のために

も宗教アイデンティティの統一を図ろうと努めたのである。その帰結として各地で見られた「一国一宗派主義」は、宗教（宗派）アイデンティティが言語や民族とも深く結びつくことにより、「民族国家」を生み出す遠因となったのではなかろうか。近現代には、世界各地で「民族国家」が多数生み出されるが、その際宗教アイデンティティもまた、「民族的結束」を象徴する要因となったように思われるのである。（守川、2022、P124）

いわゆるモンゴル帝国は13世紀に東アジアから東ヨーロッパにかけて大帝國を建設したが、早くも14世紀には衰退し始める。ユーラシア大陸を東西に横断する帝國を築いたモンゴルによりユーラシアが一体化する気配になったのだが、わずか100年ほどでその影響力が弱まったのである。

国を超えて自由に行き来が出来たモンゴル帝國の歴史的役割は、後世の世界のグローバル化の準備を整えたことにあった。しかしその自由闊達さが宗教の入り込む余地を作った。モンゴル人のチベット仏教への傾倒による財政力の低下や政治への集中の低下、そして白蓮教徒の乱をきっかけに朱元璋が「明」をおこし元（モンゴル帝國）から独立する「紅巾の乱」など、モンゴル帝國の衰退に宗教が大いに関わっていたと考えられる。以下、島田による記述である。

まず、このモンゴル帝國についてグローバル・ヒストリーの立場から検討しておく必要がある。第一に言えることは、モンゴル大帝國建設は空間的にみて大きく、それゆえに重要であったことは間違いない。政治・軍事上の支配・被支配関係はもちろんのこと、文化交流といった面でも広大な空間でなされたことは注目に値する。さらに、感染症のひとつであるペストがこのモンゴル帝國の領域をベースに中国でもヨーロッパでも蔓延し、ユーラシア各地の社会で半数前後の人口を減少させ、社会変化の要因になったことはよく知られている。……（中略）……国内外ともに、グローバル・ヒストリーの書物ではモンゴル帝國の建設をグローバル・ヒストリーの画期として書き出すことがしばしば見受けられる。直接的にはグローバル・ヒストリー上の一大画期とはならないものの、一五世紀末以降のアメリカ大陸などを含めた人類史上の一大画期となる新たなグローバル化に向けてユーラシアで準備をする段階に起こった重要な変化であったと理解できるであろう。しかも一四世紀にはいり、モンゴル帝國は衰退し、ユーラシアは分裂したかの様相を呈したが、大規模な国際交流を経験しやユーラシアでは、一四世紀以後も新たな世界の一体化に向けて各地の社会が準備を整えつつあったのである。（島田、2022、p.18）

## 第5節 ロシアがクリミア半島を目指す意味

### 第1講 ロシアはローマ帝国の継承者という自任

モンゴル帝国に臣従して誕生したモスクワ大公国では、15世紀後半にイヴァン3世が最後のビザンツ皇帝の姪と結婚すると、ツァーリ（皇帝）の称号を用いてビザンツ帝国の後継者を自任するようになる。すなわち、ロシア皇帝こそがローマ皇帝の継承者でありギリシア正教会の保護者、モスクワ公国はローマ帝国とビザンツ帝国に続く「第3のローマ」である、と自任した。これによりロシア正教会がギリシア正教会のリーダーとなった。

### 第2項 ロシアは南を目指す

ロシアでは宗教戦争が起こらなかったため、他の国が経験したような宗教戦争により国が二分される事態にはならなかった。そのため、皇帝（ツァーリ）が政治的にも宗教的にも強力に国内を支配する専制政治（ツァーリズム）を行うことができた。

ロシア正教会はギリシア正教を継承した宗派であり、ロシアは「ロシア皇帝こそギリシア正教会の保護者である」という立場を利用し、オスマン帝国内のギリシア正教徒の保護権を掲げ侵攻した。

エカテリーナ2世はオスマン帝国の支配下にあったクリミア半島に侵攻し、ウクライナとクリミア半島を手に入れ、後のロシア皇帝達もクリミア半島を拠点として、南下政策をとった。

## 第6節 結論：歴史における政治と宗教の協働について

これまでみてきたように、ローマ帝国時代から政治と宗教は影響し合い、安定した統治と勢力拡大のため互いに手をとることもあれば、利害の不一致のため対立したりもした。両者は常にせめぎ合い、互いにその力を利用し依存し合いながら存在してきた。また、時に宗教は為政者を倒すためのツール（いわば大義名分）となったこともあり、時代が動く局面に宗教が大きな役割を果たすことも多かった。

「タタールのくびき」前後の中世ロシアに於いても同様に、キリスト教と国家は緊密に関係し合い権力の転換をもたらすきっかけを作った。またモンゴル帝国滅亡後、宗教改革のうねりの中で各国国家は安定のために宗教を統制した。宗教を「統制」した結果、民族や地域に適合した宗教が確立し、思想的な安定がもたらされていった。このようにして、宗教は成熟した近代社会を確立する礎となったと考えられる。

デモクラシーが発生する前の時代、権力の転換をもたらし、時代を動かしていたのは宗教だったとも言えるのではないだろうか。

## おわりに

モンゴル帝国に関するアジアダイナミズム班の7年目は、東西でモンゴル帝国の衰退に大きく関わった明とロシアという2つの視点から、その過程で宗教が及ぼした影響について研究するという大胆なテーマに取り組んだ。

元と明、ジョチ・ウルスとロシアでは残された記録の量に偏りがあったり、また対立する陣営それぞれの記録は当然ながら矛盾していることも多かった。白蓮教は、元を倒す原動力となった後、明から清の時代には弾圧され表舞台から消えたものの、教義や組織を変化させながら長く続き、あたかも複数の宗教であるかのように発展した。また、「タタールのくびき」のように、後世になってから作られた言説やイメージもあった。

研究に苦労しながらも我々が見出したことは、モンゴル帝国の時代は現代と隔絶した遠い歴史ではないということだ。宗教が当時の国や民族の対立や連衡に及ぼした影響を紐解いていく中で、現代の国際社会を理解する上での重要なファクターが次々と立ち現れた。歴史が現代につながっているということ、改めて各メンバーが認識することとなった。

ただ、複雑な題材であっただけに、調査・研究し足りないという不足感も大きく残った。残された課題のリストは例年になく長いものとなり、それらを以下に整理した。

### モンゴル帝国について

- モンゴル帝国の広い版図で、中国とロシア以外の地域に及ぼした影響はどのようなものだったか。それに宗教はどう影響したのか、例えば後のオスマン帝国、ペルシア帝国、ムガル帝国など
- 最後まで残ったモンゴル帝国系の国であるクリミア・ハン国では、宗教と統治はどのように残り、または変化したか
- 西方を支配したモンゴルの王族のイスラム化はなぜ起こったのか。そのことはロシアの統治にはネガティブに作用したが、他の地域に及ぼした影響の有無は
- モンゴル帝国の組織構造の特徴は、同時期に繁栄したオスマン帝国とどのように共通点、相違点があったか
- 現代のモンゴルに残るシャーマニズムと、モンゴル帝国時代の自然崇拝の共通点や違いはあるか

### 中国について

- 元から明へ移行する過程の白蓮教については、元、明の統治側の資料を主に参照したが、民衆にとっての白蓮教はどのような存在だったのか
- 白蓮教は清時代にも反乱を起こすなどしたが、明以降の白蓮教はどのように変化した、どのような組織だったのか

- 洪武帝が白蓮教を禁じた後、洪武帝が反乱時に所属していた東系紅巾軍に対する弾圧が少なかった理由を調べたが、西系紅巾軍における反官行動や摘発の詳細はどのようなものだったか。宗教組織として、また反乱軍としての組織のあり方に違いはあったのか、なかったのか

#### ロシアについて

- タタールのくびきの実態はモンゴル帝国による緩い統治であったが、他の地域の視点から見たモンゴル帝国の統治の実態はどのようなものだったのか
- 正教であるロシアでは宗教革命が起こらなかったが、その結果、他の地域とどのような差や違いが生じたのか
- ロシアのエカテリーナ2世が領地を拡大し最終的に目指したかったものは何だったのか
- 現在のロシアが目指すものがなにか

#### 宗教と社会について

- カルト的な呪術を用いる宗教組織を「邪教」と定義しても、その宗教にも救われる人がいる限り、禁止や弾圧には限界がある。苦しい経済状況や戦争がある時に、現代の我々は何を拠り所にして生きるべきか。

モンゴル帝国研究の一環として、宗教を切り口に元から明への移行、ロシアとモンゴル支配について研究することは、宗教が社会の変化をもたらした例、現代の中華系移民の互助組織や中国の宗教規制、ロシア帝国からソ連に至る宗教と統治の関係、キリスト教の正教、カトリック、プロテスタントの違いなどなど、当初の研究対象期間を超えた長い期間、そしてテーマの広がり発展した。モンゴル帝国をスタートとしたグローバル・ヒストリーの研究は、現代の課題認識に直結する扉となった。



# フィールドワーク記録

## フィールドワーク(1)：モンゴル帝国とロシアの関係

宮野裕 (みやのゆたか) 教授

岐阜聖徳学園大学教育学部教授

著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など

---

【多摩大学インターゼミアジアダイナミズム班向けレクチャー (2023.7.29)】

モンゴルとロシア (ルーシ)

宮野裕 (岐阜聖徳学園大学教育学部)

部)

### ■■■ 史学史的振り返り ■■■

#### 1. ロシアにおけるモンゴルへの関心

・ヨーロッパとの異質性 (遅れ) に関する自意識 (古くは 17 世紀末ピョートル大帝)

政治制度の差：専制、権力の集中 (←個人の自由がある西欧)

・現実の社会における「アジア系」の存在 (元々は「不名誉な存在」ではない)

➡原因の探求へ・・・モンゴルの支配 (「タタールのくびき」) が原因 (一因) ではないか？

・その際、前提として、「モンゴルの影響は悪しきもの」

現代の学校の教科書でも：ルーシの地を奴隷化し、ルーシから甘い汁を吸った存在

カンのバスカク (配下) が貢ぎ物を集め、諸公はカンの許可を得て位に就く  
血に飢えたタタールが平和な都市や村を襲撃

#### 2. 「モンゴル=悪しきもの」イメージは、既に中世から存在

・ロシアの歴史学が始まった帝政期（19世紀）の多くの歴史家はそうしたイメージを有した（例外：専制を持ち込んでくれたよき存在とする見方も）

・しかしこの見方：既に13世紀当時のルーシの知識人（正教会聖職者）によって形成されたもの

➡中世聖職者は自分の展望、見通し、政治的・文化的ステレオタイプに基づいて状況を説明

基本：聖書のモチーフを援用して現状を語った

モンゴルのルーシ侵攻：神がルーシから顔を背け、恵みを与えることをやめた

モンゴルのルーシ支配は神が与えた状況なので、許しがあるまで堪えねばならない

\*エジプトでファラオに仕えた「選民」イスラエル人たちと同じなのだ

15世紀におけるくびきの除去：神の慈悲が再びルーシに及ぼされた結果

・このように、モンゴルの征服は、ロシアの民族的悲劇、黒歴史として理解された

・「過酷な支配」という見方：13世紀のプラノ・カルピニらカンに接見した西欧修道士たちの記録から

➡キリスト教修道士の立場からモンゴルを侮蔑的に書く

モンゴル人は多民族に対し傲岸不遜で、何人をも蔑む

他の民族の人に嘘をつく、口はうまいが最後はサソリのように刺す

大變欲深くにぎりやで、自分のことは極端に厳しく要求し、

既に持っているものは手放さず

人に与える場合は大變締め屋

多民族を虐殺することをいとわない

・こうした記録も、モンゴルの征服を悪しきものとする見方に寄与

### 3. ユーラシア学派による肯定的評価

・ユーラシア学派：革命後の移民たちの間で形成され、現在でも信奉者は存在→ただし学者は少ない

・「ロシアはモンゴル支配を経て、ヨーロッパでもなくアジアでもないユーラシア超大国になった」

テュルク系カガン国→モンゴル帝国→ロシア帝国→(ソ連)→ロシアへと大  
国は相続された

引き継ぎの経緯：ステップとスラヴ人の交流（モンゴルの侵攻もその一つ）

・なぜそのようなことが言えるのか（根拠）

→借用：称号、用語、軍事組織、ヤム（駅逓）制度、全国会議 etc.

まとめ

①「モンゴル=悪しきもの」、「モンゴル支配=黒歴史」論は（実は研究者レベ  
ルでは見直されているのだが）まだ影響大

②ユーラシア学派の議論は、借用という観点で正しい部分があり、ロシアが背負  
っているものも確かにあるが、ロシアがモンゴルを相続したとまで言えるのか、  
疑問あり（「ロシア人を一皮むけばモンゴル人」といった言説に近い気も？）

◇歴史過程の構想が抽象的にすぎる

「借用=相続」と言えるのか？

ex.ピョートル大帝の西欧化（ドイツ・スウェーデン）、現代のアメリカの影響

「超大国」を相続：モンゴルはロシアに全面的に影響を及ぼしたというのは言い  
すぎ

十分の一制度、大公の宮廷組織の構造、軍隊組織の細分はモンゴル以前からあり

\*もちろん、だからといってモンゴルの影響は全く無いというのは極端な考え方

■■■ では、どう見るべきか ■■■

→結局、具体的にロシアとモンゴルのルーシ(ロシア) 支配の状況を見ていく必要  
あり

過酷な対立が両者間にあったのか？

\*論点は様々だが、以下では帝国全体を見る必要（以下 4-1,2）、ある相続論への  
批判（4-3）、「黒歴史」の具体的実際の検討（4-4）を行う。

4-1.ルーシとモンゴルという二元的な見方からの離脱の必要（留意点）

・聖なるロシアは世界の中心であり、周りは敵（モンゴル）といった「正教史  
観」

完全に間違っているとは言わないが、自己中心的

∴ルーシは元々、様々な世界と結びつき、またそれらの諸要素を包摂しながら形成された

「自分 対 敵」といった二元論は現実ではなかった

∴モンゴルは敵か？という疑問アリ（後述）

・俯瞰的に見れば、13世紀半ばのルーシはモンゴル帝国の一部：ウイグル、小アジア、グルジア（ジョージア）、エニセイ川のキルギス人などと同じ立場

➡ルーシ vs.モンゴルではない

・後半からはジョチ・ウルス（帝国中央から分離）のみに服従

4-2.ヤルルイクの付与やタタール税の賦課そのものは単純な「支配・従属関係」にあらず

・ヤルルイク（文書）を通じたカンのルーシ諸公支配（奴隷化、抑圧）

➡ヤルルイクは、帝国全体に浸透していた叙任手続き

14世紀初めまで、ジョチ・ウルスのカンも帝都カラコルムや大都でヤルルイクを受け取った、また様々な事項の許可状でもあった、だからこれを受け取ったこと＝奴隷化、抑圧があったとするのは早とちり

・タタール税を通じたルーシからの収奪

➡カンが建てたハジ・タルハン(現アストラハン) からも「タタール税」は取られていた

被征服者のみに課された、服従を具現化した税というわけではない

4-3.イヴァン雷帝時代の「相続」（に見えるもの）は政治的方便（現実でもあるものの）

・16世紀初頭のジョチ・ウルス崩壊後、16世紀50年代のジョチ・ウルス後継国家（カザン、アストラハン）のロシアによる征服後、ロシアがモンゴルを相続したとする見方がある

➡しかし実情を詳細に見るとそうも言えない

特に16世紀イヴァン雷帝はカザン・カン国他などを征服（カザンは1552年）

1555年にシベリアのヤドガルが貢納と引き換えに保護を求めてきた

雷帝は当初拒絶するも、幾度も使節が送られてきて最後は認め、保護者となり、課税、またベクの称号を付与。ただしこの関係は別のカンのシベリア掌握で崩れ、モスクワ依存はなくなる

・その後のシベリア経営において、タタールの慣行を用いた→「相続した」と見なされてきた

➡ただし以上のことから、ロシアがモンゴルを相続したと言ってよいのか？  
君主のアイデンティティとしては正教君主。シベリア（その他）も経営。

#### 4-4. 外交関係に焦点を絞って～もう少し具体的に「ルーシ支配」を見る～

##### 4-4-1. 外交の場：モンゴル（主にサライ）にルーシ公が出向いた場合

###### ①モンゴルの支配権・宗主権の承認（初回のみ。バトゥによるもの）

・（年代記 1243 年記事）ウラジーミル大公「ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチはタタールのツァーリ、バトゥにより召喚され、オルダ〔ここではサライのこと〕の彼のもとに行った。」「バトゥは偉大なヤロスラフと彼の従士たちを誉れとともに称え、彼に『ヤロスラフよ、汝はルーシの民の全諸公の最年長者であれ』と言ってから帰国を許した。」

###### ②所領、地位の安堵の確認。

・ルーシ側の公が代替わりした際

ルーシ側の公がサライを訪問する形式で当該公の所領・公の地位がカンにより「安堵」された。

・カンがフリーハンドで公を選定出来たというわけではない

∴この段階でルーシ側の候補者は年長制などのルーシ側の慣習で候補者が決まっていたため

###### ③大カアンの選出の場への臨席

・グユク（オゴデイの子）の選出時にヤロスラフ公が、サライ経由でカラコルム行き（1246年8月に到着）、グユクの選出まで、クリルタイの行われている大天幕（「二千人以上を収容化」）の外部で天幕を与えられて四週間ほど待機させられる。その後、新カンの母から饗応を受ける。

###### ④免税特権等の確認

・接見の場面は直接知られていないが、特権状が伝来（13世紀においては1276年のカン・モンケ・テムルの府主教宛てヤルルィク）。教会や聖職者は免税。

⑤軍事活動に関わる場合：モンゴルが行う遠征時、遠征に加わるよう求められた場合

- ・それをうまく回避する交渉のためにルーシ公の側が接見を求める場合
- ・ルーシ公がカンに、ライバルの追い落としや都市における蜂起鎮圧のために軍を引き出す場合

◇単純に、ルーシは厳しく支配されていたといった見方は成り立つのか、やや疑問

#### 4-4-2. 実際の交渉・接触・接見手続き

##### ①出迎え

サライなどに入るタイミングで、出迎えを受け、タタールの衣服・鎧を身につけたとする情報がある。エジプトの使節がカン・ベルケの代理人にクリミアで出迎えを受けたとする情報がある。

遊牧民の文化では、使節を出迎え、その馬の轡を引いていくことは出迎え側にとって光栄に感じる名誉であったという。更に彼によるところ、東洋では「鞍の上にいる時間の長短が〔ゲスト側の〕名誉の程度を意味した」（ヴェセロフスキー）

##### ②天幕入りのルール

天幕に入る際、口をきいてはならぬこと、天幕の中に入る際には天幕に張った縄（ルブルクによると敷居）に触れぬ事

天幕入りの前にタタールの慣習による拝礼が行われた（「ダニールは彼らの慣習による拝礼をなすと、彼〔バトゥ〕の天幕に入った」）。

「もし誰かが自分のもとに拝礼に来たら、〔カン〕は...呪術師たちに命じて、その者たちを火のあいだを通るよう導かせ、その者たちに偶像と火を礼拝させる」

「ロシアの大公の一人、ミハイルがやって来てバトゥを訪問したとき、タタール人は彼に、まず火と火のあいだを通らせ、そのあとで南面してチンギスカンの像に礼拝するよう言った。ミハイルは...どうしてもそれに従わないので、首長バトゥは、ヤロスラフの息子を通じて、もし礼をしないなら殺されるぞ、と伝えた」

チンギスは天（「神」）の代理人であり、バトゥを含むチンギス一族と天とのあいだに介在する存在だった。それゆえ、礼拝の拒絶は一族への侮辱と受け取られたと考えられる（理屈なしの厳しさではない）。

### ③ 跪拝までの手続き

呪術師たちが、カンに持参した品々の一部を取り上げてそれを火中に投ずる、皇帝の前に貢ぎ物とともに参上、両膝をつけた形でカンに対し跪拝

拝礼の後、「呪術師たちが、皇帝に持参した品々の一部を取り上げてそれを火中に投ずる。そうしてから皇帝の前に貢ぎ物とともに参上する」

両膝をつけた形でカンに対し跪拝を行うことが求められた（「我らには通常行うそれが求められなかった」）。こうしてようやくカンと接見者は顔を合わせる（接見の厳格な手続き）

### ④ 飲酒の勧め

ルブルクの情報によると、大カアンのモンケは本題に入る前にルブルクらに米酒を勧めている。これを飲むことが義務であったかどうかは判然としないが、ルブルクは酒を口にした。

ルブルクはそれ以前にもバトゥの天幕で、用件を終えた後にであるが、馬乳酒を飲むよう「命じられた」（飲んだかどうかは記載なし）。馬乳酒での歓待は、ルブルクによると、最上級の歓待方法であった。（歓待）

### ⑤ 贈り物の献上

「近隣国の君主たち、世界の国々の支配者たち、その他の人々が彼〔カン〕の下に叩頭するために訪れた。献上された品々は長い間の備蓄になるのものだが、それらが国庫に入るまでに既に彼はモンゴル人やイスラム教徒、集会の全ての参加者に〔その身分の〕高低は気にせず完全に配ってしまった。各地からの商人が様々な品物を彼のもとに持ってきて、それが何であれ全て受け取り、それぞれの品物にその価値の数倍の値段をつけた。ルム〔ローマ〕、シリア、その他のスルタンに、彼は特権文書やヤルルィクを下賜し、彼のもとに来た者は皆、自分の目的を達することなく帰るということはなかった」（ジュワイニー）

贈り物の献上は一方向的な献上ではなく、双方向的な贈答

\*カルピニは贈与の部分強く意識し、モンゴル人を贈り物を集める「吝嗇家」のごとく表現した。ただ、カルピニもカンとの接見を許され、加えてその後には饗応を受けている。従って、その後の応答について、カルピニは贈答との連動を読み取れなかったと考えるべきだろう。

## ⑥用件伝達

60年代初頭にエジプト使節がカン・ベルケに書簡を渡す事例（ルーシの事例で詳しいものはない）

天幕内には玉座のベルケの他、50名の将軍が座る。使節は所定の礼儀作法を守ってスルタンからの手紙をベルケに渡す。ベルケは使節に、左から右に移動して将軍たちの背後に控えるよう伝えた。「手紙を取り上げられたら、右に移動して両膝を付く」よう命じられた。

手紙はチュルク語に訳され、ベルケに読み聞かせられた。外交書簡を渡す際、形式があった

## ⑦返礼・宴席（贈答のシステム）

上のエジプト使節の場合、カン・ベルケと使節が合意に達した後、カンが使節にご馳走を準備するよう命じた。ご馳走の内容としてはクミス、煮た蜂蜜（?）、肉、魚。翌日にはカン妃ジジェク・ハトゥンが使節たちを宴席に招く。

ルーシでいえば、ガーリチ公ダニールは「タタールの慣習による拝礼」をなした後、カンの前で「膝を屈し」た。こうしてバトゥへの臣従を示した後、ダニール公はバトゥから「黒い乳、すなわち我らの飲み物である雌馬の馬乳酒（クムス）を飲むかと問われ、「あなたが命じるのであれば飲もう」と答えた。するとバトゥは「それならそなたはすでに我らと同じタタール人だ」と言った。ダニールは飲み干すと、タタール人の慣習による拝礼をなし、...公妃バラクチナに対しても行って慣習による拝礼をした」という。その後、乳に慣れていないダニールには、代わりに酒を与えている。

## ⑧文書の発給・特権付与（取り決めは文書（ヤルリュク）の形で付与）

ルーシに伝来する文書は、13世紀に限って言えば、バトゥの孫に当たるカン・モンケ・テムルが府主教キリルに与えた一通のみ（1267年8月10日発給とおぼしきもの）

このヤルリュクは、基本的にはカンと接見者との合意を、カンの命令、或いは接見者への恵み、「下賜」の形で表現したもの

上記のヤルリュクでは、ルーシ教会の聖職者や修道士が免税の対象であり、ダルガ（チ）などモンゴルの役人たちは聖職者らから税を取れないことを府主教に「恵んでいる」形がとられている。



## ⑨ 処刑の場面

カンに呼び出された 13 世紀のルーシ諸公の中で、接見のための手続きに従わず、処刑された公（チェルニゴフ公ミハイル）がいる。

「ロシアの大公の一人、ミハイルがやってきてバトゥを訪問したとき、タタール人は彼に、まず火と火のあいだを通らせ、そのあとで、南面してチンギス・カン〔の像〕に礼拝するよう言った。ミハイルはバトゥとその従者たちには喜んで礼をするが、既に死んだものの像には頭を下げない、何とならば、キリスト信者がそんなことをするのは許されぬことだからだ、と答えた。礼をするよう何度も言ったが、どうしてもそれに従わないので、首長バトゥは、ヤロスラフの息子を通じて、もし礼をしないなら殺されるぞ、と伝えた。ミハイルは、してはならぬことをするくらいなら、いっそ死んだ方がましだ、と返事した。そこでバトゥはその従者の一人を遣わしたが、彼はミハイルの腹部を心臓に向かって蹴り続けたので、とうとうミハイルは弱りはじめた。するとそばに立っていたミハイルの兵士の一人が、「耐え続けますように。この苦しみは束の間で、おっつけ永劫の歓喜がまいるだろうほどに。」とミハイルを元気づけた。そこでタタール人はミハイルのクビを小刀で切り落とし、その兵士もまた打ち首になったのである」

・バトゥの指示を無視し続けたミハイル公に対し、「腹部を心臓に向かって蹴り続け」た

・クビライ・カンが反抗的な叔父ナヤンを捕虜とした際、「一族の者の血を地面に流し、空と太陽に晒したくないので、ナヤンを絨毯でくるみ、死ぬまで放り出しておけ」と命じた

・修道士リコルド：「玉座を奪うためにカンはカンを死に追いやることがあるが、後者の血が流されないように注意深く見守る。タタール人は偉大なカンの血を流すことを非常に不遜と考えている。従って被害者は何らかの方法で首を絞められるのだ」。

➡一族中の反抗的な者に対するこうした形での処刑が、ミハイル公の処刑の際にも適用されていると言えそう。礼に従わずに一族を侮辱した公が、流血を避ける形で処罰を受けたことは、ミハイル公がルーシの王族として扱われた（処刑時にも一定の敬意）

◇単純に、ルーシは厳しく支配されていたといった見方は成り立つのか、ここでも疑問

## 5.まとめ

- ・ 敵モンゴルが罰として過酷なルーシ支配を行った
- ・ モンゴルはロシアを超大国にしたよき存在、ロシアはモンゴルの相続国家
  - ◇大雑把。詳細を見る必要あり
- ・ モンゴルが過酷な支配を行ったというのは、当時の被害者側史料のイメージをそのまま受容した結果。
- ・ 緩やかだったと結論づけるつもりはないが、一定のルールに基づいた関係があり、それに配慮する限り、穏やかな関係が結べていたようだ。
- ・ 残酷な部分、専制制度などをモンゴルから引き継いだとする議論は、ここからは成り立たない

### ◆参考文献（史料）

- カルピニ/ルブルク（護雅夫訳）『中央アジア・蒙古旅行記』、講談社学術文庫、2016年
- 中澤敦夫他訳「「イパーチ一年代記」翻訳と注釈（11）」『富山大学人文学部紀要』71号、2019年
- 「同（12）」『富山大学人文学部紀要』72号、2020年
- マルコ・ポーロ『東方見聞録』（平凡社ライブラリー）1-2巻、2000年
- Dzhveini, Istoriia zavoevatelia mira. (Sbornik materialov otnociashchikhcia k istorii zolotoi Ordy, t. 2)
- Jarlyk Mengu-Timura mitropolitu Kirillu. (A. P. Grigor'ev. Sbornik khanskikh Jarlykov russkim mitropolitam. M., 2004)
- Kirakos Gandzaketsi, Istoriia Armenii, M., 1976.
- Mikhalon Litvin. O nravakh tatar, litovtsev i moskvitian. M., 1994.
- Polnoe sobranie russkikh letopisei. t. 1, 2, 3, 15.
- Sochinenie Ibnabdezzakhyra (Sbornik materialov otnociashchikhcia k istorii zolotoi Ordy, t. 1)
- web サイト「世界の歴史まっぷ」から

## フィールドワーク(2)：台湾の宗教と政権の関係

菊池秀明（きくちひであき）教授

国際基督教大学アジア文化研究所所長

著書『越境の中国史—南からみた衝突と融合の三〇〇年』

『太平天国—皇帝なき中国の挫折』など

---

# 台湾の民間信仰と公権力 —2023年7月の調査から—

菊池秀明  
(国際基督教大学)  
2023年8月

### はじめに

- 台湾の西部には漢人住民（閩南系、客家系あるいは潮州系の本省人）の信仰を集める廟が数多く存在。
- 規模の大きさや祀られる神々の多様さ、建物の色彩かさや賑やかな祭りと並んで注目されるのは掲げられた多くの「匾額（書画などを飾る横長の額）」。
- これらの匾額には清朝時代の皇帝や高官に加えて、国民政府などの政治指導者の名前が記されることが多い。
- 民間信仰の場である廟になぜ公権力の権威を示す装飾品が飾られ、いかなる人々が中心となって祈りを捧げたのか。
- そこには移民社会だった台湾と「外来政権」だった歴代公権力との複雑な関係が見えて来る。



国民政府時代の台湾  
観光地図（1954年）

台北大稻埕（迪化街）の媽祖廟（慈聖宮、天后宮）



- 媽祖は航海の安全を司る女性神で、中国沿海部および東南アジアで広く信仰される。
- 台北最大の天后宮は1908年に台湾総督府の禁圧を受けて撤去された（現在の国立台湾博物館）

天后宮に安置された媽祖像（天上聖母）



大稻埕にある霞海城隍廟（1859年創建）



台湾中部・彰化県鹿港の天后宮（旧祖宮）



- 鹿港は大陸と台湾を結ぶ良港として早くから繁栄。
- 閩南人とくに泉州系商人がここから台湾産の米を大陸に移出。
- 鹿港の天后宮は福建の湄洲島からもたらされた開基媽祖像を祀っており、台湾全土でも有名。

鹿港天后宮の内部と廟の重建を記した碑文（1816年）



## 天后宮に掲げられた清朝関係者の匾額



- 最前列は1683年に元鄭氏政権の武将ので清に降った施琅（福建泉州人）の「撫我則后」額。
- 二列目は1788年に林爽文反乱を鎮圧するため福建から軍を率いて鹿港に上陸した将軍福康安の「恩霑海国」額。
- 三列目は反乱鎮圧後、乾隆帝が賜った「神昭海表」の額

## 台南・赤坎楼と清朝関係者の碑文群（満洲文字の碑文も）



## 台南・天后宮の匾額と対聯（清朝官僚だった姚瑩の名も）



- 清朝は媽祖を公認、庇護することで台湾における支配の正統性を可視化した

## 中部・雲林県西螺鎮の福興宮（天后宮）



- 18世紀に福建から渡った媽祖像を祀り創建。嘉義県新港の奉天宮と並んで台中・大甲媽祖の巡行（約340km、30万人が参加）の拠点。
- この他、嘉義県北港の朝天宮（1694年創建）は台湾媽祖廟の総本山とされる。



媽祖の巡行（台南・国立台湾歴史博物館の展示）

## 媽祖の行列を迎える人々



西螺福宮の媽祖像と義勇の首領王得禄が掲げた「水徳増光」額（1839年）



### 王得禄：反乱軍鎮圧で提督に昇進した軍人移民



- 王得禄は諸羅県溝尾（現嘉義県太保市）の人。曾祖父が従軍して朱一貴反乱の鎮圧で功績をあげた。
- 1786年に林爽文の天地会が蜂起すると、王得禄は義勇（傭兵集団）を率いて鎮圧に貢献し、千総（軍官）となった。その後海上武装勢力の蔡牽と戦い、総兵、提督にまで昇進した。
- 1811年に王得禄は新港の奉天宮を創建し、三体の媽祖像を北港、新港および提督官署に祀った。彼は媽祖を祀ることで、地域を代表する政治的リーダーに成長。

### 霧峰林家：「軍功」で台頭した新興勢力



- 始祖林石は福建漳州から彰化県大里弋莊（現台中市大里郷）へ入植。林爽文反乱で清軍に村を攻め落とされ資産を失う。
- 子孫は阿罩霧莊（現霧峰）で再起を図り、五代林文察が太平軍を撃破した功績で署提督に昇進。
- 1862年に戴潮春（彰化県四張犁莊人）が蜂起すると、台湾へ戻ってこれを鎮圧。



霧峰林家の邸内（「本堂」には李鴻章の文字が）



霧峰林家の邸内（客を招き演劇を行う舞台）



霧峰林家の庭園（壮大な敷地に亭も）



## 霧峰林家の血塗られた成功と媽祖

- 霧峰林家は耕地の所有権をめぐる戴潮春と対立関係にあり、彼らが武装蜂起すると、林文察は戴潮春派の財産を「逆産」として没収・強奪。
- 清朝側の読書人は戴潮春が朱一貴、林爽文ら歴代の反乱指導者を祀ったと主張し、戴潮春らと対抗関係にあった近隣住民も「大甲の媽祖が降臨して戴潮春軍を撃退した」という物語を創作して清朝への指示を表明。
- 林文察の死後、弟の林文明は強引な土地集積により周囲の恨みを買って殺された。だが六代の林朝棟は1884年の清仏戦争で功績を挙げ、台湾巡撫劉銘傳の信任を獲得。
- 霧峰林家の台頭は、移民社会だった台湾でよく見られた「軍功（軍事的貢献）」による成功例であり、媽祖信仰もこれを側面から支援。

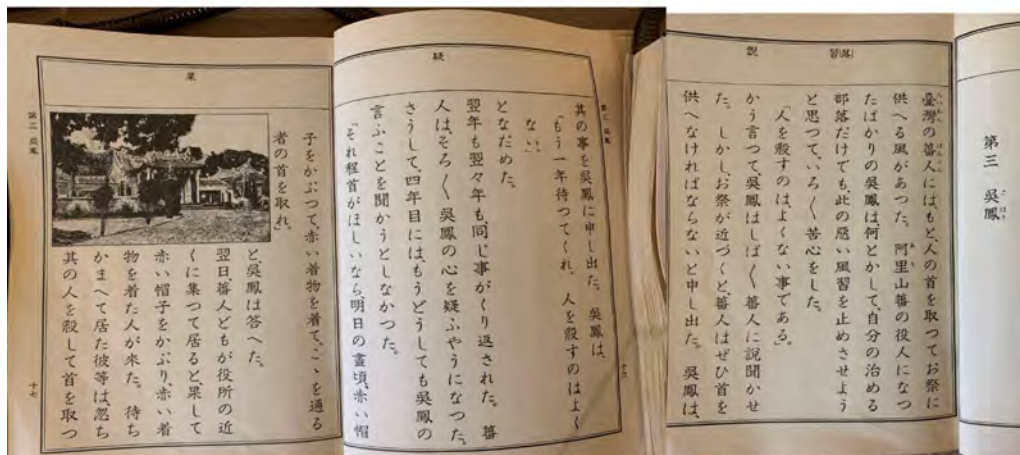


## 吳鳳廟：原住民に殺されて神になった男を祀る

- 吳鳳は清朝の公認を受けて原住民との交易を行った通事で、ツォウ族に殺された。
- 彼の死後、崇りを恐れた原住民が首刈りを行わなくなったとの信仰が広がり、通事の役所があった社口村に廟が創設。
- 日本統治時代に総督府は理蕃政策の一環で吳鳳を顕彰。
- 戦後、国民政府も吳鳳の物語を国民小学の教材として活用。
- 吳鳳が殺された場所も「吳鳳成仁地」として崇拜の対象に。



## 日本の尋常小学校教科書に載った吳鳳伝説



紅色の服を着た呉鳳像と蒋介石が贈った扁額



呉鳳廟の内部と総督府の元民政長官・後藤新平の意見書（1912年）



呉鳳の旧居（嘉義県竹崎郷義仁村）



地方政府の支援を受けて漢人住民が作った匾額（1801年）



馬上で剣を振る呉鳳像と位牌



## 原住民地区への「進出」が生んだ神話

- 嘉義県は阿里山の麓に位置し、豊かな山の資源を求める漢人勢力の進出拠点。
- 通事であった呉鳳が殺された事実は、地方政府と漢人移民にとって衝撃。
- 対原住民政策に動揺を来さないため、呉鳳の死を顕彰する必要があった。
- 「自らの死で首刈りの風習をやめさせた呉鳳」は漢人の原住民地区への蚕食を正当づけるためのフィクション。
- 1980年代に原住民の反対運動が高まり、台湾の教科書から呉鳳伝説は削除。



## 結 論

- 東海岸や原住民地区に入ると、媽祖廟など漢人の宗教施設は少なく、キリスト教会や日本時代の神社を転用した例が目立つ。
- 同じ漢人の信仰でも、1915年の西來庵事件で見られた扶鸞（シャーマニズムの一種で、首謀者の余清芳は王爺の「神勅」として日本への抵抗を唱えた）などは禁止されている。
- 媽祖に代表される台湾漢人の民間信仰は、清朝を初めとする公権力の公認と庇護を受けつつ、有力移民が構築した支配秩序を支えるネットワークとして機能した。
- 鄭成功から国民政府に至る歴代台湾の「外来政権」は、これら漢人移民の宗教施設に一定の庇護を与えることで、自分たちの統治の正統性を主張してきたのである。

## 嘉義農林のエース・呉明捷と噴水鶏肉飯



## 旧嘉義神社社務所（現史蹟資料館）と神社



## 阿里山鉄道のアプト式機関車と木材輸送



阿里山の原住民（右は職貢図の諸羅県内山阿里等社帰化生番）

## 鹿港の富商・日茂行（林家）

- 日茂行は泉州系の商行で、始祖林振崇は18世紀半ばに鹿港に至り、食塩の販売と船頭業で成功。
- 息子の林文濬（監生）は林爽文反乱の鎮圧に協力し、鹿港天后宮、彰化县城の修築を行って地域リーダーとして成長した。
- 孫の林廷璋は鹿港、彰化県の寺廟の修築に努め、1816年に林世賢と共に挙人に及第した。
- その後、鹿港が泥の堆積で機能しなくなると衰えた。



## 台湾五大家族の一つ、鹿港辜顯榮一家

- 鹿港辜家は霧峰林家、台北の板橋林家、基隆の顔家、高雄の陳家と並んで台湾五大家族に数えられる。
- ペナンの華僑だった辜顯榮の父親が鹿港に至る。辜顯榮は日本軍の台北入城を先導し、台北保良局長として日本への抵抗勢力を弾圧した。総督府から塩、砂糖、アヘンなどの経営権を与えられ成功。
- 1923年に霧峰林家の林献堂らが行った台湾議会設置請願運動（自治権獲得運動）を批判し、周囲から「漢奸」と非難された。



## 辜顯榮の像と台北大稻埕埠頭に設けた屋敷



鹿港林家・辜家に残る匾額（一つはマーシャル諸島の副大統領、一つは南投県の小作人たちが贈ったもの）



# 参考文献一覧

## 【書籍】

- 1 . Fennell, John 『ロシア中世教会史』(教文館、2017)
- 2 . Glotius, Hugo 『戦争と平和の法』(GPT出版 Kindle 版 古典再生プロジェクト、2023)
- 3 . Halperin, Charles J 『ロシアとモンゴル—中世ロシアへのモンゴルの衝撃』(図書新聞、39508)
- 4 . Hartog, Leo de 『Russia and the Mongol Yoke: The History of the Russian Principalities and the Golden Horde, 1221-1502』(British Academic Press、1996)
- 5 . Jackson, Peter 『From Genghis Khan to Tamerlane: The Reawakening of Mongol Asia』(Yale University Press、2024)
- 6 . Laloux, Frederic 『ティール組織 マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現』(英治出版、2018)
- 7 . ナショナルジオグラフィック編 『秘密結社 世界を動かし続ける沈黙の集団』(日経ナショナルジオグラフィック社、2018)
- 8 . 赤坂恒明 『ジュチ裔諸政権史の研究』(風間書房、2005)
- 9 . 綾部恒雄(監修),野口鉄郎(編集) 『結社が描く中国近現代(結社の世界史2)』(山川出版社、2005)
- 10 . 綾部恒雄(監修),福井憲彦(編集) 『アソシアシオンで読み解くフランス史(結社の世界史3)』(山川出版社、2005)
- 11 . 綾部恒雄(監修),川北稔(編集) 『結社のイギリス史(結社の世界史4)』(山川出版社、2005)
- 12 . 綾部恒雄 『クラブが作った国アメリカ(結社の世界史5)』(山川出版社、2005)
- 13 . 綾部恒雄(監修),福田アジオ(編集) 『結衆・結社の日本史(結社の世界史1)』(山川出版社、2006)
- 14 . 荒川正晴他 『近代アジアの動態 19世紀(岩波講座世界歴史 17)』(岩波書店、2022)
- 15 . 荒川正晴他 『構造化される世界 14～19世紀(岩波講座世界歴史 11)』(岩波書店、2022)
- 16 . 荒川正晴他 『モンゴル帝国と海域世界 12～14世紀(岩波講座世界歴史 10)』(岩波書店、2023)
- 17 . 荒川正晴他 『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀(岩波講座世界歴史 13)』(岩波書店、2023)
- 18 . 祝田秀全 『ビフォーとアフターが一目でわかる宗教が変えた世界史』(朝日新聞出版、2023)
- 19 . 小笠原弘幸 『オスマン帝国 繁栄と衰亡の600年史』(中央公論社、2018)
- 20 . 川口琢司 『ティムール帝国』(講談社、2014)



- 21 . 菊池秀明 『広西移民社会と太平天国』 (風響社、1998)
- 22 . 菊池秀明 『太平天国—皇帝なき中国の挫折』 (岩波書店、2020)
- 23 . 菊池秀明 『越境の中国史—南からみた衝突と融合の300年』 (講談社、2022)
- 24 . 木谷勤 『帝国主義と世界の一体化世界史リブレット40』 (山川出版社、1997)
- 25 . 久保一之、木村暁、井上治 『ポスト・モンゴル期』 (山川出版社、2018)
- 26 . 倉山満 『ウェストファリア体制—天才グロティウスに学ぶ「人殺し」と平和の法』 (PHP研究所、2019)
- 27 . 栗生沢猛夫 『ボリス・ゴドノフと偽のドミトリー—「動乱」時代のロシア』 (山川出版社、1997)
- 28 . 栗生沢猛夫 『タタールのくびき—ロシア史におけるモンゴル支配の研究』 (東京大学出版会、2007)
- 29 . 黄育榎原 『校注破邪詳辯—中国民間宗教結社研究資料』 (道教刊行会、1972)
- 30 . 佐伯富 『中国塩政史の研究』 (法律文化社、1987)
- 31 . 坂本勉 『未完のトルキスタン国家』 (講談社、1996)
- 32 . 杉山正明 『遊牧民から見た世界史』 (日本経済新聞社、1997)
- 33 . 杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後 興亡の世界史 第9巻(2018)、講談社学術文庫(2016)』 (講談社、2008、2016)
- 34 . 杉山正明 『「婿どの」たちのユーラシア』 (講談社、2016)
- 35 . 杉山正明 『興亡の世界史—モンゴル帝国と長いその後』 (講談社学術文庫、2016)
- 36 . 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡(上、下)』 (講談社、35205)
- 37 . 鈴木中正 『千年王国的民衆運動の研究—中国・東南アジアにおける』 (東京大学出版会、1982)
- 38 . 孫江 『近代中国の革命と秘密結社—中国革命の社会史的研究—一八九五—一九五五』 (汲古書院、2007)
- 39 . 孫江 『近代中国の宗教・結社と権力』 (汲古書院、2012)
- 40 . 孫江 『中国の「近代」を問う—歴史・記憶・アイデンティティ』 (汲古書院、2014)
- 41 . 瀧本弘之 『中国古典文学挿画集成』 (遊子館、2017)
- 42 . 壇上寛 『永楽帝—華夷秩序の陥穽』 (講談社、2012)
- 43 . 壇上寛 『明の太祖 朱元璋』 (筑摩書房、2020)
- 44 . 塚田誠之 『仕族文化史研究—明代以降を中心として』 (第一書房、2000)
- 45 . 坪谷邦生 『図解 組織開発入門 組織づくりの基礎をイチから学びたい人のための「理論と実践」100のツボ』 (ディスカヴァー・トゥエンティワン、2022)
- 46 . 寺島実郎 『人間と宗教』 (岩波書店、2021)
- 47 . 寺島実郎総監修 『モンゴル帝国とユーラシア史: 社会人・大学院生・学生の目線からのグローバルヒストリー (多摩大学インターゼミ教育研究業績シリーズ)』 (多摩

大学出版会、2023)

- 48 . 土肥恒之 『ロシア・ロマノフ王朝の大地』 (講談社、2007)
- 49 . 中井和夫 『ウクライナ・ベラルーシ史』 (山川出版社、1998)
- 50 . 中砂明德 『江南中国文雅の源流』 (講談社、2002)
- 51 . 野口鉄郎 『明代白蓮教史の研究』 (雄山閣、1986)
- 52 . 野田仁 『露清帝国とカザフ=ハン国』 (東京大学出版会、2011)
- 53 . 浜本隆志 『欧米社会の集団妄想とカルト症候群—少年十字軍』 (明石書店、2015)
- 54 . 濱本真実 『「聖なるロシア」のイスラーム—17-18世紀タタール人の正教改宗』 (東京大学出版会、2009)
- 55 . 平野聡 『大清帝国と中華の混迷』 (興亡の世界史 第17巻 講談社p.89,90、2007)
- 56 . 廣岡正久 『ロシア正教の千年—聖と俗のはざままで』 (講談社、2020)
- 57 . 細川滋 『キエフ・ルーシの時代』 (山川出版社、2002)
- 58 . 松木栄三 『ロシアと黒海・地中海世界—人と文化の交流史』 (風行社、2018)
- 59 . 三石善吉 『中国の千年王国』 (東京大学出版会、1991)
- 60 . 三谷孝 『現代中国秘密結社研究』 (汲古書院、2013)
- 61 . 宮野裕 『白樺の手紙を送りました—ロシア中世都市の歴史と日常生活』 (山川出版社、2001)
- 62 . 宮野裕 『「ロシア」はいかにして生まれたか—タタールのくびき』 (NHK出版、2023)
- 63 . 安田峰俊 『現代中国の秘密結社—マフィア、政党、カルトの興亡史』 (中央公論新社、2021)
- 64 . 山崎圭一 『一度読んだら絶対に忘れない世界史の教科書』 (SBクリエイティブ株式会社、2018)
- 65 . 山田賢 『移住民の秩序—清代四川地域社会史研究』 (名古屋大学出版会、1995)
- 66 . 山田賢 『中国の秘密結社』 (講談社、1998)
- 67 . 早稲田大学モンゴル研究所編 『モンゴル史研究—現状と展望』 (明石書店、2011)
- 68 . 和田春樹編 『ロシア史上・下』 (山川出版社、2002、2023)

#### 【論文】

- 1 . Bobrov, Alexander 他 『東方の知られざる人々の物語』 (スラヴ研究 第52号 p.261-280、2005)
- 2 . 明石茂生 『前近代中国における国家、市場、貨幣：宋元明代』 (成城大学経済学部、経済研究所年報・第34号 p.34-35、2021)
- 3 . 宇山智彦 『ロシアと中央アジア』 (岩波書店、岩波講座世界歴史 17近代アジアの動態 19世紀 p.197-218、2022)

- 4 . 小笠原弘幸 『オスマン王権とその正統性——血統』 (岩波書店, 岩波講座世界歴史 13, 西アジア・南アジアの帝国 16~18 世紀、2023)
- 5 . 風間伸次郎 『ツングース諸民族の口承文芸について』 (北海道立北方民族博物館研究紀要 20 巻 p.25-54、2011)
- 6 . 加藤一郎 『「シメオーノフ年代記」の世界』 (文教大学教育学部紀要巻 23, p.1-10、1989)
- 7 . 川口琢司 『キプチャク草原とロシア』 (岩波書店, 岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合—9-16 世紀 p.275-302、1997)
- 8 . 川口琢司 『カラチュの時代—ティムール朝を中心に』 (岩波書店 岩波講座世界歴史 10 「モンゴル帝国と海域世界——一二~一四世紀」 p.295-311、2023)
- 9 . 久保一之 『ティムール朝とその後—ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き』 (岩波書店 岩波講座世界歴史第 11 巻「中央ユーラシアの統合—9-16 世紀 p.147-176、1997)
- 10 . 栗生沢猛夫 『中世ロシアの法文化とモンゴル支配』 (「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 No.24 p.1-24、2008)
- 11 . 栗生沢猛夫・宮野裕 『イヴァン四世雷帝の『一五五〇年法典』: 訳と訳注』 (北海道大学文学研究科紀要 116 p.115-185、2005)
- 12 . ゲレルト、ソーハン 『モンゴル帝国時代におけるハーンたちの世界観について』 (和光大学総合文化研究所年報 2003 p.68-86、2003)
- 13 . 近藤信彰 『サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成』 (岩波書店、岩波講座世界歴史 13 西アジア・南アジアの帝国—一六~一八世紀、2023)
- 14 . 島田竜登 『構造化される世界—グローバル・ヒストリーのなかの近世』 (岩波書店、岩波講座世界歴史 11 構造化される世界 14-19 世紀 p.3-62、2022)
- 15 . 清水俊毅 『経済と宗教』 (東京大学宗教学年報 32 p.221-236、2014)
- 16 . 志茂碩敏 『モンゴルとペルシア語史書—遊牧国家史研究の再検討』 (岩波書店, 岩波講座世界歴史 第 11 巻、p.249-274、1997)
- 17 . 新藤義彦 『モンゴル・タタールのロシア支配』 (アジア研究所紀要 4 (1977 年): p.129-50、1977)
- 18 . ソウザ、ルシオ・デ、岡美穂子 『奴隷たちの世界史』 (岩波書店、岩波講座世界歴史 11 構造化される世界 14-19 世紀、p.131-160、2022)
- 19 . 高橋弘臣 『元朝通貨政策成立過程の研究』 (筑波大学博士論文、1995)
- 20 . 多摩大学インターゼミ・アジアダイナミズム班 『モンゴル帝国の興隆と衰退』 (多摩大学インターゼミ、2019)
- 21 . 張欣 『蓮宗宝艦における仏国土思想-円融四土選仏図-』 (東京大学大学院, 12 巻, p.81-p.98、2008)
- 22 . 東郷孝仁 『紅巾の乱研究の動向と課題』 (兵庫教育大学東洋史研究会 『東洋史訪』 第 1 号、1995 年 3 月、1995)

- 23 . 東郷孝仁『杜遵道と紅巾の乱—元末「紅巾」登場の背景』(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第3号、1997年3月、1997)
- 24 . 東郷孝仁『徐壽輝西系紅巾軍の内部構造—元末天完政権の体質と限界』(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第7号、2001年6月、2001)
- 25 . 東郷孝仁『杜遵道と紅巾の乱-元末「紅巾」登場の背景』(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第3号、1997年3月p.23、1997)
- 26 . 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一『イパーチイ年代記翻訳と注釈 11 ガーリチ・ヴォルィニ年代記 1230～1250年』(富山大学人文学部紀要第71号p.177-270、2019)
- 27 . 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一『イパーチイ年代記翻訳と注釈 12 ガーリチ・ヴォルィニ年代記 1251～1264年』(富山大学人文学部紀要第72号p.115-200、2020)
- 28 . 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一『イパーチイ年代記翻訳と注釈 13 ガーリチ・ヴォルィニ年代記 1265～1287年』(富山大学人文学部紀要第73号p.229-290、2020)
- 29 . 中沢敦夫・宮野裕・今村栄一『イパーチイ年代記翻訳と注釈 14 ガーリチ・ヴォルィニ年代記 1287～1292年』(富山大学人文学部紀要第74号p.173-217、2021)
- 30 . 野口鐵郎『元末のいわゆる東系紅巾軍諸勢力について—郭子興と芝麻李—』(横浜国立大学人文紀要.20p.21-41、1974)
- 31 . 林佳世子『西アジア・南アジアの近世帝国』(岩波書店、岩波講座世界歴史13「西アジア・南アジアの帝国—16～18世紀」、2023)
- 32 . 林 伯原『清代における民間宗教・秘密結社による武術の伝播と発展に関する考察』(国際武道大学,研究紀要第29号p.2、2013)
- 33 . 松田孝一『モンゴル帝国の統治制度とウルス』(岩波書店 岩波講座世界歴史10「モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀」p.77-106、2023)
- 34 . 3『権鈔銭に見る元代民間の通貨ルール』(佛教大学 鷹陵史学31p.1-19、2005)
- 35 . 宮野裕『一四世紀後半から一五世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力』(ロシア史研究第98号p.3-22、2016)
- 36 . 宮野裕『「新出の異端に関する物語」覚書—15世紀末のヨシフ・ヴォロッキーと府主教ゾシマとの論争の考察の前提として』(西洋史論集第9号p.62-91、2006)
- 37 . 宮野裕『14-15世紀モスクワの国家と教会—府主教宮廷と大公宮廷との人的関係を中心に』(岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第57号p.55-68、2018)
- 38 . 宮野裕『14世紀のストリゴリーニキ「異端」と正統教会』(スラヴ研究第46号p.57、1999)
- 39 . 宮野裕『15世紀におけるモスクワ教会の独立とその正当化作業—フェラーラ・フィレンシェ公会議観の変化を中心に』(西洋史論集第11号p.60-90、2008)
- 40 . 宮野裕『15世紀末のロシアにおける修道制批判とヨシフ・ヴォロッキーによるその処理方法』(西洋史論集第8号p.1-24、2005)
- 41 . 宮野裕『On the so-called 'Pravosudie Mitropolich'e』(岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第54号p.47-63、2015)

- 42 . 宮野裕 『イヴァン三世の一四九七年法典における多文化性——「刑事条項」を中心に』(ロシア史研究第80号p4-13、2007)
- 43 . 宮野裕 『イヴァン三世時代のモスクワ国家における宮廷問題と「異端者」』(ロシア史研究第75号p21、2004)
- 44 . 宮野裕 『キエフ府主教ヨアン2世のカノン回答集——中世ルーシへの導入のあり方を中心に』(岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第60号、2021)
- 45 . 宮野裕 『ストリゴリーニキの「書物」をめぐる最近の論争——偽の教師についての講和を中心に』(西洋史論集第1号p.1-14、1998)
- 46 . 宮野裕 『ヤロスラフ賢公の教会規定——解説と試訳・訳注』(北方人文研究第2号p.81-100、2009)
- 47 . 宮野裕 『ヨシフ・ヴォロツキーの「ノヴゴロドの異端者」像——中世ロシアの異端論駁書『啓蒙者』簡素編集版を中心に』(西洋史学第212号p.44、2003)
- 48 . 宮野裕 『ロシア・ビザンツ』(史学雑誌第114巻第5号p.336、2005)
- 49 . 宮野裕 『ロシア正教会の異端対策の展開——一五世紀のストリゴリーニキ異端への対策を中心に』(ロシア史研究第67号p.2-16、2000)
- 50 . 宮野裕 『一四世紀後半から一五世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力』(ロシア史研究98巻p.3-22、2016)
- 51 . 宮野裕 『十五世紀末のロシア正教会における正統と異端——「ノヴゴロドの異端者」を中心に』(史学雑誌第113巻第4号p.423、2004)
- 52 . 宮野裕 『書評：パシコヴァー六世紀前半のロシア国家における地方支配——代官と郷司』(スラヴ研究50p.343-349、2003)
- 53 . 宮野裕 『中世ノヴゴロド国の安全保障体制——ヤーニン近著』(西洋史論集 西洋史論集4,p.30-42、2001)
- 54 . 宮野裕 『中世ロシアのウラジーミル聖公の教会規定——写本系統樹の検討及び試訳』(岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第62号p.83-103、2012)
- 55 . 宮野裕 『中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」01』(岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編61,p.87-108、2022)
- 56 . 宮野裕 『中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」02』(岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編62,p.37-52、2023)
- 57 . 守川知子 『宗派化する世界——宗教・国家・民衆』(岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」p.97-130、2022)
- 58 . 森川哲雄 『ポスト・モンゴル時代のモンゴル——清朝への架け橋』(岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」、1997)
- 59 . 矢崎正見 『チベットに対する元朝の宗教政策』(立正女子大学短期大学部研究紀要第14集p.56-64、2012)
- 60 . 山崎岳 『アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生』(岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」p.163-182、2022)

- 61 . 山下範久 『一四一九世紀における「パワーポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容』(岩波書店、岩波講座世界歴史 11 「構造化される世界——14～19 世紀」 p.63-96、2022)
- 62 . 吉澤智也 『記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開—21 世紀のパクス・モンゴリカを求めて—』(日本国際情報学会誌 2 巻 1 号 p.31-33、2017)
- 63 . 四日市康博 『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』(岩波書店岩波講座世界歴史 10 「モンゴル帝国と海域世界—12～14 世紀」 p.40-76、2023)

### 【Web】

- 1 . TBS『失われる宗教、言葉、尊厳…記者が見たウイグルで進む「漢族化」の実態 市場の刃物は鎖で繋がれ民家の玄関には QR コードが…そのワケは？【news23】2023 年 7 月 15 日』(TBS、<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/605602?page=1>, 2023、最終閲覧日 2023 年 12 月 20 日)
- 2 . 読売新聞社『中国、政府活動報告に「宗教の中国化」明記…チベット・ウイグルの締め付け継続』(読売新聞オンライン、<https://www.yomiuri.co.jp/world/20230305-OYT1T50237/>, 2023、最終閲覧日 2023 年 12 月 20 日)
- 3 . Britannica『The Yuan dynasty in China (1279-1368) – Decline of Mongol power in China』(Britannica、<https://www.britannica.com/place/Mongol-empire/The-Yuan-dynasty-in-China-1279-1368>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 4 . Manaev, Georgy『「タタールのくびき」 モンゴル帝国のロシア侵攻・支配の実像』(Russia Beyond、<https://jp.rbth.com/history/83848-tataru-kubiki-mongol-teikoku-roshia-shinko-shihai-jitsuzo>, 2020、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 5 . Manaev, Georgy『The Mongol invasion was the reason Russia formed』(Russia Beyond、<https://www.rbth.com/history/332313-mongol-invasion-was-reason-russia-formed>, 2020、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 6 . Massolit『The Decline and Fragmentation of the Mongol Empire, 1256–99』(Massolit、<https://www.massolit.io/courses/the-decline-and-fragmentation-of-the-mongol-empire-1256-99/causes-of-the-decline-of-the-mongol-empire>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 7 . StudySmarter『Decline of Mongol Empire』(StudySmarter、<https://www.studysmarter.co.uk/explanations/history/modern-world-history/decline-of-mongol-empire/>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 8 . Tryit『【世界史】宋と元の時代 モンゴル人の支配 5 分でわかる！ 寛大な統治の仕組み』(TryIt 高校世界史 B、<https://www.try-it.jp/chapters-11444/lessons-11467/?authuser=0>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 9 . Wikipedia『モンゴルのルーシ侵攻』(Wikipedia、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A2%E3%83%B3%E3%82%B4%E3%83%AB%E3%81%AE%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%82%B7%E4%BE%B5%E6%94%BB>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)

- 10 . Wikipedia『タターのくびき』(Wikipedia、  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%81%AE%E3%81%8F%E3%81%B3%E3%81%8D>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 11 . Wikipedia『露蒙関係』(Wikipedia、  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9C%B2%E8%92%99%E9%96%A2%E4%BF%82>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 12 . 一葉古今『「石人一隻眼」中為什麼石人只有一隻眼而不是三隻眼?』(毎日頭條、  
<https://kknews.cc/history/xvkbk4q.html>, 2018、最終閲覧日 2024 年 1 月 23 日)
- 13 . 宮脇淳子『皇帝たちの中国史7「秘密結社」のシナ史～朱元璋と明の建国』(歴史チャンネル、  
[https://rekishi-ch.jp/column/article.php?column\\_article\\_id=88](https://rekishi-ch.jp/column/article.php?column_article_id=88), 2019、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 14 . 宮脇淳子『皇帝たちの中国史 8 明の太祖洪武帝朱元璋～吹き荒れる大粛清の嵐』(歴史チャンネル、  
[https://rekishi-ch.jp/column/article.php?column\\_article\\_id=89](https://rekishi-ch.jp/column/article.php?column_article_id=89), 2019、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 15 . 高橋 壯『偈(読み)げ』(日本国語大辞典、小学館、  
<https://kotobank.jp/word/-58509>, 1984、最終閲覧日 2024 年 1 月 23 日)
- 16 . 佐藤成順『びやくれんじゃ／白蓮社』(浄土宗大辞典、  
<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/>, 2018、最終閲覧日 2024 年 1 月 23 日)
- 17 . 砂山 稔『白蓮教(読み)びやくれんきょう』(改訂新版 世界大百科事典、  
<https://kotobank.jp/word/-3134092>, 最終閲覧日 2024 年 1 月 23 日)
- 18 . 小林正美『白蓮教(読み)びやくれんきょう』(日本大百科全書、  
<https://kotobank.jp/word/-120986>, 1994、最終閲覧日 2024 年 1 月 23 日)
- 19 . 上田信トイビト編集部『通貨から見たモンゴル帝国以後の世界システム』(トイ人、  
<https://www.toibito.com/toibito/articles/通貨から見たモンゴル帝国以後の世界システム>, 2019、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 20 . 曾和義宏『ごえねんぶつ／五会念仏』(浄土宗大辞典、2018、最終閲覧日 2024 年 1 月 23 日)
- 21 . 矢沢知行『モンゴル時代中国の塩と経済(中国)』(塩と暮らしを結ぶ運動推進協議会 暮らしお・de・ワールド、2023、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)
- 22 . 矢田修真『チベットでの貨幣流通の歴史』(中外日報、2023、最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)

# 最終発表スライド



## モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治 ～ロシアと中国の視点から～

第14期社会工学研究会 アジアダイナミズム班

|      |                               |
|------|-------------------------------|
| 学部生  | : 野中, 高, 中西, 村上, 日高           |
| 大学院生 | : 杉, 須貝, 小柳, 高橋, 二本柳, 佐々木, 斎藤 |
| 指導教員 | : 金美徳, 水盛涼一                   |

画: 劉福通起巻

## Agenda

1. 振り返り (2017年～2022年 論文のテーマ)
2. 背景
  - ・ 地理的背景
  - ・ 2023年度「アジアダイナミズム班」のテーマ
3. モンゴルの宗教と組織
4. 中国の視点より
  - ・ 元が衰退した経緯と存亡への宗教の影響
  - ・ 変化した白蓮教
5. ロシアの視点より
  - ・ 「タタールのくびき」論争とその実態
  - ・ ロシアとモンゴルの関係に影響を与えた宗教の役割
  - ・ 歴史における宗教と政治
6. フィールドワーク
  - ・ モンゴル帝国とロシアの関係 (宮野 裕 教授)
  - ・ 台湾の宗教と政権の関係 (菊池 秀明 教授)
7. アジアダイナミズム班 活動記録
8. 参考文献・論文



## 振り返り（2017年～2022年 論文のテーマ）

| 年度   | タイトル                      | 頁数  |
|------|---------------------------|-----|
| 2017 | モンゴル帝国のユーラシア興隆史           | 107 |
| 2018 | モンゴル帝国の興隆と衰退              | 244 |
| 2019 | モンゴル帝国と朝鮮半島               | 84  |
| 2020 | パンデミックのユーラシア史とポストコロナ      | 118 |
| 2021 | 倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～ | 106 |
| 2022 | 華人華僑とモンゴル帝国史              | 81  |

659



2021年度・2022年度は、モンゴル帝国の影響を受けて周辺地域で発生した社会現象としての倭寇や華人華僑を研究した。

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版されました(2023/3/30発売 全240頁)

## 研究目的・方法

アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す

「**文献研究**」と「**フィールドワーク**」を中心に研究活動を行う

フィールドワークは**モンゴル、ロシア、中国の研究者**にヒアリングを行う

背景

## 地理：モンゴル帝国のアジア統一（13世紀）



出典：<https://juugo-blog.com/history-of-asia2>

## 地理：モンゴル帝国が衰退・明の時代（14-15世紀）



出典：<https://juugo-blog.com/history-of-asia3>

## 2023年度「アジアダイナミズム班」のテーマ

### モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治 ～中国とロシアの視点から～



中国



ロシア

出典：斎藤和子「ロシア」は、いつかには定めたか——タタールのくびき」(NHK出版、2023年6月)

出典：斎藤和子「ロシア」は、いつかには定めたか——タタールのくびき」(NHK出版、2023年6月)

## 年表：モンゴル帝国・中国・ロシア・日本

| 世紀      | モンゴル帝国・中国   | 中国宗教の動き  | ロシア地域とモンゴル支配  | 日本   |
|---------|---|--|---|--|
| 8-13世紀  | 705年 武则天没御<br>唐の後漢<br>755年 安史の乱<br>1206年 <b>モンゴル帝国の誕生</b><br>1271年 元 建国 | 694年 マニ教が中国に伝来<br>南宋末頃、マニ教と弥勒信仰が融合した <b>白蓮教</b> が生まれる<br>元朝代は布教の公認を受けるも一度も禁止令  | 1223 チンギス・ハーンの武将ジェベらがルーシ攻撃開始<br>1227 チンギス・ハーン没、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)をジョチの長子のバトゥが引き継ぐ(ジョチはチンギス・ハーンの養子)<br>1236-42 バトゥの率いる軍がヨーロッパ侵攻(第一次、第二次)<br>1243 ボルサの河畔のサライをジョチ・ウルスの都と定める<br>1250年代 <b>モンゴル(タタール)によるルーシ支配</b> (徴税・徴兵)が徐々に確立<br>1266 ジョチ・ウルスがモンゴルから分離 | 894年 遣唐使廃止<br>1274年 文永の役<br>1281年 弘安の役   |
| 14-16世紀 | 1305年 元が5つに分裂<br>1368年 <b>明 建国</b><br>1383年 明で海禁政策開始<br>1567年 明が海禁を緩和   | 1338年、白蓮教の反乱が起こるも鎮圧<br>1351年、 <b>紅巾の乱</b> ；北宋の末裔を名乗る教祖韓山童が河南で反乱を起こす(東系紅巾軍)<br>対応した安南の紅巾軍配下に <b>朱元璋</b> がいた<br>1351年、湖北で徐寿輝が皇帝を名乗る(西系紅巾軍)<br>1368年 朱元璋が元を倒し皇帝「 <b>洪武帝</b> 」になる。これとともに白蓮教を禁止 | 1480 ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了<br><b>モンゴル(タタール)のロシア地域支配が終了(240年間)</b>  | 1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化)<br>1419年 応永の外寇<br>1467年 応仁の乱<br>1587年 豊臣秀吉によるバテレン追放令 |
| 17-18世紀 | 1616年 <b>清 建国</b><br>1644年 明が滅亡、<br>満州族である清の時代へ                         | 清政府は取り除かざるべき宗教を内管にかかわらず「 <b>白蓮教</b> 」とまとめて呼称し弾圧<br>1796年 <b>嘉慶白蓮教徒の乱</b>   | 1700 グリミア・ハン国への貢納が終了  | 1639年 鎖国<br>1612年 キリスト教禁止令   |
| 19世紀    |   |  |   | 1858年 米修好通商条約<br>1868年 五箇の掲示   |
| 20世紀    | 1911年 辛亥革命<br>1912年 清が滅亡、 <b>中華民国 誕生</b>                                |  |   | 1910年 韓国併合<br>1972年 日中国交正常化  |



### モンゴルの宗教と組織

## モンゴル帝国の思想としてのシャーマニズム

モンゴル

### 問題意識

元が西の東方正教会を容認したとき、元の信仰がどのようなものであったのか。  
シャーマニズム信仰が東方正教会とどのように違い、どのような信仰形態であったのか

#### 1. チンギスハンとシャーマニズム

チンギスハンの一族はシャーマニズム信仰をしていた。

東アジアで大国を形成したとき、様々な地域の思想が反映され仏教思想をも取り込んで独自の世界観を作っていく。

特に宇宙三界観という概念が特徴的

#### 2. シャーマニズムとモンゴル

シャーマニズム信仰は北東アジアと中南米にみられる。

その中で北東アジアのシャーマニズムはシベリアのツングース人が発祥

当時は民主主義ではない、一族の考えが国の考えに国の権力者に広がった。



### まとめ

- ・東洋の考えと西洋の考えの違い
- ・民衆と国の違い

# モンゴル帝国の組織構造を組織論で考察する

モンゴル

## 問題意識

モンゴル帝国が広大な空間において、長期間に渡り繁栄した要因として独自の組織構造が影響しているのか？ 同時期に繁栄したオスマン帝国と比較する。

### 1. モンゴル帝国の組織構造（約400年間存続）

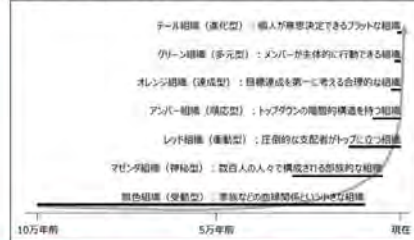
モンゴル帝国は、1206年にチンギス・カンが即位し発足した。その組織構造は、牧民たちを95個の千戸群に再編成し、千戸の下にも、百戸や十戸と言う具合に組織化された多民族混合ハイブリッド集団であり、**戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく、一種の自動装置のようであった。**これはティール組織（進化型）の必要要素を満たしている可能性がある。

### 2. オスマン帝国の組織構造（約600年間存続）

オスマン帝国は、1299年頃、イスラム世界の辺境であるアナトリア北西部に誕生した。オスマン王家を中心とした中央集権体制を作り上げ、イスラム法を用いて帝国を統制していた。

### 3. 組織の発達段階モデル

※ フレデリック・ララー『ティール組織』を元に作成



## 結論

- 今回の研究では、両国間の組織構造の違いを明確には出来なかった。
- しかし、モンゴル帝国をティール組織（進化型）の要素である3つの突破口、①自主経営、②全体性、③進化する目的、に照らすと、何れの項目も満たしている可能性があり、ララーが提唱した組織の発達段階モデルは、無色組織（受動型）から順に発達するだけではないとの仮説に行き着いた。



## モンゴル帝国の存亡に宗教はどう影響したか

中国

### 問題意識

地域に定住しない性質をもつ「遊牧民族」・モンゴル人が大陸の西側に版図を広げ、「世界最強」といわれる国を作り上げた政権・組織運営の特徴を探るとともに、元朝の滅亡につながった白蓮教（秘密結社）が王朝末期、住民に浸透していく過程を明らかにすることで、現代中国、国際社会、日本社会が学び得るものを探る。

### 1. モンゴル帝国、組織の特徴＝「統制」と「寛容」

モンゴル遊牧民はきわめて純朴にして勇敢、命令・規律によく従った。精強な軍隊組織、徹底したピラミッド式のシステム構築、「戦わない軍隊」とも言われ、自軍に対しては周到な計画性と徹底した準備、意志統一、敵方に対しては、徹底した調査と諜略工作を行った。また十進法単位の組織体制で軍・人民の団結と規律を高めた。

モンゴル人の命を徹底して大切に。命を軽視すれば組織は瓦解することを痛切に感じ、国の柱とした。宗教にも比較的寛容で、あらゆる民族・文化・宗教を受け入れた。このことが、組織の統制が効いている時には国力を豊かにするために機能するが、国勢が衰え、カバネスが効かない状況下においては、白蓮教の浸透など倒幕を許す要因になることが推測された。

### 2. 宗教・秘密結社はいかに組織に浸透するのか

『中国が激動するとき、必ず秘密結社は現れる』。「劫」の間から人々を救済するために、弥勒仏が人間として地上に転生する。「劫」からの救済という世界観が、政治腐敗や水南など未期的症状を呈していた十四世紀の元朝に浸透したことは想像に難くない。

### 3. 白蓮教と紅巾の乱

現存する世界への呪詛から破局を予感し、その間から満たされた理想世界への救済を確信する、白蓮教の世界観の重要なカギはマニ教にある。

### 結論

元朝末期、天災と失敗により質しさにあえんでいた住民が至福を希求するにいたり、秘密結社が浸透し、光明・救済を求めた。白蓮教は明・清以降に続くその後の中国社会に存在し、再度反乱を起こすなど国の行く末に影響を与えているが、すべて興べ切れていない。その成り立ちと社会的機能、明・清以降に続く影響をさらに調べ、現代社会にとつなげられているのが、組織運営上何を学べ取るべきなのかを引き続き考えていきたい。

## 元(1271～1368年)の経済政策と民衆

中国

### 問題意識

元の経済政策は庶民の生活を困窮させ、紅巾の乱の起因になった。財政難の要因とされる「交鈔の乱発、専売制度、チベット仏教の保護」は、庶民の生活にどのように影響したのか？

### 1. 交鈔(紙幣)の乱発

元は、紙切れの交鈔に通貨価値があるということを利用して暴力を持って庶民へ浸透させた。チベットに至っては上層部から庶民に至るまで中央政府の公布施行する通貨制度を守らせた。紙幣は商税や折帛銭等の納入に使用されており、農民層にも流通範囲を拡大させていた。財政難政策として交鈔発行を促進したことにより貨幣価値は下落、インフレーションを起こした。民衆は交鈔を紙くず同様に扱うようになり従来の物々交換に戻ってしまった。

### 2. 専売制度

塩引(販売許可証)が、中統鈔(紙幣)で購入されていた記録が残っている。元の国家財政は塩税に依存度が高く、専売制度による税率の引き上げは庶民の生活にも

影響した。中央政府が継承争いで揺れている最中、紅巾の乱に先んじて、南部で塩商人が反乱を起こした。

### 3. チベット仏教の保護・祭祀に費用を投じた

チベットと元との交渉内容は、サキャ派との宗教的交流とそれに伴う政治的・社会的権益の授受に集約することになった。北方諸王への賜与は、中国王朝となった元への彼らの反発を和らげる意図もあり、懐柔策としても必要不可欠なものであった。神御殿の祭祀は太廟の祭祀と並んで先祖の恩に報いる大事であるとし、紅巾の乱の最中でも回数を増やした。各国共通価値を持つ銀を定例の賜与の他、種々の名目で臨時に与えることも多く、その額は元の歳入銀を上回ることも稀ではなかった。結果、財政難を乗り切るため、経済政策に至った。

### 結論

元は農民層に至るまでの庶民に徹底した通貨制度を浸透させていた。それゆえ財政難の際には経済政策による通貨価値の下落、インフレーションが庶民の生活に直接影響を及ぼし、紅巾の乱につながってしまった。民衆暴動の史的考察によれば、暴動は単なる食料不足への不満で起こるのではなく、取引や流通における慣行的・伝統的な経済行為規範が犯されたことによる義の自認行為とのこと。経済政策の民衆への影響の態様は、これに当てはまるとも言える。

## 明の初代皇帝・洪武帝と白蓮教との関係

中国

### 問題意識

洪武帝は、白蓮教徒として元を打倒し明を建国したが、即位後は白蓮教の弾圧を行った。弾圧の背景には、白蓮教と他の権力者とのつながりを牽制し、白蓮教を通じた武器や情報、財の吸い上げ等の裏取りをする目的は無かったのか？

- 洪武帝は、紅巾党に参加していたことを恥じ、その事実をできる限り隠そうとした。
- 紅巾党出身の家来もいたが、そのほとんどが殺され、浙江府学教授の林元亮が、海門衛兵士のために増俸を感謝する表(天使に奉る文書)を作った際に「則を作りて意を垂れる」と別の文字を使用したことから、洪武帝を「紅巾の賊」と誹ったものとして処刑された。
- 儒教に基づく伝統的な中国王朝の復活を目指したので、他の宗教との蜜月は考え難い。



- 錦衣衛という諜報組織を創設し、家臣たちを監視していたと言われているが、諜報活動に自組織を使用するならば、わざわざ白蓮教という秘密結社を餌に馴らしておく必要はない。
- 白蓮教弾圧の動きを知るにあたり、官憲による摘発とその動員となり得る反官憲行動を確認したが、いずれも元末の西系紅巾の流れに繋がっていた。これは支配理念の徹底が旧西系紅巾の地盤に対して強力に行われたことをうかがわせ、「妹」「邪」「根絶」の理念が遵守されていたことを表わす。
- 東系紅巾を摘発がほとんど確認できず、洪武帝の古巣利用の可能性も残されたが、東系紅巾(徐州集団、濠州集団)の持つ性格をみるに發起時に於いては明確な政治理念や宗教的な理念は所有していなかった。



### 結論

洪武帝は、白蓮教を表で弾圧していたが、裏取りをしていた可能性は低い。建国前に洪武帝が所属した東系紅巾党は明確な宗教的思想を所有していないため、明の統治に反抗する脅威として見做されなかった可能性がある。その背景には、洪武帝が紅巾党すなわち白蓮教の内情・特性を熟知していたことがあるとも言える。



## 中国の視点より 変化した白蓮教

18

### 白蓮教の発足と宗教思想 中国

**問題意識** 1368年モンゴル帝国を倒した『白蓮教(秘密結社)』は果たして正教なのか？それとも邪教なのか？

**1. 白蓮教の歴史**  
白蓮教は1131年の創立当初は阿彌陀(あみだ)信仰であったが元末ごろから弥勒(みろく)信仰を中核とする教団へと変化した。

**2. 白蓮教の宗教思想の布教**  
茅子元は天台宗の教法をまねて、円融四土の図、農朝の礼懺文、偈歌四句、仏念五声をつくった。

**3. 白蓮教が結束を強固にした理由**

- ・経済的な不平等や社会的な不安(不作や飢饉)
- ・対外的な圧力(身分的な階層や卑なる弾圧)
- ・カルト的な呪術

**【カルト的な呪術で結束】 1351年紅巾の乱の発端**  
民衆を奮起させ多くの者を信じ込ませるための呪術をもちいていた。韓山童は蜂起前年から石人工作をし、童謡や弥勒佛下生信仰を流布させ、更に北宋滅亡時の徽宗や劉光世の子孫(孺)と詐称した。

**★片目石を事前に川の砂浜に埋め「片目石が現れたら呪われる」と自作自演をして、結束力を高めた**



**結論** 創立時には清らかな信仰をする正教であったが、社会的・時代的变化によって才カルト的で攻撃的な邪教に変化していった

### 白蓮教は、元の民衆にとって真の革命家だったのか 中国

**問題意識** 漢民族にとって外敵であるモンゴル族に支配されていた元において、白蓮教の起こした反乱は後の中国を形成するうえで思想にどのような影響を与えたのか。

**1. 白蓮教の思想**  
浄土思想を重視し、仏教・道教・儒教や民間の信仰を取り入れた複合的な宗教であった。  
圧政に対し、平等を訴えた白蓮教は弾圧されることも多々あったが、民衆の目にはヒーローに見えていた。そのため、多くの信者がいた。

**2. 国内に矢を立てた理由**  
元の時代は、ヨーロッパの一部地域を占領するまで広がっており、現状を変えるためには国を変える必要があった。そのため、白蓮教は民衆の不安を煽り、元と対立することになる。

**3. 革命家たる理由**  
白蓮教は元を大きく衰退させた後、白蓮教徒であったが、明の皇帝となった洪武帝により激しい弾圧を受けた。  
宗教としての力は衰えたが、後の天理教・太平天国などの秘密結社や宗教の思想に大きな影響力を与えることになる。  
見方により悪が正義が分かれる白蓮教は、悪徳があれど民衆を導き国を築いた事実は変わらない。

**結論** 現代の中国は宗教をうまく制限し、その他を統制しているが、歴史の中で中国がどこよりも宗教の持つ影響力を体験してきたからである。白蓮教の反乱は、人口の多い農民・韓国籍に行動を起こせば現状を変えられるという思想を植え付け、後の秘密結社や宗教を煽ることになった。これが現代の宗教規制につながっている。  
元の民衆にとって、白蓮教は革命家だった。一方、元の支配国の中には今の体制が崩れ、内乱が始まるさかぎけになった白蓮教への批判もあった

## 白蓮教と現代中国の宗教統制

中国

### 問題意識

白蓮教が起こした紅巾の乱とそれ以降の混乱に関する考察から、現代の中国での宗教統制にどう影響を与えたのか、与えなかったのかを探る

### 1. 白蓮教の反乱とそれ以降の動き

1351年に白蓮教徒によって紅巾の乱が起きた。この反乱は鎮圧ができず、結果として元を倒した。明に代わった後に白蓮教は禁止という宗教の根幹に関わる統制を受けたのである。

明に続いた清でも厳しく取り締まりが行われたが、1796年に白蓮教徒の乱を起こしたのである。この乱は、1804年まで続いたが結果鎮圧されてしまったが、清の力が弱くなったを示したのである。

### 2. 現代中国の宗教統制

2009年に漢族とウイグル族が起こした「ウルムチ騒乱」以降、中国政府はテロ対策を理由に、ウイグル族への監視を強化したのだ。ウイグル族は半数がイスラム教である。この反乱以降の統制として、民家に一軒一軒QRコードをつけたりモスク取り壊しや閉鎖やヒジャブの禁止などが挙げられるのだ。

2015年に宗教の中国化を打ち出し、習近平氏は、我が国の宗教の中国化の方向を堅持し、宗教が社会主義社会に適應するように積極的に導く」と発言したのである。

### 結論

中国において白蓮教が起こした反乱は全国規模で起きており、止めることができず結果政権を代えるにまで至ったのである。その力を危惧した政権側は様々な統制を行っていたが、それでも宗教結社として残り続けたのである。それだけ白蓮教の存在が大衆に根付いたのであると考えられるのである。このため現代政府の過剰なまでの統制に繋がったと考えられるのである。

中国

## 秘密結社はどう政治的影響力を及ぼしたのか

中国

### 問題意識

秘密結社である洪門(ホンメン)は清朝の支配に抵抗する過程で、中国の民衆の民族意識や愛国心を高め、中国の近代化を促進する役割を果たした。秘密結社である洪門がどのように政治的影響力をひろめていったのか？

・ 洪門の起源は諸説あるが、清朝が成立した後、明朝の遺臣や民衆が結成した互助組織が起源とされている。これらの組織は、清朝の支配に抵抗するために武装し、各地で反清闘争を展開した。

・ 洪門は18世紀後半以降、華僑の間で急速に拡大した。華僑の間で社会保障や教育などのサービスを提供することで、華僑社会の結束を強める役割も果たした。

・ 洪門は、中国の近代史において重要な役割を果たしたとされている。1911年に起きた辛亥革命では、洪門は孫文率いる中国同盟会と協力し、清朝の打倒に貢献した。

・ 洪門は、中国の近現代史において重要な役割を果たした秘密結社である。現代においても、世界各地で活動している洪門は、中華系社会の結束を図り、社会福祉や文化交流、ビジネスネットワーク、政治活動などを通じて、多様な役割を果たしている。



国際洪門中華總會



洪門人地分

出典: <https://hungmen-hq.org/>

出典: <https://www.facebook.com/actfreemasons3821.org.jp/>

### 結論

洪門は、中国の近現代史において重要な役割を果たした秘密結社である。現代においても世界各地で活動している洪門は、中華系社会の結束を図り、社会福祉や文化交流、ビジネスネットワーク、政治活動などを通じて、多様な役割を果たしている

中国





## ロシアの視点より タタールのくびき・ロシア正教

### 「タタールのくびき」論争とその実態 ロシア

**問題意識** モンゴル帝国の圧政を示す「タタールのくびき」にはモンゴルが与えたロシアへの影響に対する様々な見解が語られているが、果たしてその実態はどのようなものだったのか？現代のロシアに与えた影響はあったのか？

**モンゴル帝国とロシアを巡る論争**

- 1) 19世紀ヨーロッパ人
  - ・「ヨーロッパ人とは認めない」「一皮むけばモンゴルだ。」
- 2) 20世紀のソ連の歴史家
  - ・「我が国には一切モンゴルの影響など無かった！」
- 3) ユーラシア派の歴史家
  - ・「ロシアはモンゴルの影響で始まった。モンゴルのおかげだ。」
  - ・「共に戦い、交流し、モンゴル人の妻も迎え入れていた」
  - ・「ロシアの知識人には執拗なイデオロギーがあった」
- 4) 現在（栗生沢先生など）
  - ・「どちらも言いすぎ。資料上の証拠は圧倒的に不足。」
  - ・「淡々と当時の歴史事象の回復につとめるべきだ。」

- ・1250-1480年(240年間)のモンゴル(タタール)の支配の中で、当時のルーシ地域の民は「くびき」という憎悪の認識は無かった
- ・13世紀当時の知識人「ロシア正教会聖職者」により自己中心的に残された被害者側史料から19世紀の人々が受容し「モンゴル=悪」という被害者意識の中で「タタールのくびき」という黒歴史として語り継がれてしまった結果である
- ・モンゴル側の主張(文書)は中国・イラク方面については残っていたが、ロシア方面についての文書はほとんど残っていないため、ロシア側の一方的な言い分のみが残っている
- ・16世紀初頭、ジョチ・ウルス崩壊後、ロシアのイヴァン皇帝はカザン・カン国他などを征服。その後のシベリア統制において、**タタールの慣行を一部利用したため、ロシアがモンゴルを「相続」したとする見方**もあったが一つの側面に過ぎない

**結論**

- ・「タタールのくびき(モンゴル帝国による圧政)」は「ロシア正教会聖職者」の被害者意識により後から作られた誇張されたイメージだった
- ・モンゴル帝国の時代はロシアの歴史の一部であり、現代のロシアに対する直接的な影響は薄い
- ・しかし、歴史的な経験や文化的な相互作用が、ロシアのアイデンティティや文化に影響を与えている可能性はある

### ロシアとモンゴルの関係に影響を与えた宗教の役割 ロシア

**問題意識** ロシア地域がモンゴルの支配下に入る過程、また独立する過程で、宗教はどのような役割を果たしたのか？近代以前における宗教と統治の関係の一つの例として、現代に生きる我々の参考にする

**ロシアがモンゴル支配下に入った経緯**

- ・13世紀前半のロシアは、モンゴルだけでなく、スウェーデン、チュートン騎士団からも攻撃されていた(カトリックは改宗を要求)
- ・モンゴル(ジョチ・ウルス)の統治方法は間接支配で、宗教に寛容で貢納を免除していたことから、1240年、ノヴゴロト大公アレクサンドルはモンゴルと和議を結び、ヨーロッパの2勢力を退けた
- ・モンゴルの朝貢による支配に入ることは「正教会が歓迎」(宮野, 2023)。アレクサンドルは、正教を守護した英雄として列聖され、「ロシア愛国主義の源流」となった(廣岡, 2020)

**ロシアがモンゴルから独立する経緯**

- ・14世紀初頭：ジョチ・ウルスはイスラム教に改宗 →ロシア正教会への態度が敵対的に変化
- ・1380年、モスクワ大公ディミトリイは、他のロシア諸公と同盟を結んだうえで、ロシア正教ラドネジ修道院長の聖セルギーを訪れ意見を問うた。セルギーは「タタールと戦うべし」と進言、クリコヴォの戦いでロシア側が勝利
- ・モンゴル支配はさらに100年続いたが、クリコヴォの勝利により「タタール人を恐れなく」なり「両社の関係を決定的に変えた」(廣岡, 同)
- ・モンゴル王族間の争いが激しくなり、1480年、ロシアは朝貢を停止し独立へ

**結論**

- ・カトリック側からも攻撃を受けたロシアは、異教に寛容だったモンゴルを「選んで」支配下に入った。モンゴルの力が弱まると、ロシアが独立を試みる動きに正教会が「お助け」を与えた
- ・宗教は統治に正統性を与えるものとして、ロシアでもモンゴル(自然崇拜)でも影響を及ぼし、また臣族の求心力の基でもあった



# 歴史における宗教と政治

ロシア

問題意識

ロシアの「タタールのくびき」と言われるモンゴルによる統治の時代に、キリスト教はどのように振る舞い、どのような役割を果たしたのか

ヨーロッパの歴史とキリスト教

1. ユダヤ教から派生したキリスト教(一神教)
2. ローマ帝国初期はギリシア神話を背景に皇帝自身を神格化し、キリスト教を迫害
3. キリスト教がローマ帝国の国教に
4. 教会の東西分裂



ポスト・モンゴルの世界(宗教の果たした役割)

1. 宗教改革がカトリックを世界へと向かわせた(布教活動のローバリ化)
  - カトリックの布教は反発を招き、禁教へ
  - 国や地域社会での宗教・信仰の一般民衆への浸透、および人々の信仰の同一化、そして世俗主義へ(宗教の大衆化)
2. モンゴルは世界の構造化への道標を作った
  - 西アジアでの宗派対立
  - 宣教師らによる対外布教・国家による宗教統制と「国家宗教化」
  - 日本でのキリスト教禁令
  - 宗教、宗派のローカライゼーションと宗教マジョリティの出現→「統制」へ
3. ウェストファリア条約(宗教戦争)
  - 政教分離と世俗主義の時代へ

結論

歴史における政治と宗教の協働

• 「タタールのくびき」前後の中世ロシアに於いて、キリスト教と国家は緊密に関係し高い権力の転換をもたらすきっかけを作った  
 • モンゴル帝国滅亡後、各国は宗教を「統制」した。各国の民族や地域に適合した宗教が確立すると思想的な安定がもたらされ、成熟した近代社会を確立する礎となった

小野 7

## まとめ

# モンゴル帝国の衰退に関わる2つの視点

中国

- 宗教秘密結社の結束力による反乱を教訓に宗教を統制
- 「白蓮教」は正教から変化し邪教宗教秘密結社となった
  - 元の政策が庶民の生活に直接的な影響を及ぼし不満が募り「紅巾の乱」へつながった
  - 現代中国は宗教を社会主義に適應するように統制している

ロシア(ルーシ)

- ロシア正教を軸とした統治に正統性を与えた
- ルーシは異教に寛容だったモンゴルを「選んで」の支配を受け入れ、一定のルールに従いつつ自律していった
  - 「タタールのくびき」程の圧政は無かった
  - 現代ロシアはロシア正教が政治のバランスを動かしていた

反乱

モンゴル

独立



モンゴルの寛容な思想と進化型組織

- シャーマニズムを信仰し、様々な地域の思想が反映され仏教思想をもちり込んで独自の世界観を持っていた
- 組織構造は、戦争を自己目的に組織が勝手に拡大再生産してゆく自動装置のようであり、進化型組織である「ティール組織」であった可能性がある



## フィールドワーク

### フィールドワーク実績

#### ロシア(ルーシ)

- ❑ 栗生沢 猛夫 (くりうざわ たけお)  
(著書『タタールのくびき』など、北海道大学名誉教授)
- ❑ 宮野 裕 (みやの ゆたか)  
(著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など、岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授)

#### 中国

- ❑ 山田 賢 (やまだ まさる)  
(著書『移民の秩序』『中国の秘密結社』等、千葉大学副学長)
- ❑ 菊池 秀明 (さくち ひであき)  
(著書『広西移民社会と太平天国』『ラストエンペラーと近代中国』など、国際基督教大学アジア文化研究所長)

独立

#### モンゴル

反乱

- ❑ 赤坂 恒明 (あかさか つねあき)  
(著書『ジュチ腐語政権史の研究』ラシード=アッディーン『集史』翻訳など、内蒙古大学蒙古学学院蒙古歴史学系の特聘副研究員)
- ❑ 川口 琢司 (かわぐち たくじ)  
(著書『ティムール帝国支配層の研究』『ティムール帝国』など、藤女子大学文学部講師)

### フィールドワーク(1) : モンゴル帝国とロシアの関係

ロシア

#### 宮野 裕 (みやの ゆたか) 教授

- ・ 岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授
- ・ 著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など

2023/07/29 「モンゴルとロシア(ルーシ)」



出版：宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』(NHK出版、2023年6月)

丸岡下 岐阜公園

## フィールドワーク(1)：モンゴル帝国とロシアの関係 ロシア

### 1. 「タタールのくびき(モンゴル帝国による圧政)」は後から作られたイメージ

- 1250-1480年(240年間)のモンゴル(タタール)の支配の中で、当時のルーシ地域の民は「くびき」という憎悪の認識は無かった
- 13世紀当時の知識人「ロシア正教会聖職者」により自己中心的に残された被害者側史料から19世紀の人々が受容し「モンゴル=悪」という被害者意識の中で「タタールのくびき」という黒歴史として語り継がれてしまった結果である
- モンゴル側の主張(文書)は中国・イラク方面については残っていたが、ロシア方面についての文書はほとんど残っていないため、ロシア側の一方的な言い分のみが残っている
- 16世紀初頭、ジョチ・ウルス崩壊後、ロシアのイヴァン雷帝はカザン・カン国他などを征服。その後のシベリア統制において、タタールの慣行を一部利用したため、ロシアがモンゴルを「相続」したとする見方もあったが一つの側面に過ぎない



タタールの「くびき」は無かった



1902年セルゲイ・イワノフ画「バスカク」も無かった

「タタールのくびき」も「ロシアはモンゴルの後継者」も  
どちらも極端すぎる見方である

## フィールドワーク(1)：モンゴル帝国とロシアの関係 ロシア

### 2. 西欧はカトリックの圧力が激しく、宗教に寛容なモンゴルをルーシ諸侯が選んだ

- 13世紀初頭のルーシでは、東ローマ帝国が滅亡し(1204年)、統一政権がくずれ、群小の公国が乱立していた最中、モンゴル帝国軍がルーシへ侵攻(1250年)
- 西欧からは、ローマ教皇率いるカトリック教会の圧力があつた。教義・信仰の強要や、ドイツ騎士団などの侵攻もあり、ルーシ地域の「正教会」としてはカトリック側と手を結ぶ選択は無かった
- モンゴル帝国の統治は、モンゴルの慣習や納税など一定のルールに従う限り、ある程度の自律が許されていた(外れた行為については、厳しい罰を与えられた)
- モンゴルはシャーマニズム(チンギスは「天(神)」の代理人)を持っていたが、宗教には寛容でキリスト教、仏教、イスラム教等、自由に信仰できた

【ロシア正教会とは】  
キリスト教会の教派で、カトリック教会、プロテスタント教会と並ぶ3大教派の1つ。このうちロシア正教会は最大規模の独立正教会。現代のロシアでは正教徒が多数派を占める。



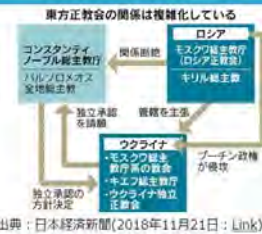
ルーシの諸侯たちは、正教会と共に、  
モンゴル(タタール)への従属を選択し朝貢国となった

## フィールドワーク(1)：モンゴル帝国とロシアの関係 ロシア

### 3. 現代のロシアへの影響

- ロシアはモンゴル帝国の支配を経て、西欧でもなくアジアでもないユーラシアの超大国になったことは事実
- ソ連時代は宗教が禁止されていたが、1988年にゴルバチョフが信仰の自由を認めロシア正教会が復活。現在もロシア国民が信仰している最大の宗教が「正教」である
- ウクライナでは、モスクワ総主教庁系の「ウクライナ正教会」があつたが、モスクワからの独立を望む勢力が「ウクライナ独立正教会」を設立。ただし「勝手な独立」は許されず、コンスタンティノープル総主教庁も認めなかったが、ロシアのクリミア併合など多様な理由により、2018年に「ウクライナ独立正教会(ウクライナ正教会・キエフ総主教庁、ウクライナ独立正教会を統合)」が発足、これらの正教会に及ぶ不和が「モスクワとコンスタンティノープルの断交」に発展
- キエフにしかなかった「ウラジーミル大公(ロシア正教をもたらした人物)の銅像」をモスクワのクレムリン横に立て、キエフがロシアの古都であることを主張
- ロシア正教会の総主教は、ウクライナ侵攻を積極的に支持

ロシアにおいて宗教と政治は密接に繋がっている



出典：日本経済新聞(2018年11月21日：Link)



出典：NHK「国際報道2023」2023年4月17日放送

## フィールドワーク(1)：モンゴル帝国とロシアの関係 ロシア

**まとめ** 西欧カトリックは強硬な侵攻や改宗の強要があった一方、モンゴル帝国は宗教に寛容で教会に免税も認めためルーシはモンゴル(タタール)の支配を受け入れ、一定のルールに従いつつ自律していた



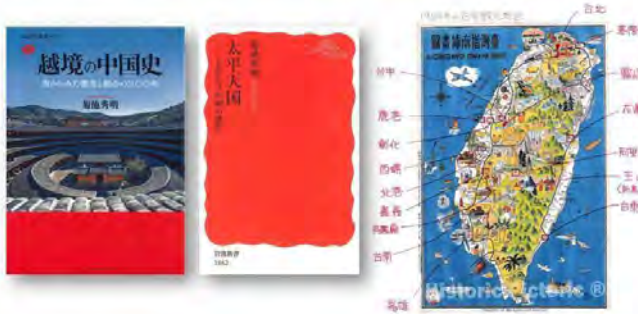
宗教が政治のバランスを動かしていた

## フィールドワーク(2)：台湾の宗教と政権の関係 中国

菊池 秀明 (きくち ひであき) 教授

- 国際基督教大学アジア文化研究所所長
- 著書『越境の中国史—南からみた衝突と融合の三〇〇年』  
『太平天国—皇帝なき中国の挫折』など

2023/08/12 「台湾の民間信仰と公権力—2023年7月の調査から—」



多摩大学六学舎 品川キャンパス

## フィールドワーク(2)：台湾の宗教と政権の関係 中国

### 1. 台湾の「廟」に見られる宗教と統治の関係

- 台湾では、大陸から渡ってきた漢人の民間信仰である媽祖を祀った廟(寺院)が多い(媽祖：まそ、天上聖母、航海の安全を守る女性神)
- 媽祖廟には清の権威のある皇帝や將軍等の書が描かれた「扁額」や「碑文」が多く奉納された
- 奉納者は財を成した者、反乱を鎮圧した軍人などの権力者で、扁額は彼らの「権威の象徴」だった
- 多くの人々の目につく場所である廟(寺院)に、扁額や碑文を設置することで「権威を示す装置」として宗教を政治に利用した
- 鄭成功から国民政府まで歴代台湾の政権は「外来政権」であり、漢人移民の宗教施設に庇護を与えることで、統治の正当性を主張した



台南・天宮宮の廟神と対峙し清朝臣籍だった統軍の名も)

媽祖に代表される漢人の民間信仰は、公権力の公認・庇護を受けつつ、有力移民の支配秩序を支えるネットワークとして機能した

## フィールドワーク(2) : 台湾の宗教と政権の関係

中国

### 2. 台湾と中国大陸との相違点

- 【中国】では、天命を受けた君主(天子)が天下を統治するという思想があり、壮麗な王宮などを建築することで天命を受けたことを表した  
→ **権威の象徴=王宮(建築物)**というシステム
- 【台湾】では、大陸の統治が直接的に及ばないため、現地の権力者の権威を正当化するツールを必要とした  
→ 媽祖廟の「匾額」や「碑文」が**権威を示す装置**として利用された



紫禁城(明三朝と清王朝の旧皇宮に当たる伝統建築)



台南・赤崁楼と清鎮閣供奉の碑文(清州文字の碑文也)



高雄福高の媽祖像と鹿耳門の鄭成功王母像が掲げた「永徳耀光」額 (1809年)



反乱鎮圧後、乾隆帝が掲げた「永徳耀光」額 (1809年)

台湾では統治者の権威を示す装置として「宗教」を**間接的に利用**した

## フィールドワーク(2) : 台湾の宗教と政権の関係

中国

### 3. 反乱の構造と宗教 : 台湾と中国の共通点

- 反乱の構造には中国と台湾で共通点がある
- 「中間層・富裕層」は、血縁・地縁といった**インナーサークル(セーフティネット)**があった
- 貧富の格差が広がり「貧困層」が拡大した時期に、**末世思想の宗教・秘密結社**(白蓮教など)が広まった
- それらの勢力が拡大し、蜂起につながった  
(例: 元を倒した白蓮教徒の民衆反乱「紅巾の乱」など)



信仰心を利用して、大衆を組織化し、反乱を正当化した

## フィールドワーク(2) : 民間信仰と公権力

中国

まとめ

台湾では統治者・有力者側が、中国大陸では反乱を主導した側が、それぞれに目的や方法は違うものの、**自らの権威を正当化するために宗教を利用していた**

統治側(権力者)

- 台湾の有力移民の支配秩序を支えるネットワークとして機能した
- 既存の民間信仰、皆が信じる人々の目につきやすい寺院、権威の象徴



太平天国で軍功を上げた林文察は、ライバルの財産を没収、媽祖が降臨し撃退したとし、台湾5大家族の1つとして莫大な資産を築いた

開かれた公の宗教信仰を利用

反乱側(貧窮農民・下層民衆)

- 反乱の正当化=既存の権威の否定のために、宗教=秘密結社が使われた
- 新興宗教・秘密・末世思想(信じる者だけが救われる)  
例: 白蓮教による紅巾の乱(1351年~)  
太平天国の乱(1851年~)



紅巾をまとった白蓮教徒がモンゴルを倒したことを描いた絵

閉じられた宗教信仰(秘密結社)を利用

統治側、反乱側ともに**権威の正当化に宗教を利用**した

## 【残課題】気づき・今後調べていきたいこと

### 歴史的位置付けのさらなる整理

- ・ モンゴル帝国の中での宗教の位置付けは？
- ・ 元の権力を転覆させた白蓮教の詳細調査
- ・ ルーシから「ロシア」への変遷の確認
- ・ 中国、ロシアそれぞれのモンゴルとの関係に類似性はあるか？
- ・ キリスト教カトリックと、正教、ロシア正教の関係は？
- ・ 中国で権力を揺るがした宗教や秘密結社の例を調査
- ・ 中国では台湾のような寺院や扁額での宗教の政治利用はなかったのか？

### 現代的意義へのチャレンジ

- ・ 現代のロシアにおける宗教の影響は？
- ・ 現代の中国の宗教とイデオロギー(共産党)の関係は？
- ・ デモクラシーが発生する前の時代に、権力の転換をもたらす力の一つとして宗教が果たした役割は？

## アジアダイナミズム班 活動記録 (1)

| 回  | 日付        | 議題                                      | 発表者    | 発表テーマ、文献調査、フィールドワーク                    | 備考                             |
|----|-----------|---|--------|--|--------------------------------|
| 1  | 2023/4/15 | ・自己紹介<br>・今年度テーマ方向性                     |        |  | ・春学期スケジュール確定<br>・(参考文献)中国の秘密結社 |
| 2  | 2023/4/22 | ・中国の宗教の位置づけ<br>・参考資料を読んだ問題意識発表(1)       | 高、日高、杉 | 「中国の秘密結社」                              | ・メンバー確定<br>・連絡用Classroom作成     |
| 3  | 2023/5/13 | ・仮題『モンゴル帝国と宗教・秘密結社』<br>・問題意識発表(2)       | 村上、後見  | 「中国の秘密結社」                              | (参考文献)論文起案例                    |
| 4  | 2023/5/20 | ・ゼミ員・副ゼミ長確定<br>・問題意識発表(3)               | 高、福崎   | 「中国の秘密結社」                              | ・共同作業用Google Drive設定           |
| 5  | 2023/5/27 | ・問題意識発表(4)<br>・研究計画発表へ向けスケジュールとアクションプラン | 日高、小柳  | 「中国の秘密結社」ほか                            | 吉島学長より、ロシアとモンゴルの関係について指摘       |
| 6  | 2023/6/3  | 新テーマ:ロシアとモンゴルについて議論                     | ～      | 「中国の秘密結社」<br>「Empire's Twilight」<br>など |                                |
| 7  | 2023/6/10 | 中間発表に向けて発表・議論(ロシア)                      | 杉      | 「タタールのくびき」<br>「イースターゼーション」<br>など       |                                |
| 8  | 2023/6/17 | 研究計画発表の資料作成                             | ～      |  |                                |
| 9  | 2023/6/24 | 研究計画発表                                  | 全員     |  |                                |
| 10 | 2023/7/1  | 中間発表に向けて発表・議論(中国)                       | 高      | 現代中国の秘密結社、中国の秘密結社の3パターン                |                                |
| 11 | 2023/7/8  | 中間発表に向けて発表・議論(中国)                       | 日高     | 紅巾の乱と白蓮教                               |                                |
| 12 | 2023/7/15 | 中間発表に向けて発表・議論(中国)                       | 中西     | 「欧米社会の集団意識とカルト狂信群」                     |                                |

## アジアダイナミズム班 活動記録 (2)

| 回          | 日付            | 議題                   | 発表者        | 発表テーマ、文献調査、フィールドワーク         | 備考          |
|------------|---------------|----------------------|------------|-----------------------------|-------------|
| 13         | 2023/7/22     | 中間発表に向けて発表・議論(ロシア)   | 杉          | 「『ロシア』はいかにして生まれたか-タタールのくびき」 |             |
| 14         | 2023/7/29     | フィールドワーク(宮野俊先生)      | ～          | モンゴル帝国とロシアの関係               |             |
| 15         | 2023/8/12     | フィールドワーク(菊池秀明先生)     | ～          | 台湾と中国の宗教                    | @大学院品川キャンパス |
| 16         | 2023/8/15     | 合宿発表資料準備             | 全員         |                             | オンライン       |
| 17         | 2023/8/18     | 合宿発表資料準備             | 全員         |                             | オンライン       |
| 18         | 2023/8/22     | 合宿発表資料準備             | 発表担当者      |                             | オンライン       |
| 19         | 2023/08/23-24 | 合宿・中間発表              | 発表担当者      |                             | @福根水明荘      |
| <b>秋学期</b> |               |                      |            |                             |             |
| 17         | 9/30          | 秋学期前向き紹介。これまでの研究内容共有 |            |                             |             |
| 18         | 10/7          | 各自テーマに基づき発表          | 小柳         |                             |             |
| 19         | 10/14         | 各自テーマに基づき発表          | 高橋、佐々木、二本柳 |                             |             |
| 20         | 10/28         | 各自テーマに基づき発表          | 高          |                             |             |
| 21         | 11/4          | 各自テーマに基づき発表          | 齊藤、日高、野中   |                             |             |
| 22         | 11/11         | 各自テーマに基づき発表          | 村上         |                             |             |
| 23         | 11/18         | 各自テーマに基づき発表          | 高橋、杉       |                             |             |
| 24         | 11/25         | 各自テーマに基づき発表          | 中西、佐々木     |                             |             |

## アジアダイナミズム班 活動記録 (3)

| 回  | 日付    | 議題                     | 発表者 | 発表テーマ、文献調査、フィールドワーク | 備考 |
|----|-------|------------------------|-----|---------------------|----|
| 25 | 12/2  | 各自テーマに基づき発表、最終発表に向けて議論 |     |                     |    |
| 26 | 12/9  | 各自テーマに基づき発表、最終発表資料準備   |     |                     |    |
| 27 | 12/16 | AL祭                    |     |                     |    |
| 28 | 12/23 | 最終発表・論文提出              |     |                     |    |

## 参考文献・論文 (1) 参考文献・論文: 計141件

- 山田 實 『中国の秘密結社』 (講談社、1998)
- 車柳孝仁 『紅巾の乱研究の動向と課題』 (兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第1号、1995年3月、1995)
- 『世界史』 宋と元の時代 モンゴル人の支配 5分でわかる！ 莫大な統治の仕組み (TryIt 高校世界史B、)
- Bickers, Robert, and Tiedemann, R.G. 『The Boxers, China, and the World』 (Rowman & Littlefield Publishers、39275)
- Own, David, and Heidhuys, Mary F. Somers 『Secret Societies Reconsidered: Perspectives on the Social History of Early Modern South China and Southeast Asia』 (Routledge; 1st edition、34324)
- Heckethorn, Charles William 『The Secret Societies of All Ages and Countries: Volume One』 (1897) (Independently published、42432)
- StudySmarter 『Decline of Mongol Empire』 (https://www.study smarter.co.uk/、)
- 『The Decline and Fragmentation of the Mongol Empire, 1256-99』 (https://www.massolit.io/、)
- Jackson, Peter 『From Genghis Khan to Tamerlane: The Reawakening of Mongol Asia』 (Yale University Press、2024)
- 『The Yuan dynasty in China (1279-1368) - Decline of Mongol power in China』 (https://www.britannica.com/、)
- Morgan, David 『The Decline and Fall of the Mongol Empire』 (Cambridge University Press、40087)
- Bennett, H, Ryan 『THE RISE AND FALL OF THE MONGOL EMPIRE: THE FALL DUE TO INTERNAL STRUGGLE AND DISEASE』 (https://www.academia.edu/42844)
- 杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後』 (講談社、2016)
- 寺島英郎 『人間と宗教』 (弘文堂書店、2021)
- 東郷孝仁 『社造と紅巾の乱—元末「紅巾」 登場の背景』 (兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第3号、1997年3月、1997)
- 東郷孝仁 『徐壽輝西系紅巾軍の内部構造—元末天完政権の権力と限界』 (兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第7号、2001年6月、2001)
- 野口鉄郎 『明代白蓮教史の研究』 (雄山閣、1986)
- 綾部恒雄 (監修)、野口鉄郎 (編集) 『結社が描く中国近現代(結社の世界史2)』 (山川出版社、2005)
- 綾部恒雄 (監修)、福田アジオ (編集) 『結集・結社の日本史(結社の世界史1)』 (山川出版社、2006)
- 綾部恒雄 (監修)、橋本直志 (編集) 『アソシエイションで読み解くフランス史(結社の世界史3)』 (山川出版社、2005)
- 綾部恒雄 (監修)、川北勉 (編集) 『結社のイギリス史(結社の世界史4)』 (山川出版社、2005)

## 参考文献・論文 (2) 参考文献・論文: 計141件

- 綾部 恒雄 『クラブが作った国 アメリカ(結社の世界史5)』 (山川出版社、2005)
- 堀上寛 『明の太祖 朱元璋』 (筑摩書房、2020)
- 堀上寛 『永楽帝—皇帝秩序の崩壊』 (講談社、2012)
- 『秘密結社 世界を動かし続ける沈黙の集団』 (日経ナショナルジオグラフィック社、2018)
- 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡(上)』 (講談社、35205)
- 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡(下)』 (講談社、35236)
- Wikipedia 『モンゴルのルーシ侵襲』 (Wikipedia、)
- Wikipedia 『タタールのくびき』 (Wikipedia、)
- 栗生元猛夫 『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』 (東京大学出版会、2007)
- Wikipedia 『露蒙関係』 (Wikipedia、)
- MANAEV, GEORGY 『「タタールのくびき」 モンゴル帝国のロシア侵襲・支配の実態』 (Russia Beyond、43999)
- MANAEV, GEORGY 『The Mongol invasion was the reason Russia formed』 (Russia Beyond、43999)
- Halperin, Charles 『ロシアとモンゴル—中世ロシアへのモンゴルの進軍』 (回廊新聞、39508)
- Halperin, Charles 『Russia and the Golden Horde: The Mongol Impact on Medieval Russian History』 (Indiana University Press、1987)
- Halperin, Charles 『George Vernadsky, Eurasianism, the Mongols, and Russia』 (Cambridge University Press、42762)
- Pierre, Maureen 『The Cambridge History of Russia: Volume 1: From Early Rus' to 1689』 (Cambridge University Press、2006)
- Curtin, Jeremiah 『The Mongols in Russia』 (Boston, Little Brown、1908)
- Leo de Hartog 『Russia and the Mongol Yoke: The History of the Russian Principalities and the Golden Horde, 1221-1502』 (British Academic Press、1996)
- Jackson, Peter 『The Mongols and the Islamic World: From Conquest to Conversion』 (Yale University Press、2017)
- 栗生元猛夫 『中世ロシアの法文化とモンゴル支配』 (『スラブ・ユーラシア学の構築』 研究報告集, no. 24 (2008年): 1-24、2008)
- 新橋典彦 『モンゴル・タタールのロシア支配』 (アジア研究所紀要 4 (1977年): 129-50、1977)
- 宮野 裕 『世界史のリテラシー 「ロシア」は、いかにして生まれたか 『タタールのくびき』』 (NHK出版、45056)

## 参考文献・論文 (3)

## 参考文献・論文: 計141件

44. Charles J. HALPERIN, *Russia and the Golden Horde: the Mongol impact on medieval Russian history*. Indiana University Press, 1985. (中村正己訳『ロシアとモンゴル——中世ロシアへのモンゴルの衝撃』同書新編, 2008年3月)
45. The Mongols in Russia\_03curtgoog
46. アレクサンドル・ポポフ, 越野剛, 宮野裕, 毛利公美, 佐光伸, 「軍方の知られざる人々の物語」(『スラブ研究』第52号, 2005年) 52-101
47. 伊丹敬一(著), J. フェネルル著, 宮野裕訳『ロシア中世教会史』(『ロシア史学』第167号, 2019年9月) sundashgaku\_167\_166
48. 宇山留彦『ロシアと中央アジア』(荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第17巻『近代アジアの動向——九世紀』岩波書店, 2022年7月, 集布)
49. 宮野裕「『新出の資料に関する諸語』 聖書——15世紀末のロシア・ヴォロツキーと宗主教シマとの論争の考察の前提として」(『西洋史論集』第9号, 2006年3月) 9\_82-91
50. 宮野裕「14-15世紀モスクワの国家と教会」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第57号, 2018年2月) 14-15世紀モスクワの国家と教会
51. 宮野裕「14世紀のストリゴールニキ『異端』と正統教会」(『スラブ研究』第46号, 1999年) 46-103
52. 宮野裕「15世紀におけるモスクワ教会の独立とその正当化作家——フェララ・フィレンツェ公会議後の変化を中心に」(『西洋史論集』第11号, 2008年7月) 11\_60-90
53. 宮野裕「15世紀末のロシアにおける修道院批判とヨシフ・ヴォロツキーによるその処理方法」(『西洋史論集』第8号, 2005年3月) 8\_1-24
54. 宮野裕「On the so-called "Pravosludie Mitropolich'e"」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第54号, 2015年2月) KJ00009710019
55. 宮野裕「イヴァン三世の四九七年法典における多文化性——『刑罰条規』を中心に」(『ロシア史研究』第80号, 2007年5月) 80\_KJ00004604561
56. 宮野裕「イヴァン三世時代のモスクワ国家における客廷問題と『異端者』」(『ロシア史研究』第75号, 2004年11月) 75\_KJ00002625879
57. 宮野裕「キエフ正統教コンスタンティノポリス公会議の導入のあり方を中心に」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第60号, 2021年2月)
58. 宮野裕「ストロゴールニキの『聖物』をめぐる異端の論争——『聖の教訓』について『議和』を中心に」(『西洋史論集』第1号, 1998年7月) 1\_1-14
59. 意野裕「『キエフ正統教の教会規定——解説と訳注』(『北学人文研究』第2号, 2009年3月) 05\_p81-100
60. 空野裕「ヨシフ・ヴォロツキーの『ノヴゴロドの異端者』像——中世ロシアの異端論争『聖書』 聖書編纂版を中心に」(『西洋史学』第212号, 2003年) 212\_44
61. 空野裕「ロシア・ビザンツ」(『史学雑誌』第114巻第5号, 2005年5月, 『2004年の歴史学回顧と展望』『ヨーロッパ』『中世』114\_KJ00003653717
62. 宮野裕「ロシア正教会の異端対策の展開——15世紀のストロゴールニキ異端への対策を中心に」(『ロシア史研究』第67号, 2006年10月) 67\_KJ00001526626
63. 宮野裕「十四世紀後半から十五世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力」(『ロシア史研究』第98号, 2016年7月) 98\_3
64. 宮野裕「十五世紀末のロシア正教会における正統と異端——『ノヴゴロドの異端者』を中心に」(『史学雑誌』第113巻第4号, 2004年4月) 113\_KJ00003653315
65. 宮野裕「『聖書』(『ノヴゴロド』)——十六世紀前半のロシア国家における地方支配——代書と聖書」(『スラブ研究』第50号, 2003年) 50-014
66. 宮野裕「『新出資料』: V・L・ヤーン著, 松本栄三・三浦清美訳『白樺の手紙をよみました——ロシア中世都市の歴史と日常生活』山川出版社, 2001年5月」(『史学雑誌』第113巻第12号, 2004年12月) 113\_KJ00003653253
67. 宮野裕「『新出資料』: シネロポフ『16-17世紀の都市執行役とグバ——長老の構成』2014年」(『ロシア史研究』第96号, 2015年6月) 96\_KJ00010005068

## 参考文献・論文 (4)

## 参考文献・論文: 計141件

68. 宮野裕「『新出資料』: ロシアタイマノバ『古代ノヴゴロド——12世紀から15世紀前半のノヴゴロドと公の關係』2011年」(『ロシア史研究』第94号, 2014年5月) 94\_KJ00009355267
69. 宮野裕「中世ノヴゴロド国の安全保障体制——ヤーンの新著『ノヴゴロドとリトアニア』に寄せて」(『西洋史論集』第4号, 2001年3月) 4\_30-42
70. 宮野裕「中世ロシアのキリク公会議の成立——写本系統の検討及び訳注」(『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第51号, 2012年2月) KJ00007766879
71. 宮野裕「中世ロシアの教会問答集『キリクの質問』」01 (『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第61号, 2022年2月)
72. 宮野裕「中世ロシアの教会問答集『キリクの質問』」02 (『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』第62号, 2023年2月)
73. 宮野裕「『ロシア』は、いかにして生まれたか——タールのくびき」(NHK出版, 2023年6月)
74. 葉生沢猛夫・宮野裕「イヴァン四世皇帝の『一五〇〇年法典』訳と訳注」01 (『北海道大学文学研究科紀要』第116号, 2005年7月) 116\_PR115-185
75. 葉生沢猛夫・上原直之「『動乱』とロマノフ朝の始まり」(和田善樹編『ロシア史』山川出版社, 2002年8月, 一部改稿, 2023年4月, 第4章)
76. 葉生沢猛夫「モスクワ支配の開始」(和田善樹編『ロシア史』山川出版社, 2002年8月, 一部改稿, 2023年4月, 第3章)
77. 葉生沢猛夫「モンゴル支配の開始」(『タールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会, 2007年1月, 第1章)
78. 葉生沢猛夫「ロシア史におけるモンゴル支配の意味」(『タールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会, 2007年1月, 第7章)
79. 葉生沢猛夫「大公国時代の時代」(和田善樹編『ロシア史』山川出版社, 2002年8月, 一部改稿, 2023年4月, 第1章)
80. 葉生沢猛夫「ボリス・ゴドノフと彼のドミトリ——『動乱』時代のロシア」(山川出版社, 1997年6月)
81. 堀川雄三「イヴァン・レオンの時代」(和田善樹編『ロシア史』山川出版社, 2002年8月, 一部改稿, 2023年4月, 第1章)
82. 三浦清美「『聖書』: ジョーン・フェネルル著, 宮野裕訳『ロシア中世教会史』」(『ロシア語ロシア学』第50号, 2018年10月) 50\_163
83. 松本栄三「ロシア史とタール問題」(『ロシアと黒海・地中海世界——人と文化の交流史』発行社, 2016年6月, 第4章)
84. 松本栄三「ロシアと黒海・地中海世界——人と文化の交流史」(発行社, 2016年6月)
85. 川口英司「キプチャク草原とロシア」(榎山浩一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻, 岩波書店, 1997年1月)
86. 中井和夫「ウクライナ・ペラロシ」(『新出は伊東孝之・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・リトアニア』山川出版社, 1998年12月, 新編, 2023年5月)
87. 中沢教夫・宮野裕・今村栄一「『イヴァン・チチ年代記』 翻訳と注釈」11『『ガリチ・ヴォルィニ年代記』(1230~1250年)』(『富山大学人文学部紀要』第71号, 2019年8月) 71\_01-13\_Page177to270\_nakazawa
88. 中沢教夫・宮野裕・今村栄一「『イヴァン・チチ年代記』 翻訳と注釈」12『『ガリチ・ヴォルィニ年代記』(1251~1264年)』(『富山大学人文学部紀要』第72号, 2020年2月) 72\_01-08\_Page115to200\_nakazawa
89. 中沢教夫・宮野裕・今村栄一「『イヴァン・チチ年代記』 翻訳と注釈」13『『ガリチ・ヴォルィニ年代記』(1265~1287年)』(『富山大学人文学部紀要』第73号, 2020年8月) 73\_01-14\_Page229to290\_nakazawa
90. 中沢教夫・宮野裕・今村栄一「『イヴァン・チチ年代記』 翻訳と注釈」14『『ガリチ・ヴォルィニ年代記』(1287~1292年)』(『富山大学人文学部紀要』第74号, 2021年2月) 74\_01-12\_Page173to217

## 参考文献・論文 (5)

## 参考文献・論文: 計141件

91. 中沢教夫「『聖書』: 宮野裕『ノヴゴロドの異端者』 事件の研究——ロシア統一国家の形成と『正統と異端』の相克』(発行社, 2009年8月)」(『ロシア史研究』第87号, 2010年12月) 87\_KJ00008426925
92. 土師恒之「ロシア・ロマノフ王朝の大地」(『開拓の世界史』第14巻, 講談社, 2007年3月, 講談社学術文庫2386, 講談社, 2016年9月)
93. 野田仁『露清帝国とカザフスタン』(東京大学出版会, 2011年3月)
94. 和田善樹「『ロシア』の成り立ち」(和田善樹編『ロシア史』山川出版社, 2002年8月, 一部改稿, 2023年4月, 序章)
95. Empire's Twilight\_Robinson\_Chap4
96. 真育雅彦, 澤田瑞穂校注『校注波羅詳解——中国民間宗教法研究資料』(道教刊行会, 1972年3月)
97. 菊池秀明『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』(講談社選書メチエ1776, 講談社, 2022年12月)
98. 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』(史料編『蘭学』1998年2月)
99. 菊池秀明『太平天国——皇帝なき中国の挫折』(岩波新書新装版1862, 岩波書店, 2020年12月)
100. 藤村が福く中国近現代
101. 二石豊志『中国の千年王朝』(東京大学出版会, 1991年4月)
102. 三谷孝『現代中国思想研究』(岩波書店, 2013年12月)
103. 山崎謙『アジア地域における近世的国家形成——四、五世紀の危機と再生』(荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『構造化される世界——四〜九世紀』岩波書店, 2022年11月, 集布)
104. 山田眞『移民の秩序——清代四川地域社会史研究』(名古屋大学出版会, 1995年1月)
105. 山田眞『中国の秘密結社』
106. 四日市康博『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』(荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『構造化される世界——四〜九世紀』岩波書店, 2023年4月, 集布)
107. 山川知子『宗法化する世界——宗教・国家・民衆』(荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『構造化される世界——四〜九世紀』岩波書店, 2022年11月, 集布)
108. 孫江『近代中国の革命と物語性——中国革命の社会的研究一九五〜一九五五』(『岩波講座72』岩波書店, 2007年3月)
109. 孫江『近代中国の宗教・権力』(『岩波講座103』岩波書店, 2012年6月)
110. 孫江『中国の『近代』を問う——歴史・記憶・アイデンティティ』(『岩波講座70』岩波書店, 2014年6月)
111. 瀧本弘之編『中国古典文学挿画集』10『小説集』04 (『皇明英烈伝』など, 遊子館, 2017年1月)
112. 中野明徳『江南』02『学術の市場』
113. 堀田誠之『社文化史研究——明代以降を中心として』(第一書房, 2000年9月)
114. 浜本浩志編著『版木社会の集団意識とカルト症候群——少年十字軍、千年王国、魔女狩り、KKK、人権主義の生成と運命』(碩石書店, 2015年9月)



## 参考文献・論文 (6)

参考文献・論文: 計141件

115. 鈴木中正編『千年王國的民衆運動の研究——中国、東南アジアにおける』（東京大学出版会、1982年2月）
116. Lucas de SOUSA・羽美穂子『奴隸たちの世界史』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『構造化される世界——四〜九世紀』岩波書店、2022年11月、問題群）
117. 久保一之・木村暁・井上尚『ポスト・モンゴル期』（小松久男・荒川正晴・岡野悠編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社、2018年4月、第5章）
118. 久保一之『ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き』（横山純一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
- 近藤徳彰『シフアブイー帝国におけるシーア派法統争の兆候』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻『西アジア・南アジアの帝国——六〜八世紀』岩波書店、2023年1月、問題群）
119. 荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第10巻『モンゴル帝国と海域世界——二〜四世紀』（岩波書店、2023年4月）
120. 坂本龍『未完のトルキスタン国家』（『トルコ民族の世界史』講談社現代新書1327、講談社、1996年10月、改題し、慶應義塾大学出版会、2006年5月、新版、2022年5月、第4章）
121. 山下聖久『一四〜一五世紀における「パワーポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝國間関係の変容』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『構造化される世界——四〜九世紀』岩波書店、2022年11月、問題群）
122. 志茂隆敏『モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討』（横山純一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
124. 寺島東郎監修『モンゴル帝国とユーラシア史』小笠原弘幸『オスマン正統とその正統性——血統、屬性、カリフ』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻『西アジア・南アジアの帝国——六〜八世紀』岩波書店、2023年1月、焦点）
125. 森川龍雄『ポスト・モンゴル時代のモンゴル——海路への架け橋』（横山純一ほか『岩波講座世界歴史』第11巻、岩波書店、1997年1月）
- 貴下裕之『ムガル帝国における国家・法・地域社会』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻『西アジア・南アジアの帝国——六〜八世紀』岩波書店、2023年1月、問題群）
127. 杉山正明『『諸島のユーラシア』（『開拓の世界史』第9巻『モンゴル帝国と異いその後』講談社、2008年2月、講談社学術文庫2352、2016年4月、第7章）
129. 赤坂哲朗『ジュズチ蘇維埃政史の研究』（風間書房、2005年2月）一部ナシ
- 川口悠司『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『モンゴル帝国と海域世界——二〜四世紀』岩波書店、2023年4月、焦点）
130. 川口悠司『ティムール帝国』（講談社選書メチエ570、講談社、2014年3月）
131. 早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究——現状と展望』（明石書店、2011年6月）
- 島田直登『構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第11巻『構造化される世界——四〜九世紀』岩波書店、2022年11月、展望）
133. 林佳世子『西アジア・南アジアの近世帝国』（荒川正晴ほか『岩波講座世界歴史』第13巻『西アジア・南アジアの帝国——六〜八世紀』岩波書店、2023年1月、展望）

## 参考文献・論文 (7)

参考文献・論文: 計141件

135. 佐伯富『中国歴史の研究』（法政文化社、1987年）
136. 宮澤和之『権勢に見る元代民間の通貨ルール』（2005年）
137. 高橋弘彦『元朝通貨政策成立過程の研究』（1994年）
138. 矢崎正見『チベットに対する元朝の宗教政策』（1970年）
139. 野口誠爾『元末のいわずゆる東洋紅巾軍諸勢力について——幹子興と芝琳李——』（1974年）
140. 東郷孝仁『紅巾の乱研究の動向と課題』（1995年）
141. 清水俊毅『経済と宗教』（2014年）

ご清聴ありがとうございました

地理：モンゴル帝国のアジア統一（1300年頃）



地理：モンゴル帝国が衰退、明の時代（1400年頃）



地理：清の時代（1700年頃）



地理：現代（2019年）



### アジアダイナミズム班

学部生：野中、高、中西、村上、日高

大学院生：杉、須貝、小柳、高橋、二本柳、佐々木、斎藤

指導教員：金美德、水盛涼一

# 執筆担当

|                               |        |
|-------------------------------|--------|
| はじめに                          | 杉由紀    |
| 背景                            | 須貝直行   |
| <b>第I部 モンゴル帝国の宗教と組織</b>       |        |
| 第1章 モンゴルの宗教                   | 野中柊希   |
| 第2章 モンゴル帝国の組織構造               | 二本柳誠一  |
| 第3章 帝国主義から見たモンゴル帝国            | 村上智也   |
| <b>第II部 中国の視点:元から明への移行と宗教</b> |        |
| 第4章 モンゴル帝国の存亡に宗教はどうか影響したか     | 斎藤千恵子  |
| 第5章 モンゴル帝国の経済政策と民衆            | 佐々木真友美 |
| 第6章 明の初代皇帝・洪武帝と白蓮教との関係        | 佐々木真友美 |
| 第7章 元を倒した白蓮教とその変化             | 高橋繁世   |
| 第8章 白蓮教は元の民衆にとって真の革命家だったのか    | 日高健多   |
| 第9章 白蓮教と現代中国の宗教統制             | 中西昂翼   |
| 第10章 秘密結社はどうか政治的影響力を及ぼしたのか    | 高秀柄    |
| <b>第III部 ロシアの視点</b>           |        |
| 第11章 タタールのくびき論争とその実態          | 須貝直行   |
| 第12章 ロシアとモンゴルの関係に与えた宗教の役割     | 杉由紀    |
| 第13章 歴史における宗教と政治              | 小柳愛理   |
| おわりに                          | 杉由紀    |

## 謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長をはじめとする多くの先生方、卒業生より、毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野から多くの助言を頂きました。

アジアダイナミズム班の指導教員である金美德教授、水盛涼一准教授には、テーマ設定から文献研究、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、モンゴル帝国史のみならずアジア・ユーラシア史および世界の歴史、グローバル・ヒストリーから紐解く現代的意義、現代に生きる私たちが持つべき視座についてきめ細かい指導を頂きました。

また、フィールドワークに応じてくださった、菊池秀明・国際基督教大学アジア文化研究所所長、および宮野裕・岐阜聖徳学園大学教育学部教授のお二方にも深く感謝申し上げます。最新の研究結果をわかりやすくレクチャーしていただくとともに、我々学生の拙い問題意識と質問に丁寧にお答えいただきました。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力頂いた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2024年1月27日

多摩大学インターゼミ アジアダイナミズム班一同